

協同教育実践資料 24

授業を鍛える・授業で鍛える

—小松市立国府中学校2017～2018年の取り組み

小松市立国府中学校 著
西田誠一・杉江修治 監修

授業を鍛える・授業で鍛える
—小松市立国府中学校2017～2018年の取り組み

小松市立国府中学校 著
西田誠一・杉江修治 監修

はじめに

今から 13 年前、当時私は能美市の根上中学校で研究主任として、「PISA 型読解力」をテーマとした指定研究の推進に苦戦していました。「フィンランド・メソッド」を自己流に解釈した方法論が先行し、今振り返ると、自分の中に明確なめざす授業や生徒の姿が描けないままスタートした研究でした。

そのような状態で、杉江先生との最初の出会いがありました。小松駅にお迎えに行き、学校までの間、旧北国街道に沿った街並みを見ながら、最初の話題は「うだつ」であったことを覚えています。どこから切り出したものかと思ひ悩みながら研究の話に触れたとき、「授業づくりの原則は変わらない。明確なねらいを持つ授業づくり、その学びの手ごたえ、価値を感じる生徒の姿がゴール。」と、さらりと話されました。今は、それが授業づくりの根幹をなすものであることがわかります。しかし、その時の自分の中では授業の目的がすっかりすり替わり、「PISA 型読解力」についての答えを、研究の糸口を杉江先生に求め、本質を見失っていたようです。その状態で行った提案授業は結局 90 分授業となり、「我慢した生徒が立派」と褒めて（？）いただきました。後で気づくのですが、結論が後付の研究のための研究は本当に意味がありません。

根上中学校では、2 年間、計 5 回のご指導を受けました。「教師のセレモニー」「学びの価値」「授業でしかできないことを授業で行う」「クラス全体で高めあう」「他人事・自分事」「問答」等、その都度、魅力的で厳しいご指導をいただきました。「参加・協同・成就」は杉江先生との研修で出会い、今も大切にしている言葉です。

その後、教頭、行政経験を経て、はじめて校長として赴任したのが、小松市の国府中学校でした。「授業を鍛える・授業で鍛える」は、授業を通して教師、生徒が目指す高めあう姿です。国府中学校の 3 年間は素晴らしい出会いに恵まれた、自分にとって忘れぬ経験です。授業が変われば、生徒は変わる。先生方と授業づくりについて語ったこと、はるばる遠方から来校された先生方との交流（特に、宮城県白石市立南中学校の小川校長先生はじめ、熊谷先生、佐藤先生には大変お世話になりました）、授業でいきいきと活動する生徒の姿を目の当たりにしたときの感動は、自分にとって宝物であり、幸せを感じる瞬間でした。

国府中学校では 2 年間「Compass of the Learning ～Learning makes you happy～」という冊子を作りました。「なぜ学ぶのか」をそれぞれの教師が、教科の特性を通して生徒に語る、と言うテーマでまとめたものです。その冒頭、『「知恵」という言葉の、知は「学び」に、「恵」は幸せにつながるとても美しい言葉です。学ぶことは人を豊かにし、幸せに導きます。世の中の進歩は、今以上により良くしたい、良くなりたいたいという願いと、学びの連鎖です。』と書きました。「協同的な学び」の先に見えてきたものは、子どもたちの幸せです。そのことを思い、学校での学びが学校の中で閉じてしまわないように、未来につながる予感が感じられる授業を、先生方とともに目指そうと思いました。「協同学習」の理念を取り込んだ実践的な研究を推進すること、それが校長としての経営方針でした。

手の届く範囲で目標を掲げ、月 1 回の校内研修会で積み上げていく研究スタイルをとりました。その中で、多少乱暴な言い方ですが、必要性を感じたことや面白いと感じたことは、ためらわずに提案し、まず取組み

ました。

今では当たり前となった男女ペアの座席配置、単元マップの活用、宿題を生かし広め・深めることを中心とした授業づくり等の工夫は、協同的な活動の中に生徒の活躍の場があり、クラス全体でゴールに向かい高めあい、学びの価値に迫るための手立てとして位置づけられ、すぐになじんだものとなりました。

校内研修会では、特に授業参観が設定された研修を大切にしてきました。指導案をもとに「ねらい」や「ゴールの姿」、「課題の設定」や「深める場面」について、具体的に生徒と共有できるよう先生方と議論しました（これは、私にとって大変に楽しい作業でした）。特にこの間、研究授業は若手の先生方から 5 名、お願いすることにしていましたので、一年ごとに力をつけていく先生方の姿は、他の先生方、私にとっても大きな刺激と励みとなりました。

また、授業に対する生徒評価も大切にしました。公開や研究授業では、「ねらい」「学び方」「教科の良さ」「(授業における) 成功体験」「根拠を明らかにした説明」の 5 項目についてマークシートを利用し、生徒アンケートを取りました。参観した先生方の見立てと、生徒の手ごたえがみごと一致し、結果分析とともに有効に次へとつながれたと感じています。

2019 年 5 月 31 日、杉江先生をお迎えした国府中学校の校内研修会へ寺井中学校より 7 名参加し、英語科の公開授業、社会科の研究授業を参観しました。また、6 月 27 日には本校でも杉江先生をお招きしての校内研修会を行いました。全体会では、魅力的で厳しいご指導をいただき、先生方とともに授業づくりについて考える大切な機会となりました。

本校における実践はまだまだ始まったばかりですが、ペアの座席配置を試みる授業もあり、その中では、いつもとは違った教室の風景、はっとする生徒たちの様子が見られます。

本校においても教師と生徒による学びが育まれる「学校文化」の風を、杉江先生のご指導を仰ぎながら吹き込んでいきたいと思っています。

末筆にはなりますが、在任中真挚に授業づくりに取組まれた国府中学校の先生方に、また、ご指導いただきました杉江先生へ感謝とお礼を申し上げます。

令和元年 7 月

能美市立寺井中学校

校長 西田 誠一

2017年度 研究主題

生徒が主体的に課題解決に取り組むための授業づくり、集団づくり

—学校研究の推進を柱に

2018年度 研究主題

生徒が主体的・協同的に課題解決に取り組むための授業づくり、集団づくり

—学校研究の推進を柱に

目次

はじめに	1
A 2017年度研究報告	
I 研究の概要	
1 研究主題設定の理由	6
2 研究構想図	7
3 研究組織	8
4 研究の方針	8
(1) 学力向上部会	8
(2) 授業づくり部会	9
(3) 集団づくり部会	9
II 研究の実践	
1 授業づくりの取り組み	
(1) 校内研修会における授業づくり・授業改善の取り組み	12
(2) 各教科等の取り組み	14
1) 国語科	14
2) 社会科	15
3) 数学科	17
4) 理 科	19
5) 英語科	21
6) 音楽科	22
7) 保健体育科	24
8) 特別支援学級	26
9) 道徳教育	27
10) キャリア教育	29
2 集団づくりの取り組み	
(1) 学級力向上の取り組み	32

(2) 国府のつどい〈生徒集会〉	33
3 家庭と連携した小中一貫学習推進の取り組み	35
Ⅲ 学校研究全体の成果と課題	37
※資料・各種アンケート結果	39
B 2018年度の研究報告	
I 研究の概要	
1 研究主題設定の理由	40
2 研究構想図	41
3 研究組織図	42
4 研究の方針	42
(1) 学力向上部会	42
(2) 授業づくり部会	42
(3) 集団づくり部会	44
II 研究の実践	
1 授業づくりの取り組み	
(1) 校内研修会における授業づくり・授業改善の取り組み	46
(2) 各教科等の取り組み	47
1) 国語科	47
2) 社会科	48
3) 数学科	51
4) 理 科	53
5) 英語科	55
6) 音楽科	57
7) 保健体育科	59
8) 特別支援学級	61
9) 道徳教育	63
10) キャリア教育	64
2 集団づくりの取り組み	
(1) 学年力向上の取り組み	66
(2) 生徒会の取り組み	69
3 学力向上パートナーシップ推進事業の取り組み	71
Ⅲ 学校研究全体の成果と課題	73
※資料・各種アンケート結果	75

※資料・平成 30 年度学力向上ロードマップ	79
付 : Compass of the Learning	81
あとがき	101

A 2017年度の研究報告

I 研究の概要

1 研究主題設定の理由

2017年度 研究主題

生徒が主体的に課題解決に取り組むための授業づくり、集団づくり 学校研究の推進を柱に

次期学習指導要領改訂の背景には、今の子どもたちが成人して社会で活躍する頃には生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会や職業の在り方そのものが大きく変化する可能性があるという認識がある。そうした厳しい挑戦の時代を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力が必要とされる。

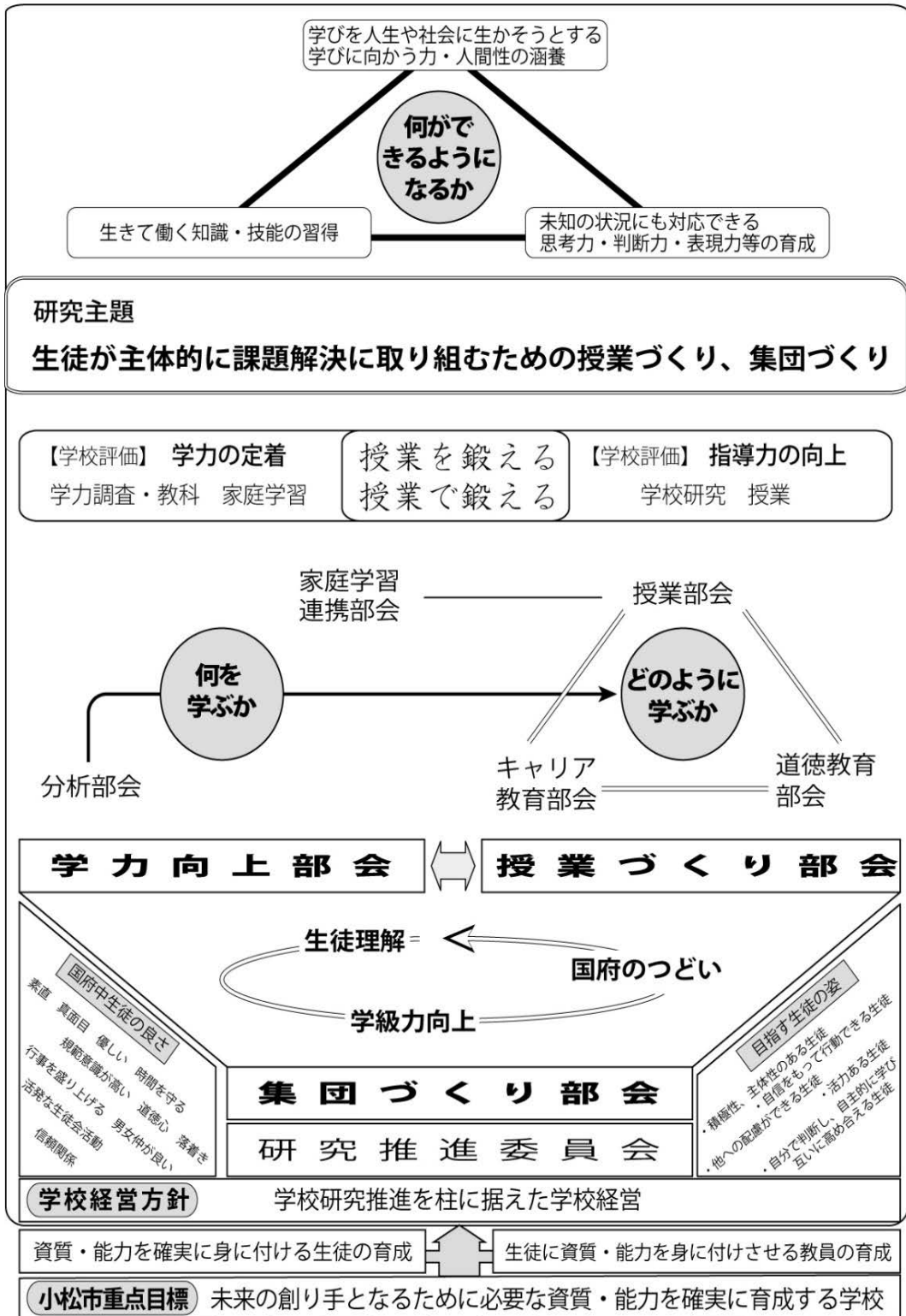
そのためには、学ぶことと社会とのつながりを意識し、「何を学ぶか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要とされる。そして、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」を確認する視点が重要である。

本校では、教育を取り巻くこのような背景に鑑み、「集団づくり」を基盤とした「授業づくり」を実践してきた。研究の成果として、目指すべき集団の理想像が明確となり、生徒自ら所属する集団（学級・学年・生徒会等）の課題に気づき、その改善に取り組む自治の姿が少しずつ見られるようになった。その点では、本校の教育目標「気づき、考え、実行する」生徒が徐々に育ってきたと捉えている。生徒の主体的な自治的活動については、今年度もさらなる進化と定着を目指す必要があると考える。

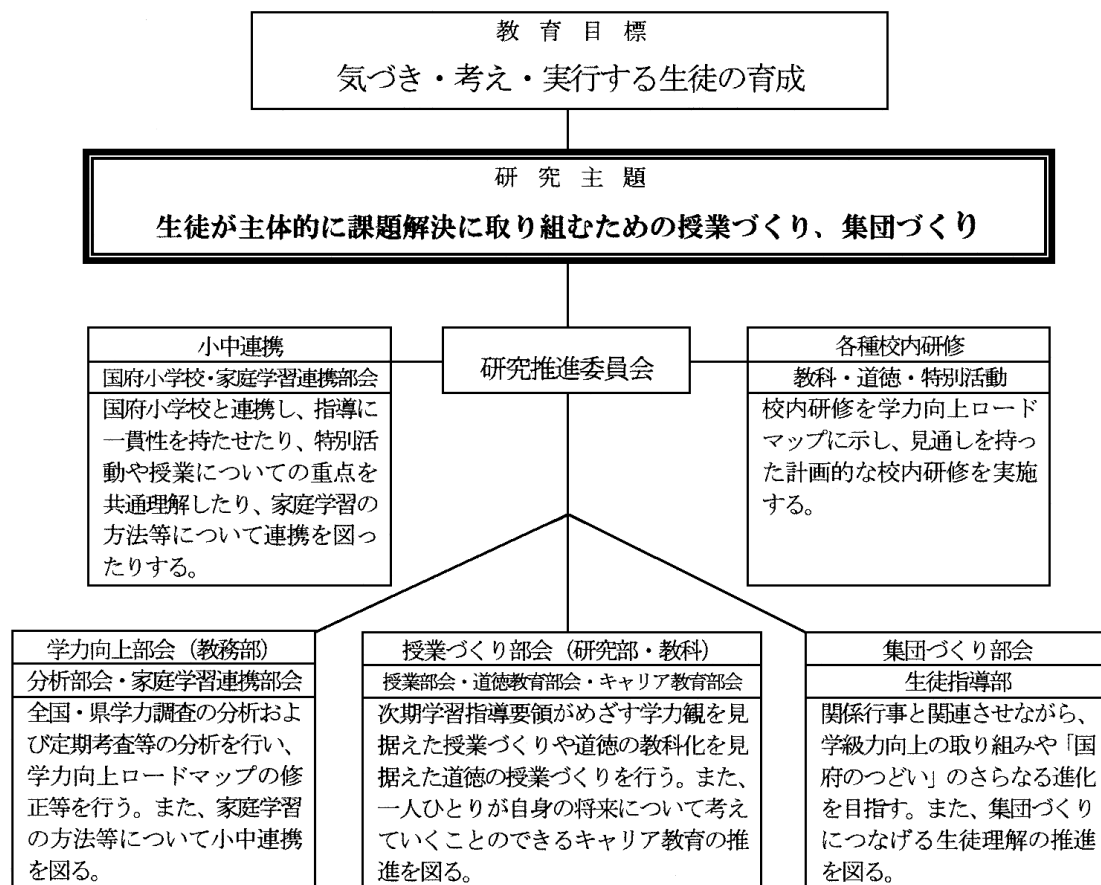
一方、授業については、求められる授業像の確立にはまだまだ到達できていない。それは、本校が目指す授業の在り方のベクトルが分散していたことが原因であると分析される。このような現状を踏まえ、今年度は集団づくりの成果を活かし、さらなる進化を目指しつつ、次期学習指導要領が求める「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」を授業で実現し、生徒自身が何を学ぶか、どのように学ぶか、何ができるようになったのかを実感することができる授業づくりを推進し、学力向上につなぐことを考え、研究主題を「生徒が主体的に課題解決に取り組むための授業づくり、集団づくり—学校研究の推進を柱に」とした。

2 研究構想図

平成29年度 学校研究構想図



3 研究組織



4 研究の方針

(1) 学力向上部会

学力向上部会には、分析部会（教務部）と家庭学習連携部会を設置した。分析部会では、全国・県学力調査、および定期考査等の分析を行い、学力向上ロードマップの修正等を行う。今年度は、学力向上ロードマップの修正に加え、各教科において基本計画となる「学期ごとのスモールステップによるPDC A」を基軸とした『学力向上プラン』を策定する。また、各教科においては、学力調査等の分析結果を元に年間計画の中に改善のための授業を明記する。定期テスト等には、分析および解説を記した「学びの道しるべ」を発行し、家庭学習に活かす。

また、家庭学習連携部会を中心に家庭と連携し、小中一貫した教育方針のもと、学校での学習内容を定着させるための効果的な家庭学習の方法の開発等について小中連携を図る（平成28、29年度「家庭と連携した小中一貫学習推進事業」の研究指定校）。さらに定期考査を実施予定の5月、7月、10月、12月、2月、3月に家庭学習強化週間を設けたり、各学年、週末課題として「新聞を読む」取り組みを実施したりして「自ら学ぶ」家庭学習の習慣化と学力の向上を目指す（学力向上ロードマップ p.79 参照）。

(2) 授業づくり部会

授業づくり部会には、授業部会（学年、教科）、道徳教育部会、キャリア教育部会を設置した。授業部会では、次ページに示す目指す授業像について全教職員が共通理解を図り、見通しをもった研修計画を立案し、授業改善を推進する。

道徳教育部会では、資料分析と中心発問に関する校内研修を7月、9月、10月、11月に実施し、教科化を見据えて授業づくりを推進する。

キャリア教育部会では、総合的な学習の時間や学級活動と関連させながら、一人ひとりが自身の将来について考えていくことのできるキャリア教育の推進を図る。

(3) 集団づくり部会

学校生活における集団には、班・学級・学年、あるいは部活動等の様々な集団がある。集団づくり部会では、学級・学年・生徒会を中心に集団づくりの取り組みを推進する。以下に柱となる取り組みを述べる。

1) 学級力向上の取り組み

学級力は目指す学級の姿を明確にし、その姿を教師と生徒が共有するために設定したものである。今年度は生徒が学校生活の場面を想定しやすくするために、4場面8項目を設定し学級力を評価することとした。その内容を下に示す。

学習について

- ・学習に対して、一生懸命に取り組むことができる学級です。
- ・自分の考えを伝えたり、友だちの考えをしっかりと聞いたりして学び合いができる学級です。

友だちについて

- ・友だちのことを理解し合える居心地の良い学級です。
- ・困っている人には思いやりの心で接することができる学級です。

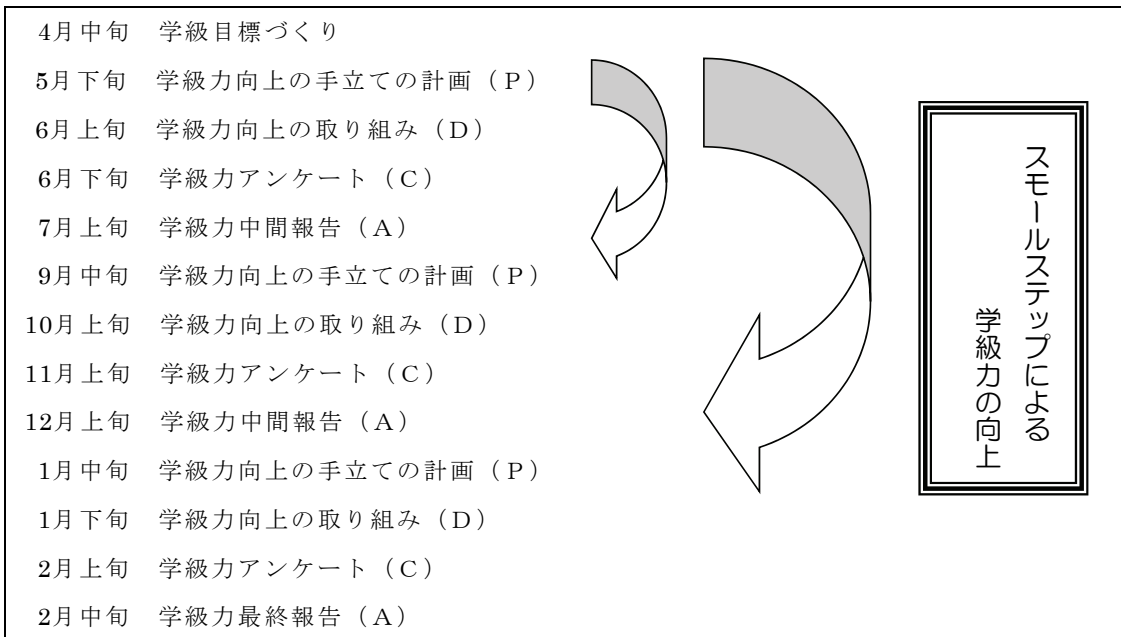
役割について

- ・学級・学年・学校の行事・活動に協力し、積極的に取り組むことができる学級です。
- ・学級（係活動・清掃・給食等）・委員会の仕事に責任をもって取り組むことができる学級です。

はじめについて

- ・規則や約束を守ることができる学級です。
- ・状況に応じた態度や言葉遣いができる学級です。

学級力向上の取り組みは、以下の日程でP D C Aサイクルを進めていく。



計画や中間報告の場面においては、学級活動における話し合い活動を積極的に取り入れる。「学びの姿」を生かしながら、協同的に学ぶ姿勢を身に付けさせる。

2) 国府のつどい

生徒の自治的活動の象徴ともいえる生徒集会「国府のつどい」は、昨年度の後期に始動した。運営は生徒会役員と各専門委員長・各学年委員長で構成された執行部会が行う。執行部会では、国府のつどいで行われる企画の提案や役割分担などを協議する。国府のつどいで取り扱う内容としては、

- ① 専門委員会での取り組みの周知やその成果報告
- ② 各学年委員会での取り組みの周知やその成果報告
- ③ 執行部会で決まった学校行事のスローガンの周知
- ④ 学級力の取り組みの報告

などである。なお、毎月の定例活動は以下のように進める。

各月第3週目・・・〈執行部会〉企画案の締め切りおよび先月の反省・今月の集会の流れの決定

各月第4週目・・・〈生徒集会〉昼休みに国府のつどいを実施

Ⅱ 研究の実践

1 授業づくりの取り組み

(1) 校内研修会における授業づくり・授業改善の取り組み

以下のような校内研修会を計画・実施し、研究主題のねらいにせまるための研修計画を立て、実践した。

1) 第1回校内研修会 (5月23日)

福井大学教育学部附属義務教育学校副校長・牧田秀昭氏を講師としてお招きし、「これから求められる授業づくり一次期学習指導要領改訂の方向性 教育課程企画特別部会の議論より」というテーマで講演形式での全体研修を実施した。牧田先生のご講演から大きく①次期学習指導要領改訂の背景、②これから求められる授業「主体的・対話的で深い学び」、③「学びの専門家」へのプロセス・教師の力量形成の3つについて学ぶことができた。

2) 第2回校内研修会 (6月2日)

中京大学国際教養学部教授・杉江修治氏をお招きし、本校学校研究「生徒が主体的に課題解決に取り組む授業づくり」について公開授業・研究授業を参観いただき、授業づくり・授業改善について研修を行った。授業では「目指す授業像」の授業改善の視点から思考を深める場の工夫に力を入れて取り組んだ。

3) 第3回校内研修会 (相互授業参観週間・1学期OJT週間) (6月5日～9日)

教員の小グループをつくり、授業参観シートに記された「目指す授業像」の授業改善の視点を踏まえながら互いの授業を参観し合い、教師の手立て、生徒の姿、タイムマネジメントについてチェックを行った。

4) 計画訪問A (第4回校内研修会) (7月13日)

中期PDCAのチェック(C)という位置づけと次へのアクション(A)という視点を踏まえ、計画訪問Aを行った。授業づくり・授業改善では以下の点について共通理解を図り、全教職員で授業づくりに取り組んだ。①「前時の授業」において、どのようなことが行われ、本時の授業にどのようにつながるか、また、本時の授業に活かされる家庭学習の課題(個人思考を課題に)を出すこと、②「目指す授業像」における5つの授業改善の視点のうち、視点④思考を深める場の設定の工夫を行い、考えを深める点に焦点化した授業づくりを目指したこと、③「生徒の学び」を検証するために視点④の工夫に対する生徒の予想される考えを明記したことである。

5) 第5回校内研修会 (7月31日)

能美市教育センター研修専門委員・長田聡氏を講師に「深く考え、語り合う道徳の時間のために」という

テーマで、ねらいと中心発問の捉え方や考えを深める授業展開について研修を行った。事前に学年ごとに①資料を深く「読み込む」、②起・承・転・結＝どんでん返し、③ねらいと中心発問を見つける（どんなねらいで授業を行うのか、中心発問で何を考えさせたいのか、考えを深めるためにどうするのか）という3つの視点で分析を行い、その後、他学年の分析について意見交換を行った。また、長田聡氏の模擬授業によって、考えを深める道徳の授業づくりについて考えた。

6) 第6回校内研修会（相互授業参観週間・2学期OJT週間）（10月2日～6日金）

1学期同様に教員の小グループをつくり、授業参観シートの「目指す授業像」の授業改善の視点を踏まえながら、互いの授業を参観し合い、教師の手立て、生徒の姿、タイムマネジメントについてチェックを行った。また、10月5日（木）には国府小学校と合同で研究授業を行い、本時の授業に活かされる家庭学習の課題（個人思考を課題に）を出すこと、「目指す授業像」における5つの授業改善の視点のうち、視点④思考を深める場の設定の工夫を行い、考えを深める点に焦点化した授業づくりを行った。

7) 計画訪問B（第7回校内研修会）（11月28日）

2学期は、「考え、議論する道徳」をテーマに道徳の授業研究を進め、特に、生徒の深い考えを導く、「ゆさぶる」発問について研修し、教科指導へと生かすことを課題として取り組んだ。授業整理会では、「中心発問によってねらいにせまる考えが引き出されていたか」「問い返し・揺さぶりによって考えが深められていたか」の2点を中心に協議し、ねらいにそった生徒の学びがあったかを検証した。教科の授業づくり・授業改善では、以下の点について共通理解を図り、全教職員で授業づくりに取り組んだ。「前時の授業」において、どのようなことが行われ、本時の授業にどのようにつながるか、また、本時の授業に活かされる家庭学習の課題（個人思考を課題に）を出すこと、「目指す授業像」における5つの授業改善の視点のうち、視点④思考を深める場の設定の工夫を行い、考えを深める点に焦点化した授業づくりを目指すこと、指導案には「生徒の学び」を検証するために視点④の工夫に対する生徒の予想される考えを明記することである。

8) 第8回校内研修会（12月14日）

今年度2回目となる中京大学国際教養学部教授・杉江修治氏をお招きしての校内研修会を実施した。計画訪問Bで見えてきた「深める」「振り返る」の場面における課題の克服のために、「授業改善」の目標として、「深める」「振り返る」に焦点化した授業を目指した。具体的には道徳の研究授業のように教科においても中心発問・中心活動をメインに展開するために、前時まで（宿題を含む）の仕込みを本時に生かす授業を意識した。深める時間や振り返る時間の捻出を工夫し、指導案・本時の展開の中には「問い返し・ゆさぶる」を明記し、生徒の学びを深める工夫を行った。

9) 第9回校内研修会（1月22日）

石川県教育委員会学校指導課主任指導主事・坂谷敦子氏をお招きし、今年度の授業づくり・

授業改善の成果と課題という視点から授業参観をしていただいた。また、新学習指導要領実施を控えて、県が抱える課題等も踏まえながら教職員の各年代に求められるキャリアアップと関連付けて、ご講演いただいた。

(2) 各教科等の取り組み

1) 国語科

①教科における授業づくりの実践

- ・「つかむ」では、各題材において、授業の初めに授業計画を生徒に渡し、毎時間の授業の流れやどんな力をつけたいかゴールの姿をイメージさせる工夫を行った。また、授業の最初は今日の課題と最終ゴールを黒板に掲示し、可視化させることで生徒に1時間の流れをつかませるようにした。
- ・「考える(個人)」場面では、2年は古典の「徒然草」のそれぞれの段の概要を読み取り、書き方の特徴を考えた。また、3年は二つの「社説」の特徴や効果などについて根拠を明確にして考えることを行った。
- ・「深める(交流)→(個人)」場面では、2年は「徒然草」の文章の特徴を、根拠を示しながら交流を通してまとめ、「私の徒然草」にふさわしい書き方を考えた。3年は二つの「社説」を比較し、「納得できた点」「納得できなかった点」をそれぞれの生徒が根拠を示しながら発表し、グループ交流を行った。
- ・「振り返る」では、授業の最後に2年は「私の徒然草」の書き方の特徴を考えることができたかどうか自己評価を授業計画に記入し振り返りを行った。3年では授業の最後に二つの社説を読み比べ、特徴や効果をそれぞれ交流を通して評価できたか確認した。

②思考を深める場の設定の工夫

- ・2年の「徒然草」では、まず「徒然草」の書き方の特徴について考えることを行った。「仁和寺にある法師」「高名の木登り」「弓の師」の概要を読み取り、4人グループの交流を通して文章の書き方の特徴をまとめた。その上で「徒然草」の文章の特徴を考え、自分の身近なでき事を「私の徒然草」として書くという授業計画である。思考を深めるためには、教師の言葉でなく、生徒自身の言葉で発表することや、「どうしてそう思うのか」など生徒自身に「ポイント」を発見させることが課題となる。そこで、「私の徒然草」を書く場合は、例文をあげ、「あなたならどんな質問をして、分かりやすくしてあげますか」と尋ねた。生徒からは「文末表現を統一したらどうか」とか「いつのでき事がわかりにくい」といった問いかけが多く出された。その時に「なぜその質問をするのか。その根拠はなにか」を発表した生徒以外の生徒に教師が問いけることで一層考えが深まったと思われる。生徒の思考を深めるための教師の問いかけが今後の課題である。
- ・3年の「二つ社説を読み比べ、特徴や効果を評価しよう」において、生徒が2つの社説を読み比べ、自分がまとめる文章に適切なのはどちらかを考えるためには、比較させることやなぜそう考えたのか、教師側の視点をはっきりさせることが課題となった。その為、「国語世論調査」の資料を読み取り、自分の考えを400字程度の意見文にまとめる授業では一つの文章を例にあげ、「友だちのアドバイスは納得いくか」という

問いかけを行い、思考を深めさせる場面を設定した。このことで生徒の視点ははずれることはなかった。しかし、400字の作文を「聞く」だけでは、生徒全てが適切なアドバイスをすることは難しかった。今後の課題である。

③成果と課題

◆成果

- ・授業計画を生徒に渡すことで、1時間の授業のねらいが明確になり、生徒が取り組みやすくなった。また、最終的なゴールを生徒が意識して授業に取り組むことができた。
- ・4人グループの交流では、例えば自分の考えを根拠をもとにして述べる生徒が多くなり、自分の考えを広めることができた。
- ・生徒の思考を深める場面では、例えば一つの例文を取り上げることにより、根拠を明確にして自分の考え深めたり、全ての生徒に授業の視点をわかりやすく伝えることができた。

◆課題

- ・思考を深めるためには教師の手順や発問が重要である。例えば、授業の大切なポイントを生徒に発見させ、発表させる。そのためには教師が「なぜそう思うのか」と問い返したり、比較させたりする。
- ・教師が何について考えて欲しいのか「視点」をはっきり示す。
- ・生徒が一つの問いを真剣に考えるための手順をしっかり示す。
- ・ホワイトボードを全グループ発表させるだけでなく、あくまでメモ代わりとして活用するなど授業の流れや生徒の反応を教師側が予測し、生徒が思考を深めていけるような発問や手順を、考えていく必要がある。

2) 社会科

①教科における授業づくりの実践

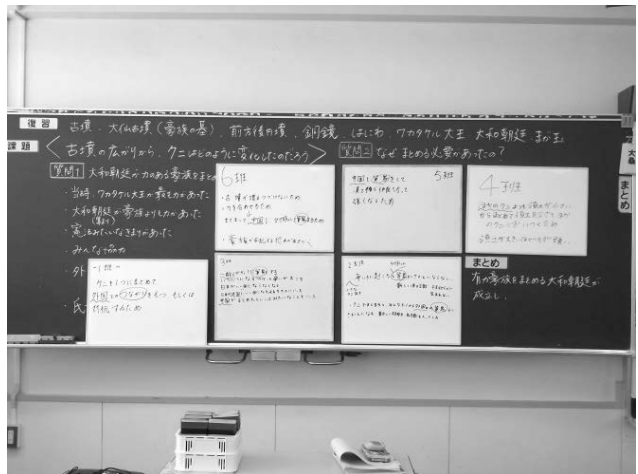
・「つかむ」において、地理では各州、歴史では各時代の学習の流れに加え、単元を通して意識させたい課題をはじめに確認させることで、課題解決に向けて取り組む姿勢を作る工夫を行った。また、授業の導入では、右図のような本時の流れをモニターに示し、課題は板書し、ノートやワークシートに書かせることで、授業のゴールの姿を示した。

・「考える(個人)」場面は、家庭であらかじめ課題に取り組みせておくことで、授業の中での交流に時間を取ることができるようにした。教科書や資料集、地図帳を用いて、調べた地形や文化の情報、資料から読み取れることを自分の言葉でまとめたワークシートを用いてペアやグループに紹介する活動から授業を始めるため、学び合いへの貢献という点で必要感のある家庭学習や課題作りを工夫した。

本時の流れ

- ① 同じ資料の人と交流(5分)
- ② グループの人に紹介(5分)
- ③ グループで深める(15分)
- ④ みんなに発表(10分)
- ⑤ まとめる(10分)

・「深める（交流）」では、予想ではなく資料を根拠に確信をもって説明できるように、周りが納得できる内容を発表することを重視した。グループの意見はホワイトボードを活用してまとめさせ、発表の際にはどの資料を根拠にしたのかを明らかにさせた。



・「振り返る」では、本時の課題に対する答えを自分の言葉でまとめさせ、数人の生徒に発表させることで本時の学習の到達ポイントを確認させた。また、振り返りとして、単元の課題をもう一度意識させ、本時の学習でわかったことや、それが今後どう役立つか、発展するかという予想を記入させた。

②思考を深める場の設定の工夫

・歴史「日本のあけぼのと世界の文明」では、古墳時代に確立した大和朝廷が有力豪族をまとめた理由を考えさせ、クニが他国と関わりをもち始めたことに、グループでの話し合いの中で気付くことを目標にホワイトボードにまとめさせた。家庭学習として、小学校の既習事項をまとめさせ、古墳時代とはどのような時代かを初めに確認することで、授業がスムーズに流れるように工夫した。しかし、確認だけに終わってしまい、必要感のある課題であったかどうか疑問が残った。また、根拠となる資料についても、結果としては目標に達成することができたが、生徒の考えが深まるようなものを工夫する必要があった。



・歴史「『日本』の国の成り立ち」では、奈良時代の「法」が貴族や農民にとってどのようなものであったのかペアで考え、人々の暮らしから奈良時代を概観させることを目標とした。家庭学習として、奈良時代の暮らしを示す歌のうち一つを読み取らせた。ペアで異なる歌を読み取り、授業の中で交流することで、二つの歌からその対照的な内容に疑問を感じ、奈良時代とはどのような時代なのか関心をもたせる工夫をした。また、新しい法が定められたことによって、苦しかった農民の暮らしは改善したのかをペアで考えさせ、「なぜなら～」という根拠を基に説明することを重視した。ペアで考えた内容に対して「農民の暮らしは本当に改善されたのか」と問いかけ、話し合いの根拠に対してのゆさぶりを意識した。結果として、開墾できるのはどのような土地か資料を根拠に考え、農民の暮らしは改善しなかった理由と新しい法によってさらに貴族が力をつけることになったことをまとめさせた。

③成果と課題

◆成果

・単元を通して意識してほしい課題や毎時間の授業の流れや課題を確認し、授業のゴールの姿を示すことで、与えられた課題に対して深く考えることができるようになった。例えば、個人で取り組んできた家庭学習をグループでまとめる際に、意見の根拠がより明確なものとなるように再度資料を読み取る姿や、他のグループが聞いても納得できるものに再構築する姿が見られるようになった。話し合いに多少時間はかかるものの、一人の意見を発表するのではなく、グループでもう一度意見を練ることで資料を深く読み取り、課題解決に近づくことができる。

・ペアやグループ、全体発表の場で自分の考えを発表する際、考えがうまく伝わるように工夫して発表することができるようになった。相手に伝わる提示の仕方や話し方、資料のどの部分を根拠にしたのかをわかりやすくするために指示棒の活用や色分けなど、自分たちで工夫する姿が多く見られるようになった。

◆課題

・ペアやグループによるまとめはできるようになっているが、その活動を一人で行う際に躓きが生じる。課題解決に向けて自分で情報を集め、整理して解決する力をつけるためにも、家庭学習だけではなく、授業の中でも個人思考の時間を十分に確保する必要があると考える。課題を解決するためのグループ学習ではなく、そのきっかけをグループで話し合い、そこからさらに個人で考える場面をもつ授業展開を行っていききたい。

・発問に関しても、必要感のあるものを吟味していききたい。課題解決のきっかけとなるものや生徒の考えが深まるものをタイミングよく問うことで、教師の「教えたこと」を生徒の「考えたこと」にするための工夫を行っていききたい。

・課題解決の大きなきっかけとなる資料選びは、どの場面においてもより適したものになるように工夫していききたい。読み取ることで深く考えることができるものや、納得できる答えを示すことができるものをタイミングよく提示する必要がある。教科書や資料集だけにとどまらず、様々な視野から資料を厳選していききたい。

3) 数学科

①教科における授業づくりの実践

・「つかむ」では、本時の授業に関する既習事項の確認を行い、本時の授業での学習をスムーズに行えるようにする。また、宿題や前時の学習内容と本時の学習内容の相違点を考えさせることで、本時のねらいについて自分で見つけさせることを意識した。

・「考える（個人）」では、既習事項や前時の授業内容をヒントとして考えられる課題に取り組ませることで、どの生徒も自分なりの考えがもてるようにした

・「深める（交流）」では、自分の考えを発表するときには何故そうなったかという根拠を言わせるように指導した。また、根拠を明確にすることができないときには、周りの生徒に何故そうなるのかを考えるように促し、全員で考える場を作った。

・「振り返る」では、まとめを自分の言葉で書かせるようにした。また、授業で学習した内容と同じような類題に取り組みさせることで学習内容の定着を図った。



②思考を深める場の設定の工夫

・「図形の移動」では、どのように移動させれば良いかを個人で考えたものをグループで確認し、そこでまとめたものでワールドカフェ方式の交流を行った。他のグループの人に自分のグループの考えを説明することで、自分はその考え方を理解できているかを確認することができた。また、他のグループの考えを聞くことで自分たちの考えに自信がもてたり、他のグループの考え方と比べてみて何が違うのかを考えることでより良い解決方法を考えることができたりした。

・「角度の作図」では、グループでいろいろな角度の作図方法を考える中で、意見交換を行った。どうしてその方法で描くことができるのかを説明し、理解してもらうために根拠を明確にすることが必要になっていた。しかし、「基本の作図」がまだ定着していない生徒にとっては、何をしているか理解できないこともあった。

③成果と課題

◆成果

・授業の課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいる生徒や、自分の考えを発表する機会が与えられていると感じている生徒が多い。

・グループでの話し合いでは、説明が上手くいかなかったときに友だちに理解してもらおうと思って根拠を考えようとする機会が増えた。

◆課題

・生徒への指示の言葉が多すぎる。教師が発する言葉としては内容に関するをもっと増やしていく必要がある。

・同じことを発表するにしても、既習事項の数学用語を使わせるなどの条件をつけることで、単元のどこに位置づく授業なのかをしっかりと意識させることが必要である。

・「万華鏡では、対称な図形によるしきつめ模様ができている」というように、題材の特徴をしっかりと認識させ、どうしてその題材を使って考えるのかということを感じさせることで興味・関心をもたせられると良い。

4) 理科

①教科における授業づくりの実践

- ・「つかむ」では、前時の振り返りを行い、要点を復習するとともに、前時に出された宿題の確認を行ってきた。その中で本時の課題を提示してきた。宿題と課題が繋がることで、課題解決に向けての意欲を育ててきた。また、本時の流れも確認し、授業のゴールのイメージを生徒たちに示した。
- ・「考える（個人）」では、家庭で宿題を取り組ませることで、なるべく個人思考の場面を授業の中で設けなかった。それは、時間的な制約がある中で、「深める」や「振り返る」に重点を置きたいためである。宿題では、全員が取り組めるように発問を吟味し、ワークシートを用いるなど取り組みやすいように工夫してきた。一例としては、太陽－地球－星座の位置関係からその時刻に見える星座や星座が見える時刻など、自分で問題を作成させることである。生徒たちは、オリジナルの自分の問題づくりとして、既習事項を確認しながら積極的に取り組んできた。
- ・「深める（交流）」では、班内でお互いの考えを伝え合い、論議することに主眼を置いてきた。ホワイトボードを活用し、班の意見をまとめる中で、自分自身の考えを確かめるとともに、筋道を立てて解説できる手順を確認してきた。また、他の班員に納得してもらうためには、理由の根拠を明示することにも力を入れてきた。さらに、時には班で話し合った内容を他の班とも交流する手立ても行ってきた。
- ・「振り返る」では、課題に対してまとめられたそれぞれの班のホワイトボードを活用することが多かった。生徒の言葉をなるべく活かすことで達成感を引き出し、要点を整理してきた。

②思考を深める場の設定の工夫

- ・地球と宇宙「地球の運動と天体の動き」では、太陽－地球－星座の位置関係から、見ることができる星座について道筋を立てて説明できることをねらいとした。前述のように、家庭での宿題として太陽－地球－星座の位置関係から、その時刻に見える星座や星座が見える時刻など、自分で問題を作成させ、それぞれの問題を班内で交流させた。オリジナルの自分の問題づくりとして、責任をもって積極的に取り組んだ様子は、授業後のアンケート項目「授業で必要とされた宿題が活用され、役に立った」97%（当てはまる61%・どちらかと言えばあてはまる35%・どちらかと言えばあてはまらない3%）から伺うことができる。また、似たような傾向の問題が多数ある中、視点を変えることで違うパターンの問題も作成できることを指摘し、班で協議させ、ホワイトボードに問題を作成させるなどして、問い返しやゆさぶりを加えた。生徒たちは、班の中で熱心に意見交流を行っていた。そのことは、授業後のアンケート項目「授業では、先生から指示される課題や、学級の中で自分たちで立てた（見つけた）課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思う」97%（当てはまる47%・どちらかと言えばあてはまる50%）に現れている。
- ・天気とその変化「気象観測と雲のでき方」では、下降気流と上昇気流があるときの天気について、自らの考えをまとめ、表現することができることをねらいとした。個人的思考として、「高気圧の中心付近の上空での空気の流れと低気圧の中心付近の上空での空気の流れについて、それぞれなぜそうなるかの根拠をあげ

て、どのようになるか考えよう」を宿題として提示し考えさせた。班内で宿題の意見交流の中で、「高気圧は下降気流／低気圧は上昇気流」と、宿題の意図とは別の意見をもつ生徒が何人かいた。このことは、前時に提示した宿題が適切なものであったのか否かという課題として残った。授業後のアンケート項目「授業で必要とされた宿題が活用され、役に立った」でも、86%（当てはまる 52%・どちらかと言えばあてはまる 34%・どちらかと言えばあてはまらない 14%）に現れている。個人思考を授業の中で軌道修正しながら深める場面では、空気の流れをもとにして高気圧と低気圧の中心付近の天気を班で話し合った。班で根拠をもってホワイトボードに意見をまとめた後、他の班との意見交流のために、班の2人が他の班に出向き、出先で互いに意見を交流した。生徒たちは、熱心に意見交流に取り組んでいた。このことは、授業後のアンケート項目「発表の場面では、様々な考え方を聞くことにより自分の考えが深まった」100%（当てはまる 76%・どちらかと言えばあてはまる 24%）に現れている。この授業では、個人思考の段階の宿題では課題が残ったが、結果的に班で交流し思考を深めることで、生徒たちにとっては有効なゆさぶりになったと考えられる。それは、授業後のアンケート項目「授業の内容がよく分かった」100%（当てはまる 55%・どちらかと言えばあてはまる 45%）から読み取ることができる。

③成果と課題

◆成果

・個人思考を家庭学習の宿題として設定することが有効であることが生徒たちの授業後のアンケートに現れていた。また、理科室は座席が既に班活動の配置になっているために、スムーズに班活動に移行しやすい。そのなかで、積極的に班の中で意見交流させてきたが、そのことは、授業後のアンケート項目「授業では、生徒の間で話し合う活動を行っていたと思う」の結果が計画訪問時B組では 97%、校内研修会の折には 100%や、「授業では、課題に対して良く（深く）考えることができた」は計画訪問時B組 97%、校内研修会時 97%、「発表の場面では、様々な考え方を聞くことにより自分の考えが深まった」計画訪問時B組 100%、校内研修会時 100%、「授業の内容がよく分かった」計画訪問時B組 100%、校内研修会時 94%で高い数値として表れている。

◆課題

・計画訪問B組の実践や杉江先生を招いての校内研修会では、本校の学びの姿にあわせ、「つかむ」・「考える」・「深める」・「振り返る」の4つの場面にあわせ、丁寧に教科指導することができた。しかし、年間を通じて行えているかという課題がまだまだ残る。それは、2学期生徒アンケート結果「理科の授業は考える場面がある」2A・84%、3A・91%や、「理科の授業はわかりやすい」2A・75%、3A・76%という数字からも読み取れる。今後は、年間を通じて、学びの姿を意識していく必要がある。

・班内で協議し、ホワイトボードに意見をまとめ全体で交流し、生徒の言葉を活用することで課題に対してまとめ、振り返るというスタイルで授業を進めてきたが、生徒の「振り返り」がその意義を含めて生徒の意識に落とし込まれていない可能性がある。それは、2学期生徒アンケート項目「理科の授業は振り返る場面

がある」で、2A・81%、3A・68%と3年生が若干低い数値であることから考えられる。生徒にとって、身になる振り返りの作業は今後の課題である。

・個人思考の段階では、家庭学習での宿題が有効であることは確認できたが、本時の課題にあわせ適切な宿題設定が必要であることが確認できた。

5) 英語科

①教科における授業づくりの実践

・「つかむ」では、“Today’s schedule”を示しながら、本時の授業の流れを説明し、生徒が1時間の見通しをもてるようにした。

・「考える」は、「深める」で一人ひとりが英語を使って自分の意見を述べるための準備段階とし、グループで考えを共有したり、それをどうやって英語で表現するかを話し合ったりした。

・「深める」では、ペアを何度も変えながら、お互いに自分の意見を伝え合う対話活動を取り入れた。その後、ペアでの対話をもとに、個人で英文を書かせた。「話す」から「書く」というステップにつなげることで、学び合いを経て、文法をより正確に用いて、英語表現をより充実させて書くことをねらいとした。また、友だちの英文の良いところを自分の英文に取り入れるために、ギャラリーウォークを行った。



②思考を深める場の設定の工夫

・接続詞を学習する単元のゴールアクティビティーでは、「東京に行くなら新幹線と高速バスのどちらがよいか」というテーマを与え、共有された新幹線と高速バスの good point と bad point を根拠として、接続詞を用いてペアで意見を伝え合う対話活動を設定した。生徒は間違いを恐れず積極的に英語で意見を述べており、3年生でのディベート活動に向けての良い練習となったが、キーワードから正しい文を作るということには主語・動詞の欠落など課題が残った。また、別のテーマでもこの流れに沿った授業を行ったが、やはりキーワードの品詞を意識して正しい語順の文を作ることができる生徒は多くなかった。また、生徒が必ずしもそれぞれの活動の目的を意識して取り組んでいたとは言えないため、活動の転換ごとに活動の目的を説明することが必要であった。



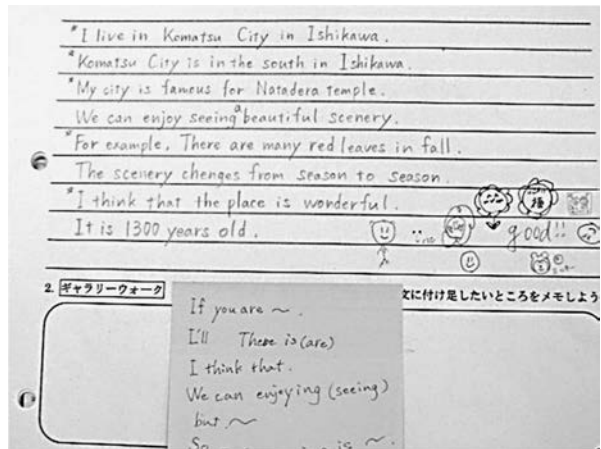
③成果と課題

◆成果

- ・授業の流れや評価基準を視覚化し、生徒と共有することができた。
- ・ペアを何回も交換することで、飽きずにお互いの意見を伝え合うことができた。また、ペアでの対話活動から英文を書くという流れにすることで、生徒同士の学び合いにつながった。
- ・ギャラリーウォークをすることで、意欲的に友だちの英文の良い表現などを取り入れて、自分の英文の文法的な正確性や英語の表現を充実させることができた。

◆課題

- ・生徒が自分の変容や成長を確かめる時間にするために、授業の中で振り返りの時間を取る必要がある。
- また、振り返りは教師がまとめるのではなく、生徒の言葉で振り返り、全体で共有することも必要である。
- ・英語での対話において、即興性を育てていくために、キーワードで話すことを続けていく。



6) 音楽科

①教科における授業づくりの実践

授業づくりの実践として、音楽科では、生徒一人ひとりが音楽に対する興味・関心を高め、いかに音楽に関心をもち、生徒が主体的に授業を行い、課題を見つけ、課題解決に向かうかを考えて取り組んできた。そのためにも、なぜ中学校で教科として音楽が存在するのかを、生徒一人ひとりが意識して取り組むことが大切であると考えた。

音楽を聴いたり、音楽を奏でることや歌ったりすることで、心が落ち着いたり、心が和んだり、頑張ろうとする意欲が高まったりする。また、音楽を聴いて感動したり、涙が出たりする。音楽にはこのような不思議な力があり、そこから、感受性が育ち、共感する力などが湧いてくる。

合唱コンクールなどは、多くの人に合唱を聴いてもらい、感動してもらい、音楽に一人でも多くの人が触れ、その中から音楽を愛する人が増えてくれることを願う。このように、音楽には、生徒を大きく育てていく要素があり、人間形成の意味でも大切な教科であることを、生徒一人ひとりが理解して音楽の授業を受けることが重要視される。

具体的には、音楽の授業では、例えば合唱の場合、リーダーを中心に各パートが合唱練習を行い、そこから、問題点や課題追求を行う取り組みをしてきた。授業の中で、必ずお互いを聴き合い、意見を述べ合う場を設定したり、そこから感じ取れる思いを出し合って学び合う。

「つかむ」では、本時のねらいを明確にし、個人の学習の課題の方向性を明確に理解させる。「考える」場面では、グループ練習に取り組み、個人の音楽を作り出すため、グループの演奏を作り出すための意見交換を行い、個人の課題、グループの課題を見つけ、より良い音楽を創り出す。「深める」場面では、ホワイトボードを活用し、曲のポイントや情景や強弱など、みんなで情報交換し、より良い音楽を創り出す。「振り返る」では、ワークシートを利用し、本時のそれぞれの課題の自己評価を記入し、次時につなげることを意識した。

このような学習では、グループの中にリーダーや吹奏楽部のメンバーがいることで、学習の深みや互いを思いやり教え合う姿が多く見られるようになった。グループだけでなく、クラスみんなで課題を共有し合う姿も見られた。教師側の仕掛けから、生徒の表情や生徒の課題解決行動が多く見られ、授業に参加する表情も変わってきたのである。また、少しずつ良いものが創られる。そして結果につながるのである。

合唱コンクールの生徒作文(3B女子)

合唱コンクールで、私は3Bのみんなに感謝したいと思います。なぜなら3Bの全員の力で最優秀賞をとることができたからです。私は伴奏でした。みんなにいろいろ迷惑をかけたと思います。でも、何一つ苦情も言わず、練習に参加してくれました。合唱コンクールは、今までにないものだった。三年間のうち、今年ほど感動した合唱コンクールは初めてでした。また3Aの合唱を聴いて、これだけ人を感動させられるなんて、凄いと思いました。

②思考を深める場の工夫

・「合唱」では、パートリーダーを中心に課題意識をもってパート練習に取り組んだ。課題として、楽曲の構成や表現方法などの視点から、ホワイトボードを利用し、情景を深めたり、グループの意見を出し合うことで、みんなが考えを深める場を設定することができた。また、そこから、グループの考えを互いに深めることができた。

・「器楽」では、グループ練習で、パートリーダーが中心にアーティキュレーションを意識し、中でもレガート奏法を取り入れ、中間発表を行うことで、次の課題を見つけ、発表につなげることに取り組んだ。ワークシートから、次のような課題があげられた。

ワークシートより

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| ・もっときれいな音色にする。 | ・もっとなめらかに演奏したい。 |
| ・アーティキュレーションを意識したい。 | ・強弱を意識したい。 |
| ・音のスタートを雑にしない。 | ・音を切らない。 |
| ・レカート奏法でもっとなめらかに演奏する。 | ・表現をつける。 |

③成果と課題

◆成果

・授業の中で、生徒自身がパートリーダーとして、授業の主役として活動することは、教師の主導型とは違い、課題解決に意欲を注ぐ方法だと痛感することができ、成果も見られた。また、パートの中に音楽経験

者や吹奏楽部などの生徒が存在することで、より良い成果が期待できた。また、合唱する時の生徒の表情も、良い表情に変化している。

・「合唱」や「器楽」などで、グループの一人としての存在が感じられるようになり、練習の向上にも成果が見られた。

◆課題

・音楽の授業では、情景を感じ取る学習においては、一枚の絵などの鑑賞から得られる曲の情景よりも、やはり、曲の強弱や歌詞やメロディーなどから、感じ取る方法が具体化に有意義だと考えられる。

・音楽の授業の中で、リーダーを育てる方向を他教科や教室などでも、継続できると、リーダーが育ち、生徒の成果にもつながっていくと考えられる。

7) 保健体育科

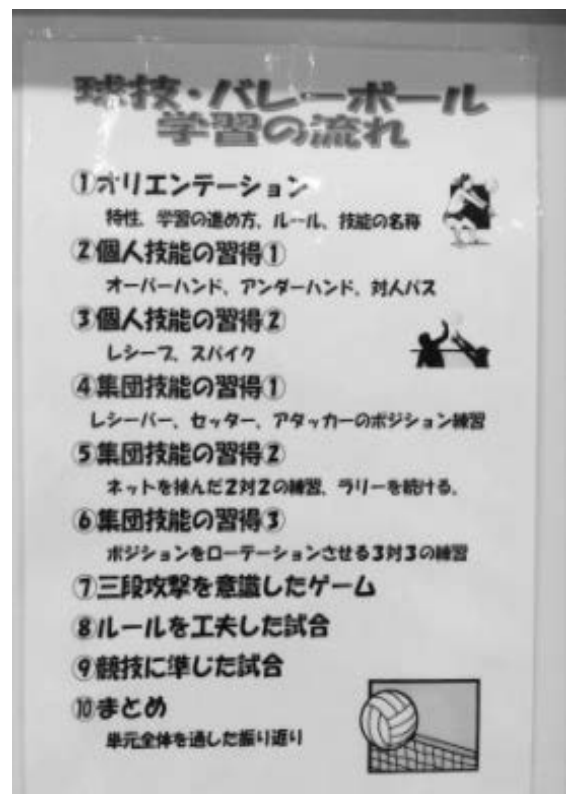
①教科における授業づくりの実践

・「つかむ」では、各運動領域における単元全体の流れを掲示物として可視化し、最終的なゴールの姿をイメージさせる工夫を行った。また、授業の導入では課題と授業の流れを示し、授業のゴールの姿を示した。練習内容を段階的に示すことで一つひとつの活動の意味を意識させた。

・「考える（個人）」では、個人技能習得のポイントや保健分野における知識習得の際に資料（中学体育実技、教科書、学習ノート）を根拠として説明ができるように活用した。

・「深める（交流）」では、タブレットを活用して互いの動きを確認し、技能習得のポイントに照らし合わせて意見を伝えたり、動きの修正を行ったりした。また、ホワイトボードを活用しチーム分析（良い点、課題等）を行う等、必要感のあるグループ学習・ペア学習を意識した。

・「振り返る」では、各運動領域に応じたワークシートを作成し、共通事項として「本時の課題」「課題に対して工夫したことやわかったこと、できたこと」「仲間からのアドバイス」「学び方の自己評価」を記入できるように工夫した。また、まとめでは生徒に学んだことを発表させることを意識した。



②思考を深める場の設定の工夫

・「球技・バレーボール」では、ホワイトボードを使用し、チームとしてボールをつなぐために必要なポイントやポジショニングを確認した。試合後には振り返りを行い、次の試合に生かす工夫を行った。課題として、運動技能の習得では、一人ひとりの技能習得に対する感覚が異なり、その表現方法は様々であるため、一人ひとりの感覚（運動のコツ）を教師が全体へつなげるために問い返しやゆさぶりをを行う必要があった。それによって、技能習得に対する感覚が共有されると考えた。また、まとめ・振り返りの際にホワイトボードに生徒の考えを書き出し、教師の言葉でまとめにつなげるところまではいけたが、ホワイトボードに書かれたことをもう一度生徒に問い返すことによって、生徒の考えを深められるようにする必要があった。

・「武道・剣道」では、グループによる判定試合で「気剣体」の一致を判定したり、打ち込んだりすることを最終的な目標とした。グループ内で2名が組（掛かり手・元立ち）になり、一本打ちや二段打ちの技を踏み込み足で行い、これをグループ内の他の3名が役割分担して、気・剣・体の観点から十分か不十分かを判定させた。判定の際にはグループ内でその根拠を示し、説明する工夫を行った。一人ひとりの感覚（運動のコツ）を教師が全体へつなげるために問い返しやゆさぶりを意識した。例えば、判定の際に「有効打突部位が竹刀をとらえていたから」という生徒に対し、「有効打突部位とは具体的にどの部分？」や「残心ができていた」という生徒に対して、「残心ってどんな気持ちが必要なの？」など剣道の技や心の本質に迫れるような問い返しやゆさぶりを意識した。



③成果と課題

◆成果

・単元全体の中で最終的なゴールの姿を生徒が意識することで、1時間の授業のねらいや課題が明確となり、生徒の学ぶ意欲の向上や学ぶことへの価値付けにつながった。例えば、バレーボールの授業では、オーバーハンドパスやアンダーハンドパスの個人技能の習得が三段攻撃等の集団技能の向上につながり、ボールがつながるバレーボールの試合からは、バレーボールの特性に触れる楽しさに気付くことができる。この楽しさは生涯スポーツにつながるものである。

・グループ学習・ペア学習では、個人技能や集団技能のポイントを一人ひとりがしっかりと把握するために、自分の考えを他に伝えたり他者の考えを聞いたりすることによって、一人ひとりの感覚（運動のコツ）

を共通のポイントとして共有することができた。

◆課題

・考えを深めるという点では、まだまだ一人ひとりの感覚（運動のコツ）を教師が全体へつなげるために問い返しやゆさぶりをを行う必要がある。それを行うことによって、技能習得に対する感覚が共有され、運動技能の向上につながったり、運動を苦手とする生徒にとっても意識すべきポイントが明確になりやすくと考える。

・まとめ・振り返りの際にホワイトボードに生徒の考えを書き出し、教師の言葉でまとめにつなげるところまではいけたが、ホワイトボードに書かれたことをもう一度生徒に問い返すことによって生徒の考えを深められるようにする必要がある。

8) 特別支援学級

①教科における授業づくりの実践

・「つかむ」では、まず目あてやその日の学習内容を示した。その後、実物や図や写真等を示し、その日の課題が生徒にとって実感しやすいようにした。

・「考える(個人)」では、ことばによる説明や視覚による提示のあとにワークシートで課題解決を図った。ワークシートは生徒本人の関心や得意不得意に応じて作成する。交流する前に、まず生徒が意見（自分の考え・思い）を言語化できることを目指した。言葉(文)で表現しにくいことへの支援として、自分自身の思いや考えに近いものを選べるよう選択方式などを多くした。たとえば、例文の提示、選択肢の設定、イラストや写真からの感想の聞きとりなどである。生徒からの意見を引き出した。そうして、生徒が意見を言語化して立ち位置を明確にしてそのよさを認めるようにした。

・「深める(交流)」では、生徒が対等にバランスよく意見が言い合えるための支援として、司会補助役・まとめ補助役としての声かけ、意見・理由を板書しての情報の共有・互いの違いの認め合いを行った。意見・理由を挙げる際には、選択肢を活用した。

・「振り返る」では、生徒の意見・理由を記した板書で、生徒が活動を振り返りやすいようにした。そうすることで自他の違いの自覚・認め合いを図った。

②思考を深める場の設定の工夫

・自立活動「話し合いのマナー(1) 話し合いに臨む態度や心得」では、話し合いの場でよくしてしまう失敗について図(イラスト)を使って例として示した。具体的に自分自身にも起こりうることとしてよく考え、振り返られるようにした。

・自立活動「話し合いのマナー(2) 話し合いで周りとのバランスを考えよう」では、よい例・悪い例をイラストで示して生徒に意見を聞いた後、今まで身のまわりはどうであったか、自分自身の問題としてとらえられるようにした。そうして話し合いの場での今までの自分自身を振り返り、自分自身の目あてを

選べるよう意識した。

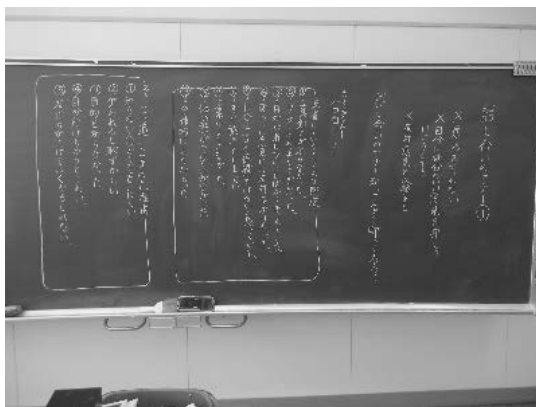
③成果と課題

◆成果

- ・生徒が内面を言語化し、自分自身を知るきっかけとなった。
- ・お互いの内面を知り、認め合いが進んだ。
- ・生徒は意見を言う際のハードルが低くなったと感じているようである。今までよりもスムーズに話すようになった。

◆課題

- ・ワークシートを選択肢方式としたが、生徒本人が具体的イメージをもてるようワークシートでの図やイラストなどの現在以上の活用も考える。文(言葉)だけではイメージがつかみにくく、自分自身を振り返れないこともあるようであった。
- ・「考える(個人)」では、支援として実物や図や写真の提示、例文の提示、選択肢の設定等を行っていたが、生徒にとって理解が進みにくいこともあった。生徒にとってよりよい支援をこれからも考えていきたい。また、生徒の発達段階を考慮して、選択肢の中のゆさぶりを増やしていく。
- ・「深める(交流)」では、指導者が支援として司会役補助・まとめ役補助が入っていたが、少しずつ入ることを減らしていく。将来的にはホワイトボードの活用、そのための支援も考える。
- ・生徒自身の言葉を引き出せるよう、これからさらに人間関係を深めていく。
- ・生徒がさらに交流しやすいよう、生徒と生徒を結び付けていく。



9) 道徳教育

①中心発問によってねらいにせまる考えが引き出されていたか

◆1年生の実践

1年生では、「夜のくだもの屋」を用いて研究授業を行った。この資料ではねらいを「温かい人間愛が思いやりの心を生み、それに触れることで自然とわき上がってくる感謝の念を感じとることで、自分が現在あるのは、多くの人々によって支えられてきたからだという自覚を促し、自分が他に能動的に接するときに必要な心の在り方について考える」とし、そのねらいにせまる中心発問を「あかりってなんだろう」とした。授業では、お話の中に出てきた「あかり」を抜き出し、偶然ではなく感情が関わってくことに気付くことが

できた。しかし中心発問だけではねらいにせまることが厳しく、次にあるゆさぶりの発問によって、あかりには見返りを求めない思いやりの心がこもっていることに気付くことができた。

◆2年生の実践

2年生では、「ネパールのビール」を用いて研究授業を行った。この資料ではねらいを「物事を誠実にやりとげることで自律の心が芽生え、自らの責任によって生きる自信になり、人間としての誇りがもてるようになる」ことを生徒に理解させることとし、そのねらいにせまる中心発問を「わたしはチェトリから何を感じあんなにも泣いたのだろうか」とした。授業では「チェトリ君が遠くまでビールを買いに行ってくれたからだ」とか「信頼に応えようとしたチェトリ君に感動したからだ」などのグループ代表の意見が多かったが、「誠実さに感動したからだ」と今回の主題をそのものを答えるグループもあった。

◆3年生の実践

3年生では、「仏の銀蔵」を用いて研究授業を行った。この資料ではねらいを「証文がなくても借金を返すようになった村人の良心に触れ、自ら内なる規範(良心)に気づいて道徳的に変化する銀蔵を通して、法やきまりの意義を理解し、内なる規範に従って生きようとする道徳的実践意欲を高める」とし、そのねらいにせまる中心発問を「お天道様ってなんだろう」とした。授業では村人の借金返済が、法を超える何かであることに気付いてはいるものの、それが何であるかを言い表すことができず「お天道様」＝「神様」「太陽」等にとどまっている生徒が多くいた。

②問い返し・ゆさぶりによって考えが深められていたか

◆1年生の実践

中心発問に対する意見が一通り出たところで、「自分がくだもの屋さんだったら、あかりをつけるか」というゆさぶりを行った。その中で、「自分だったらあかりをつけない」と答えた生徒に対して、「なぜつけないのか」「ではなぜくだもの屋さんをつけたのか」という問い返しを行うことで、あかりには感謝の気持ちや見返りを求めない思いやりの心がこもっていることに気付くことができた。抽象的な中心発問であったからこそ、問い返しやゆさぶりによって考えが深まり、気づきが生まれ、ねらいにせまることができた。

◆2年生

中心発問で主題の「誠実な生き方」に関わる考えが生徒から出されたが、それらを学級全体で一層深めていくためには、中心発問で「何を感じて、どうして涙が出たのか」や「みんなが疑っていたのにどうして涙が出たの」など問い返しがあると良かった。このような問い返しをすることで、学級の全員に「誠実な生き方」とはなにかを考えさせることができると思われる。

◆3年生

中心発問のみでは、「お天道様」＝「神様」「太陽」等にとどまっていたので、「神や太陽が見ていたらお金を返すのか」とゆさぶりをかけ、銀蔵や村人たちにとっての「お天道様」を通して、もし自分ならと自分に振り返ることで、「良心」を引き出す工夫をした。自我関与の発問を入れることにより、考えを深めることができた。

①成果と課題

・今年度の道徳は、「考え、議論する道徳」をテーマに授業研究を進め、特に、生徒の深い考えを導く、「ゆさぶる」発問について研修を実施してきた。2学期以降、校内研修計画では、「ねらいにせまる中心発問をメインに展開していく道徳授業」を行うために、「道徳資料分析・中心発問」の校内研修と各学年での研究授業を実施してきた。先生方からは問題解決的な学習によって生徒自身の考えや根拠を問う発問や、問題場面を実際に自分にあてはめて考えてみることを促す発問によって、道徳的価値を実現するための資質や能力を高められるという感想があった。

・資料分析においては、①資料を深く「読み込む」、②起承転結、どんでん返しはどこにあるか、③ねらいと中心発問を見つける（どんなねらいで授業を行うのか、中心発問で何を考えさせたいのか、考えを深めるためにどうするのか）という3つの視点で資料分析を行った。

・道徳は生徒の深い考えを導く、「ゆさぶる」発問について取り組んではいるがその成果はまだ乏しい。中心発問のあとに「ゆさぶる」発問を入れることで、より深く考えたり、学級全体で考えを深めたりすることができるのではないだろうか。

・授業後、自他の考えを交流する場面をとるなど、考えのより深まる場面を設ければよかった。そのためにも、授業のタイム・マネージメントは大切である。

10) キャリア教育

①本年度の取り組み

本年度は、全教師が「人はなぜ学ばなければならないのか」ということを、それぞれの教科の視点から真剣に考え、それを「Compass of the Learning」としてまとめ、全校生徒及びその保護者に提示した。その手順は以下の通りである。

ア. 朝学習の時間、「Compass of the Learning」の意義を伝えた後、生徒に配布し読ませる。

「知恵」という言葉の、「知」は「学び」に、知恵の「恵」は「幸せ」につながるとても美しい言葉です。学ぶことは人を豊かにし、幸せに導きます。世の中の進歩は、今以上により良くしたい、良くなりたいたいという願いと、学びの連鎖です。学ぶことは、自分や人を幸せにするものです。授業で学んだ知識や技能、部活動で学んだ礼儀正しさや精神力、学級会、生徒会活動で学んだ協力する力は、きっとこれからの人生の支えとなります。途中、難しいことに遭遇することもありますが、中学校での学びを通して、粘り強く努力し自らを成長させてほしいと願っています。

～ 校長 西田 誠一 「Compass of the Learning」書き出しより ～

イ. 授業で、自分が書いた文章についてふれる。

ウ. 感想欄を設け、生徒に書かせた感想を頼りで紹介する。

エ. 3年保護者進路説明会で、保護者にも配布し紹介する。

～「Compass of the Learning」より～

「学ぶことは自分を鍛えること」

新井 徹

人はなぜ学ぶのか。私自身明確な答えを出すことは難しい。しかし、一つ言えることは、学びは、自分を鍛えることができるということである。

それは、私自身一卵性双生児に生まれたことによる関係するのかもしれない。私と弟は、小さい頃から瓜二つで、しかも母親は色違いの服を着せたことから、よく町で双子だということで指を指されて生きてきた。小さい時には、あまり感じてはいなかったが、思春期の頃は、弟と一緒に歩くことさえイヤな時があった。そんなあるとき、私は弟とともに、小学校の友だちの家に遊びにこないかと誘われた。遊んでいる最中に、私は部屋から出され友だちと一緒に廊下の隅に行くように促された。不思議に思う私に、いきなり友だちは私の足を蹴り上げてきた。「何するんじゃないや」と怒る私に、友だちは私の言葉を無視し、「おい、そっちどうや」と大きな声で弟のいる部屋にいる別の友だちに呼びかけた。「何も反応してないぞ」との返事に、「じゃあ、もう1回」と言い、再び私の足を蹴り上げてきたのである。理由がわからない私に、その友だちは、「実験終了」を伝えてきた。怒りが収まらない私に、その友だちは、「双子の間に、危険を察知した場合テレパシーがあるか」という実験をしたという。つまり、世の中でまことしやかに言われる一卵性双生児の間にある不思議な現象を自分の目で確かめたかったというのである。私は、悔しくて悔しくてたまらなかった。友だちへの怒りがいつまでもこみ上げてきた。そして、双生児で生まれてきたことがますますイヤになった。

私の兄は、生まれつき上半身の左側半分に大きな赤あざがある。身体的にはなんら障がいはないものの、小さい頃から「何で、お前の左腕、赤いんや」という周りの問いかけに責められてきた。弟の私自身、何度も「お前の兄ちゃん、蜂に刺されて、手、赤いんやろ」とか、「お前の母ちゃん、お腹に赤ちゃんおるときに、火事見たんやろ。だから、赤あざの子ができたんやろ」と言われてきた。繰り返し聞く周囲の声に、私は次第に無視するようになったが、当事者である兄や兄を産んだ母に取っては、それらの言葉は針でつつかれるようなものだったに違いない。そんな家族の中で、私は育った。私たちの気持ちを知ってか知らずか、母親の教えは、「人は人。自分は自分」というものであった。

「双子の間には、テレパシーが存在する」とか「火事を見た妊婦は、赤あざの赤ん坊が生まれる」など、世間にはこのような予断や偏見が満ちあふれている。それらの偏見や予断に打ち勝つためには、科学的な根拠に基づいた「学び」が必要なのである。私は自分が成長するにつれて、自らの経験から周囲の声に惑わされず、自分がやるべき事を貫く信念をもちたいと願って生きてきた。また、世の中の偏見や好奇の目で見ると汚さに負けたくないとも思ってきた。そのことを実現するための手立てが、「学び」の中にあると考えている。

②成果と課題

生徒アンケートの「学校生活を通して、将来のことについて考える機会が増えたと思う」の項目で

は、「あてはまる・まあまああてはまる」と答えた生徒の割合が、7月より12月の方がほとんどのクラスで増えていた。また、配布後の感想にも、生徒たちの将来につながる学びへの意識を高めることができたといえる。

今後は、その意識を生徒たちの普段の学びの姿に生かせるよう、それぞれの授業の中で具体化していかなければならない。

「Compass of the Learning」を読んで－生徒の感想より

各教科の先生から「学ぶ」という意義、そして、その学びはきっと自分にとってかけがえのないもの、喜びになるということを学びました。最初の1ページ目に、「学ぶことは、自分や人を幸せにするもの」とあるように、今回私が読んだ Compass of the Learning からも、たくさんのことを学ぶことができたので、この学びをどう幸せに変えていくかを、今私はよく考え、自分の世界を自分の手で最高のものに作り上げたいと思いました。小学校の時から、色々なことを学習してきましたが、それらは今の自分の支えになっていると感じました。「学び」とは、とても素晴らしい…。これを機に、私がこれだけ学ばせてもらえる環境、指導してくださる方々に…感謝したいです。今、学べるということに、感謝すると同時にその学びを自分の夢へと変えていく。そして、叶える。先生方、貴重な「学び」の意義を教えてください、ありがとうございました。

Compass of the Learning は、私にとって、一生の支えです。(3年 女子)

「Compass of the Learning」を読んで、一番印象に残ったことは、学ぶことの本質は、どの教科も変わらないということです。入試で行うのは、5教科だけで、後の教科はいらないという考えの人もいますが、残りの技能教科は、授業を通じて、将来大切な感受性や創造力を高めるために必要だと分かり、これからも、真剣に取り組みたいと思いました。

人間は、これまでに科学技術を進歩させて、便利な世の中にしてきました。それによって求められる人間像も変わってきました。グローバル化やロボット化が進み、これからは、創造力と伝える力が重要だと思うので、重点的に学習したいです。(3年 男子)

僕は、これを読んで勉強に対する思いが少し高まったなと思いました。各教科の先生のアドバイスや一つ一つの言葉にとっても意味があって勉強の深さ、楽しさなどについて知ることができてとてもよかったです。これからは、このことを少しでも生かして、成績UPにつながると思います。

勉強をすれば、将来に生かされることや勉強をしないと自分がこうかいすることなど、とてもいい事を知れてよかったです。勉強がもしいやになったり、やる気がないとき、少しでもこの言葉を思い出して勉強に一生懸命がんばっていこうと思いました。(2年 男子)

私は、この”Compass of the Learning”を読んで、先生ひとりひとりのさまざまな意見から、ひとそれぞれの考

え方、について知ることができました。そして、何より私たちの思っていることを答えたりしてくれていて、とても共感したし、とても興味をもつことができました。そして、これを読むことで自ら自分を見直したり、「私は～だな」と考えを深めたりすることができました。

そして、普段は授業でしか関わらない先生やほとんど話したことがない先生の考えも知れてとても面白いものと、読むのが楽しかったです。それに部活でお世話になった先生の考えを知ること、私の先生に対する信頼がより深くなり、これからの自分について考えることができ、とても参考になりました。私は、このような機会、先生の考えや意見を生徒が知るということは、大切だと思いました。普段とは違う一面が見れたようで、とても面白く自分の考えも深まりました。(2年 女子)

私は、「全部の教科って将来使うん?・・・」などと言いつけていたけど、先生たちの作文の一枚一枚に、今まで考えてなかったことが書いてあって、とても心に響きました。

例えば、村中先生の「数学=数が苦」は、本来は、「数楽」で楽しんでいけるものだということが初めて分かったし、私は今数学が苦手というか嫌いで、「数が苦」の状態なので、「数楽」で数学を楽しんでいけるようにしたいと思います!!(1年 女子)

僕は、Compass of the Learning を読んで、勉強する意味が何となく分かった気がしました。受験やテストのためだけでなく、僕が義務教育の幅を越え、社会に出ていくときに大切な「教養」を学んでいるんだ、ということが分かりました。家庭や技術、音楽や保体などは、世の中に出て、直接的に使うことはなくても、料理や掃除、設計など、間接的に僕と関わってくるんだらうなと感じました。だけど、やっぱりテストは大切なので、毎日勉強して、テスト前に、「やばいテストだ」、「全然勉強してねー」なんてならないよう、いつかは役に立つんだということを考えながら、勉強をしていこうと思いました。(1年 男子)

2 集団づくりの取り組み

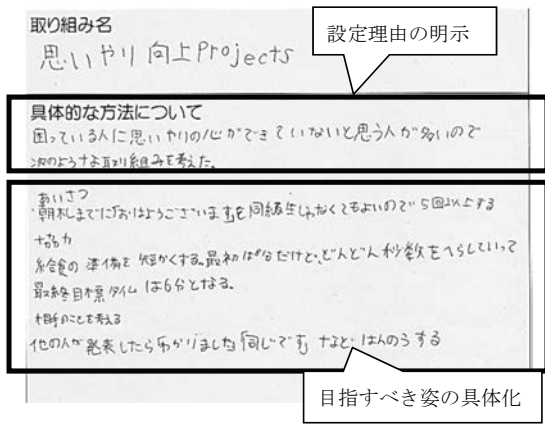
(1) 学級力向上の取り組み

1) ねらい

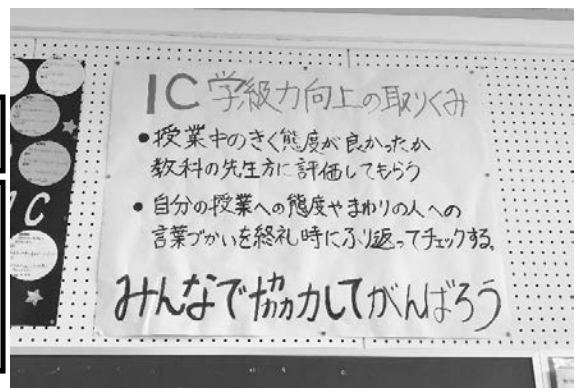
本校では前述の4領域8項目の良いクラスの指標(学級力)を4月当初に生徒に示し、学級目標づくりをさせた。この学級目標達成のために、学級会で学級の課題を話し合い、その改善策として「学級力向上の取り組み」を計画・実施することで、学校の基盤となる学級の集団づくりの推進に努めた。

2) 具体的な取り組み

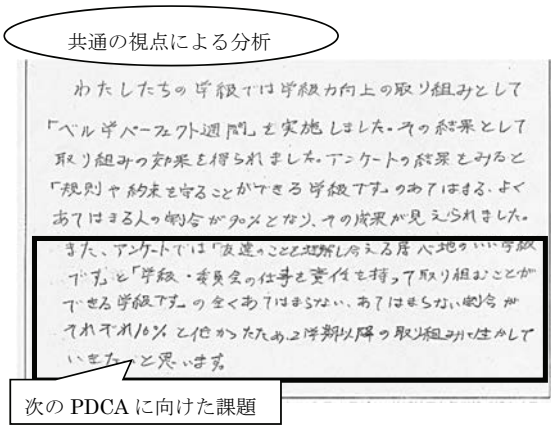
各学期に一度、各学級で学級力向上の取り組みを通してPDCAを行った。実施時期については、一学期は学級が馴染む5月、二学期は行事での成功体験を普段に生かすため11月に、三学期は1月末に行うことで卒業式への気持ちづくりに生かした。以下は実際の取り組みの様子である。



取り組みの計画書 (P)



取り組み周知のための学級掲示 (D)



アンケートの分析結果 (C)



国府の集いでの中間報告 (A)

3) 成果と課題

より効果的に学級力向上の取り組みを行うため、実施時期や学級会のもち方について工夫することで、昨年度に比べ、リーダーを中心に前向きに取り組む姿が見られた（「学級・学年・学校の行事・活動に協力し、積極的に取り組める学級です」の2学期の全学年の肯定的解答が95%）。取り組みが根付いてきた反面、イベント感やマンネリ感を感じた。学級目標達成のために長期的な見通しのもと必要感をもった取り組みにしていく必要性を感じた。また、学級力向上アンケートを教員も分析することで学級経営に生かすなど、まだまだ改善の余地も見られた。

(2) 国府のつどい〈生徒集会〉

1) ねらい

会の企画・運営を通して執行部会（役員会＋専門委員長）を中心に、より一層活発な自治活動を目指すとともに、生徒の連帯感や達成感を高めることを意図し、執行部会の生徒を中心に役員会や各専門委員会の取

り組みの周知や結果報告などを行う会として「国府のつどい」を実施した。

2) 具体的な取り組み

主な国府のつどいでの取り組み内容は以下の通りである。

- ・ 専門委員会での取り組みの宣伝やその成果報告
- ・ 各学年委員会での学習などへの取り組みの周知・結果報告
- ・ 役員会で文化祭前にスローガン発表の場にする

◎実際の取り組み（～2学期）

実施月	実施内容（提案者）
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国府のつどいの説明（執行部会） ・ 学級目標発表（各会長）
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「部活動対抗あいさつ運動」結果発表・表彰式（役員会） ・ 「No チャイム 3days」企画説明（役員会） ・ 「準備体操コンテスト」結果発表（体育委員会） ・ 「月別インタビュー」企画説明（放送委員会）
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「中学生サミット」参加報告（中学生サミット実行委員会） ・ 「健康チェック」結果発表（保健委員会）
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「学級力向上の取り組み」中間報告①（各学級会長）
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ネットの使い方」のプレゼン（中学生サミット実行委員会） ・ モザイクアート企画説明（役員会）
10月	(10月は実施せず)
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歯みがきチェック企画説明（保健委員会） ・ 赤十字バッジ贈呈式（赤十字委員会）
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「学級力向上の取り組み」中間報告②（各学級会長）



歯みがきチェック企画説明（11月）



サミット実行委員によるアイスブレイク（6月）

3) 成果と課題

専門委員会だけでなく、中学生サミット実行委員が取り組みの実践報告や急速執行部会を設け、計画の進捗状況を確認するなど、国府のつどいを通して積極的な活動が行われるとともに活動が学校に根付いてきたように感じた。今後は各月の実践内容や反省を次年度の役員会に申し送ることで、より計画的な会の運営に努めていきたい。

一方で、国府のつどいに向けて新たに企画を立案する委員会とそうではない委員会の差が開いたように感じた。活動計画に則った活動の周知・報告といった本来の趣旨を再確認し、各部署まんべんなく発表できるような配慮の必要性を感じた。

3 家庭と連携した小中一貫学習推進の取り組み

平成 28・29 年度小松市研究推進事業「家庭と連携した小中一貫学習推進事業」として、本校学校研究ともリンクさせながら、「生徒が家庭学習に取り組んだ結果、家庭学習の課題が授業に活かされ、学力の定着を実感できるようになること」を目指し、以下の①～④の取り組みを実施した。今年度は特に③、④の取り組みに力を入れた。

- ①週末課題として「新聞を読んで」の取り組み
- ②小中連携家庭学習強化週間の実施
- ③職員室前の課題用ホワイトボードと生活設計ノートを活用し、見通しをもった課題の把握、毎日の課題実施計画を実施
- ④授業と関連させた家庭学習課題を提示し、授業でその課題を活かす（個人思考を家庭学習課題で）

「③課題用ホワイトボードと生活設計ノートを活用し、見通しをもった課題の把握、毎日の課題実施計画を実施」について

ホワイトボードには 2 週間分の 5 教科の課題が記入できる。生徒は 1 週間分の課題の中からその日に行う課題と開始時間を自分で決めて家庭学習に取り組んだ。教師は他教科の課題の量も把握することができる。

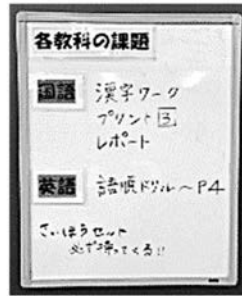
<事例次ページ>

「④授業と関連させた家庭学習課題を提示し、授業でその課題を活かす。（個人思考を家庭学習課題で）」について

<事例次ページ>

1A							
1B							
1C							
2A							
2B							
3A							
3B							

宿題掲示板(職員室前廊下)
予習の指示もあります



教室後ろの黒板に
掲示し連絡します。



1A							
1B							
1C							
2A							
2B							
3A							
3B							

<指導案上の記入例>

第〇学年〇組 〇〇科学習指導案

- ①本時の授業にどうつながるかを書く。
- ②本時に向けて与えた家庭学習の課題について書く。

〇. 前時の授業

(社会の例)

①アフリカ州の地域的特色を理解することで、現在のアフリカ州における貧富の差の特徴をつかむ。

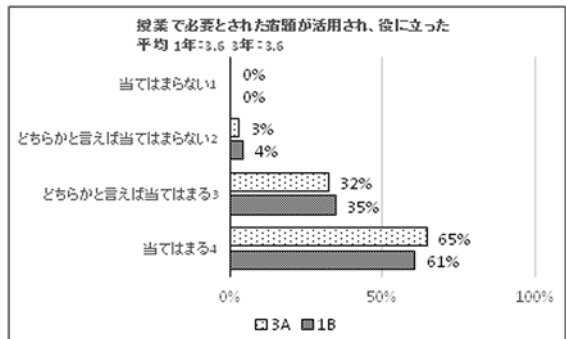
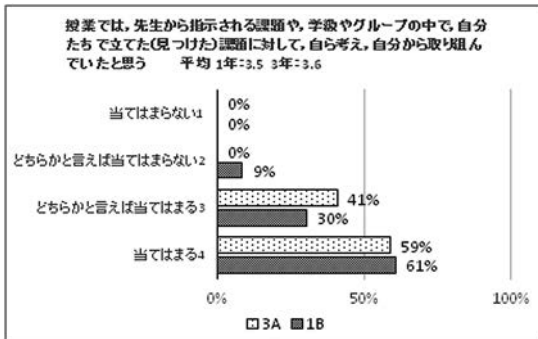
②家庭学習の課題として、アフリカ州がかかえる問題を解決するために日本ができることを考える。

(国語の例)

①作品に提示されている「知足」「安楽死」のテーマから、社会や人間の生き方について考えるのにふさわしい「問い」を考えさせた。

②自分が考えたい「問い」(テーマ)を選び、その「問い」に対する考えをノートに書いてくるという家庭学習の課題を出した。

計画訪問の際に行った生徒アンケートの結果。肯定的な回答がとても多く、生徒自身が学びを実感する授業となっていることがわかる。(3A：国語、1B：社会)



Ⅲ 学校研究全体の成果と課題

学校研究の成果と課題については、これまでの実践の様子および計画訪問B訪問（11月28日実施）、杉江先生をお招きしての2回目の校内研修会（12月14日実施）の後に行った生徒アンケート、教師アンケートの結果（次々頁に掲載）をもとに述べる。

◆成果（※肯定的意見とは「当てはまる」・「どちらかと言えば当てはまる」の合計した値である。）

- ・教師は「目指す授業像」における授業づくり・授業改善の視点を明確にすることで、授業づくり・授業改善のイメージを共有することができた。（各教科の実践より）
- ・「学びの姿」を提示し、教師と生徒が目指すべき授業像を共有することができた。
- ・教師が課題の提示と1時間の学習の見通しを提示することで、生徒は課題に対して自ら考え、自分から取り組みようとする肯定的意見の割合が約95%であった。
- ・個人思考を家庭学習課題として実施し、授業に役立ったと思う生徒が肯定的意見で約95%であった。
- ・教師アンケート「課題の解決に向けて情報（既習事項や資料、図表など）を与え、根拠を示しながら発表させていた」と思う教師が肯定的意見で約77%（計画訪問B）から約92%（12月校内研修会）に上昇した。
- ・教師アンケート「ねらいにせまるために問い返しやゆさぶりを行った」と思う教師が肯定的意見で約77%（計画訪問B）から約85%（12月校内研修会）に上昇した。
- ・生徒アンケート「課題に対して良く（深く）考えることができた」と思う生徒が肯定的意見で全体の約97%となった。
- ・生徒アンケート「自分の考えを深めるためのグループ学習（ペア学習）は効果的である」と思う生徒が肯定的意見で全体の約97%となった。
- ・運動会と文化祭の比較アンケート結果および学級力向上アンケート結果からは自己肯定感の向上が随所に見られた。

◆課題

- ・教師・生徒アンケートの結果からは「深める」、「振り返る」の場面における課題が見えてきた。教師アンケート「授業では、課題の解決に向けて情報（既習事項や資料、図表など）を与え、根拠を示しながら発表させていた」では当てはまるが約33%、「授業では、ねらいにせまるために問い返しやゆさぶりを行った」では当てはまるが約15%、「授業の最後には、学習内容をまとめたり、学び方を振り返る活動を行った」では当てはまるが約31%、また、生徒アンケート「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思う（深める）」では当てはまるが約35%と低い。根拠を示して発表する力がまだまだ弱いといえる。
- ・生徒アンケート「授業の内容が良く分かった」と思う生徒が「当てはまる」という意見で約60%となっており、この数値を低いと捉え、改善する必要がある。

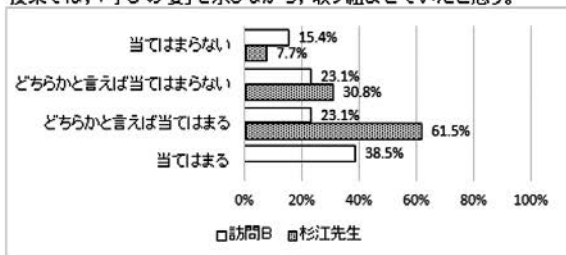
・1時間の授業の見通しをもたせることができたが、単元全体を通してどのような力をつけたいか、最終的なゴールの姿から逆算した1時間の授業の位置づけを意識する必要がある。

・集団づくりにおいては「学級力向上の取り組み」や「国府のつどい」の取り組みが日常の活動と密接につながっていく工夫が必要である。

◆総括・次年度に向けて

今年度の学校研究は学力向上ロードマップに沿って計画的に短期・中期・長期P D C Aサイクルを回し、成果と課題を検証して進めてきた。研究主題「生徒が主体的に課題解決に取り組むための授業づくり、集団づくり」は生徒の確かな学力と自己肯定感の向上のための実践研究である。様々な成果と課題が浮き彫りとなったが、学力の向上という点では課題が残る。様々な取り組みが最終的に学力の向上に結びつくことが大切であるとする。また、杉江先生の講話にもあったように継続的にチャレンジすることが大切である。授業づくりは「教え」から「学び」への転換が大切であり、キャリア教育の視点からも各教科の先生方が「学校の中にとどまらない学力」を意識し、ねらいの価値付けを行う必要があると考えている。

授業では、「学びの姿」を示しながら、取り組ませていたと思う。



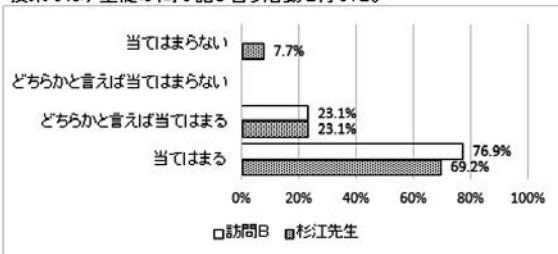
授業では、課題を提示し、学習(授業)の見通しを持たせた。



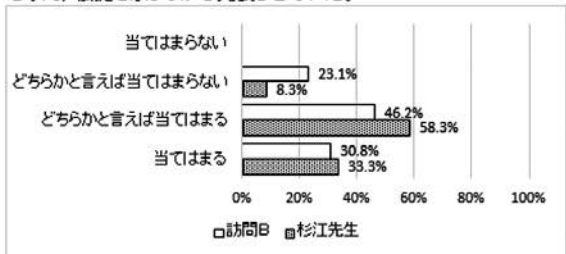
授業では、生徒の考えを発表する機会を与えた。



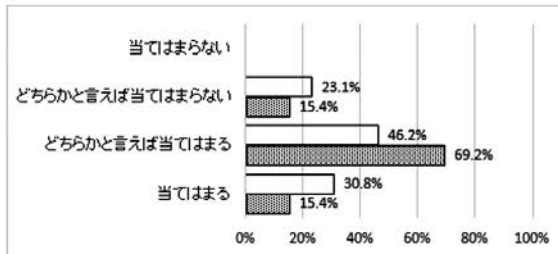
授業では、生徒の間で話し合う活動を行った。



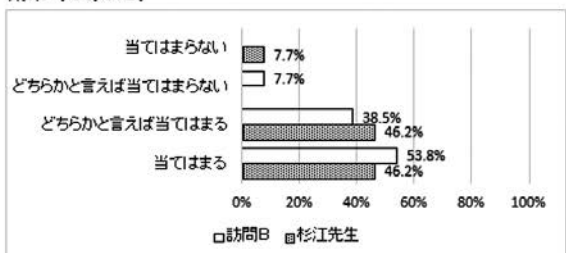
授業では、課題の解決に向けて情報(既習事項や資料、図表など)を与え、根拠を示しながら発表させていた。



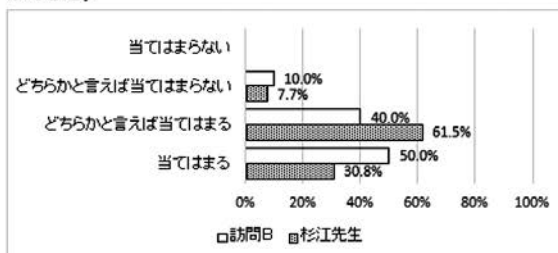
授業では、ねらいにせまるために問い返しやゆさぶりを行った。



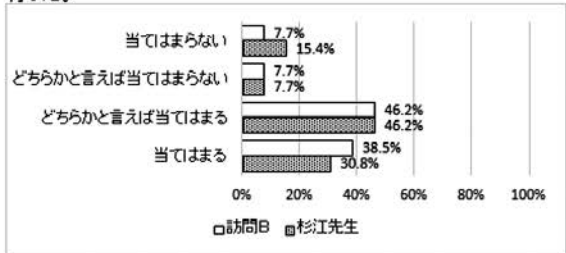
授業では、考えを深めるための工夫やグループ学習(ペア学習)が効果的であった。



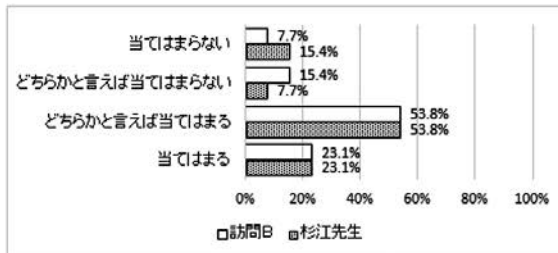
授業では、宿題(個人思考)を活用し、考えを深める活動につなぐことができた。



授業の最後には、学習内容をまとめたり、学び方を振り返る活動を行った。



授業では、ねらいに沿った課題のまとめを行った。



B 2018年度の研究報告

I 研究の概要

1 研究主題設定の理由

2018年度研究主題

生徒が主体的・協同的に課題解決に取り組むための授業づくり、集団づくり
学校研究の推進を柱に

次期学習指導要領改訂を見据え、昨年度本校では「生徒が主体的に課題解決に取り組むための授業づくり、集団づくり～学校研究の推進を柱に～」を研究主題とし、学力向上ロードマップを活用した組織的な学校研究の推進を図った。授業づくりにおいては、各種校内研修会を柱とし、「目指す授業像の共有」「対話を重視した授業づくり」「家庭学習の意義」「資料分析や中心発問」「深める・振り返るを重視した高め合う授業づくり」を課題・テーマとして、短期PDCAサイクルを回すことによって取組の成果と課題を検証し、より効果的な取組を共通実践してきた。また、集団づくりにおいては、「学級力向上の取組」と「国府のつどい(生徒集会)」を柱に学級や学年、生徒会といった様々な集団における課題に対して、生徒が主体的に課題を把握するとともに、解決のための手立てを考え、実行し、取組の成果と課題を皆で共通理解を図りながら活動を行ってきた。

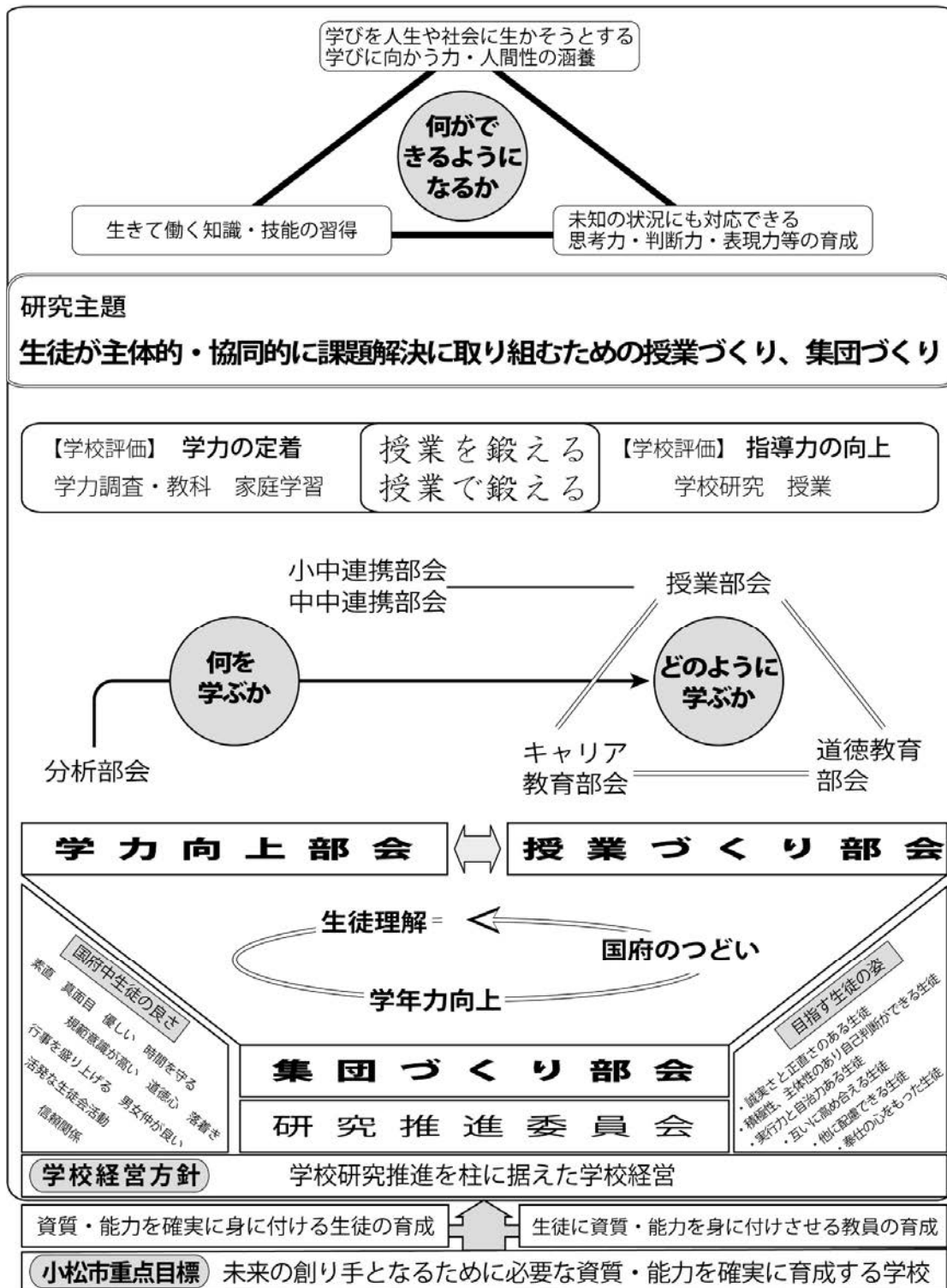
研究の成果として、授業づくりでは生徒が主体となり、生き生きとした表情が見られるようになった。アンケート結果からは95%以上の生徒が「授業で必要とされた宿題が役立った」「考えを深めるためのグループ学習が効果的であった」「発表の場面では様々な考えを聞くことにより自分の考えが深まった」と肯定的な回答をしている。集団づくりにおいても運動会や文化祭といった行事後のアンケートでは、「難しいことでも、失敗を恐れず挑戦する」「友だちは自分の良いところを認めてくれている」等の自己肯定感の高まりを実感することができた。

一方、課題として、授業づくりでは「授業の内容がよく分かった」で60%の生徒が当てはまると回答し、40%の生徒が「どちらかと言えば当てはまる」「どちらかと言えば当てはまらない」「当てはまらない」となった。学校研究の推進が学力の向上につながっているかという点では課題が見えた。また、他者からの評価を実感しつつも「自分には良いところがある」と肯定的に回答した生徒が約70%弱となっていることも課題として捉えるべきと考える。

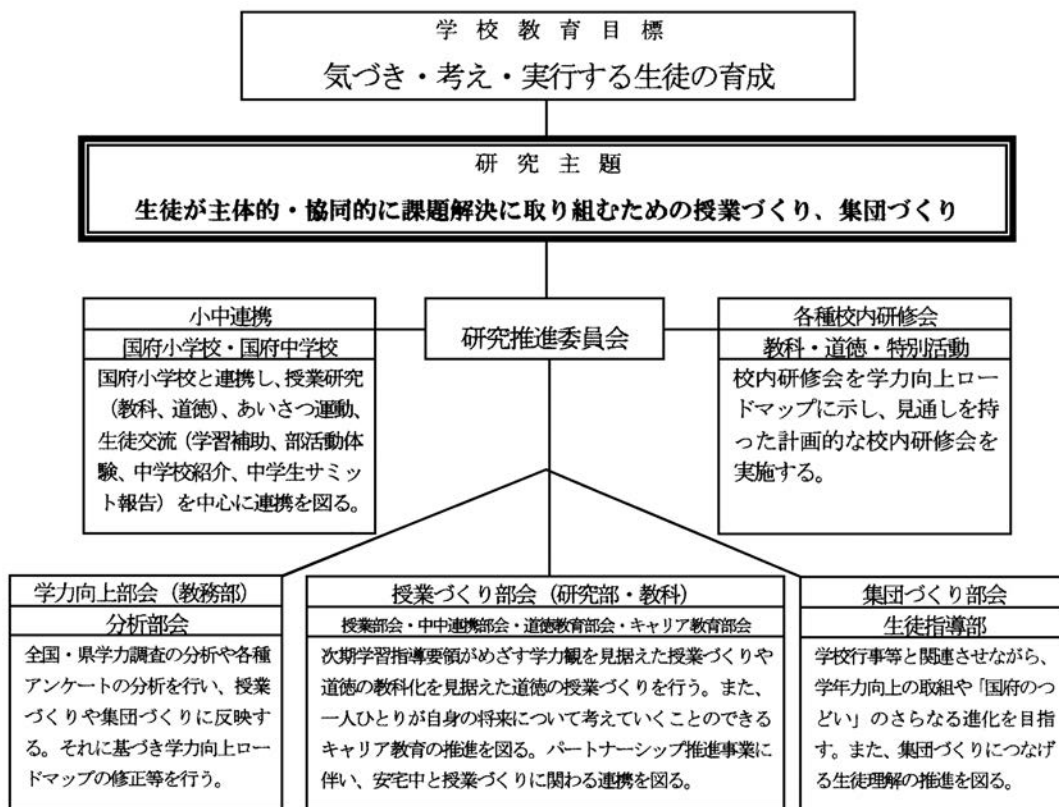
このような現状を踏まえ、これまでの学校研究の成果を活かしながら課題を明確に捉え解決していくために今年度は「学習成果による自己肯定感の向上」「個々の見取り(指導と評価)」「家庭学習時間の確保と充実」をキーワードとして掲げ、授業づくりと集団づくりを推進する。また、認めることによる自己有用感の向上、ともに高め合うという視点から「協同的」という視点を加え、本主題を設定した。

2 研究構想図

平成30年度 学校研究構想図



3 研究組織図



4 研究の方針

(1) 学力向上部会

学力向上部会には、分析部会（教務部）を設置した。分析部会では、全国・県学力調査等の分析および校内研修会後の生徒・教師アンケートの分析を行い、授業づくり、集団づくりの成果と課題を洗い出し、学力向上ロードマップの修正等を行う。学力向上ロードマップの修正に加え、各教科において基本計画となる「学期ごとのスモールステップによるPDCA」を基軸とした『学力向上プラン』を策定する。定期テスト等には分析および解説を記した「学びの道しるべ」を発行し、家庭学習に活かす。

(2) 授業づくり部会

授業づくり部会には、授業部会（学年、教科）、道徳教育部会、キャリア教育部会、中中連携部会を設置した。授業部会では昨年度の成果と課題を受け、新しく示す「目指す授業の姿」（次ページ参照）の具現化に向けて、見通しをもった研修計画を立案し、授業改善を推進する。中中連携部会では、安宅中学校と連携しながら、授業づくりを中心に共同研究を行い、授業改善および学力調査の分析結果を効果的に活用し、確かな学力の育成を図る（H30・31年度小松市教育委員会指定「学力向上パートナーシップ推進事業」）。道徳教育部会では道徳の教科化に向けて、特に評価に関する校内研修会を7月から8月の間に行い、各学年で指導案の検討を行う。11月から2月にかけて学年ごとに研究授業を実施し、教科化を見据えて授業づくりを推進する。

キャリア教育部会では道徳教育や総合的な学習の時間、学級活動と関連させながら、一人ひとりが自身の将来について考え、学ぶ意欲の向上をねらい、キャリア教育の推進を図る。

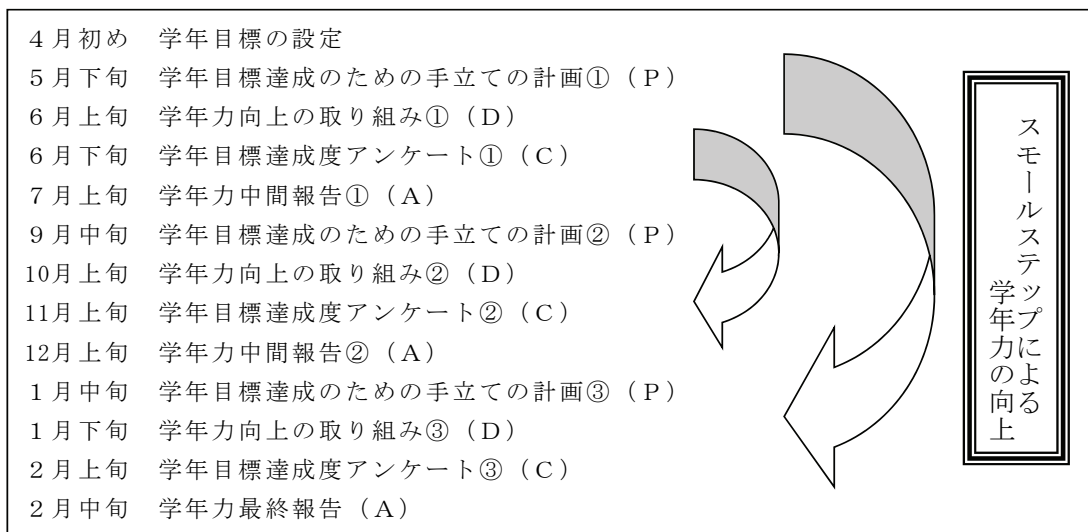
(3) 集団づくり部会

学校生活における集団には、班・学級・学年、あるいは部活動等の様々な集団がある。集団づくり部会では学級・学年・生徒会を中心に集団づくりの取り組みを推進する。以下に柱となる取り組みを述べる。

1) 学年力向上の取り組み

各学年で、学年目標達成に向けた「学年力向上の取組」を行うことで、学校の基盤となる学級力の向上を図る。

学年力向上の取り組みでは、以下の日程でPDC Aサイクルを進めていく。



計画や中間報告の場面においては、学級活動や学年委員会活動における話し合い活動を積極的に取り入れる。

「学びの姿」を生かしながら、協同的に学ぶ姿勢を身に付けさせる。

学年の実情等を踏まえ、場合によっては学期に複数回行うこともある。

2) 国府のつどい

生徒の自治的活動の象徴ともいえる生徒集会「国府のつどい」は、一昨年度の後期に始動した。運営は生徒会役員と各専門委員長・各学年委員長で構成された執行部会が行う。執行部会では、国府のつどいで行われる企画の提案や役割分担などを協議する。国府のつどいで取り扱う内容としては、①専門委員会での取組の周知やその成果報告、②各学年委員会での取組の周知やその成果報告、③執行部会で決まった学校行事のスローガンの周知、④学級力の取組の報告などである。なお、原則として毎月の定例活動として以下のように進める。

国府のつどいまでの流れ

Step1 学年会で学年目標を設定

Step2 学年委員会を実施し、学年目標達成のための取組を考案。

Step3 学級会で学年目標達成のための取組案を検討。

Step4 学年委員会で、各学級で出た意見を吸い上げ、再度取組を考案。

Step5 学年目標達成のための取組を学級ごとに実施。

Step6 学級ごとに学年目標達成度アンケートを実施。

Step7 学年委員会でアンケート結果の集計と分析。

Step8 国府のつどいで取組の成果と課題を報告。

※このPDCAの流れを、各学期に一度は行うことをめざす。

II 研究の実践

1 授業づくりの取り組み

(1) 校内研修会における授業づくり・授業改善の取り組み

以下のような校内研修会を計画・実施し、研究主題のねらいにせまるための研修計画を立て、実践した。

1) 第1回校内研修会（原田先生をお招きして）（5月22日）

金沢大学人間社会研究域人間科学系准教授・原田克巳氏をお招きし、「生徒理解と授業づくり」をテーマに、生徒理解の視点で今後どのような授業づくりが必要かについて研修を実施した。原田先生のご講演からは生徒の気持ちに思いをはせることの大切さや待つことと言葉の丁寧さを意識すること（待つということは何もしないことではない。信頼感をベースとした勇気を伴う積極的行為である）、「居場所」は生徒が欲するところにあること（居場所とは心地よく、心が穏やかでいられる場・時間・関係のことである。居場所とは **Doing** ではなく、**Being** が認められる場所である）などについて学ぶことができた。

2) 計画訪問B（第2回校内研修会）（6月7日）

中期PDC Aのチェック（C）という位置づけと次へのアクション（A）という視点を踏まえ、計画訪問Bを行った。授業づくり・授業改善では以下の点について共通理解を図り、全教職員で授業づくりに取り組んだ。「ねらいに迫る」ための工夫を意識すること、単元マップの活用、タイムマネジメントである。また、計画訪問Aに向けて「目指す授業の姿」における6つの授業改善の視点のうち、「視点⑤、学びの価値に迫る工夫」を重点に考えを深める点に焦点化した指導案検討会を各教科で指導主事の方々と協議した。

3) 第3回校内研修会（相互授業参観週間・1学期OJT週間）（6月4日～8日）

小グループをつくり、授業参観シートの「目指す授業の姿」の授業改善の視点を踏まえながら、互いの授業を参観し合い、教師の手立て、生徒の姿、タイムマネジメントについてチェックを行った。

4) 要請訪問（第4回校内研修会）（7月12日）

小松市教育委員会より指導主事をお招きし、本校学校研究「生徒が主体的に課題解決に取り組む授業づくり」について研究授業を参観いただき、授業づくり・授業改善について研修を行った。授業では「目指す授業の姿」の授業改善の視点から学びの価値に迫る工夫に力を入れて取り組んだ。また、学力向上パートナーシップ推進事業の一環として安宅中学校の先生方に公開授業を参観していただいた。

5) 第5回校内研修会（7月30日）

能美市教育センター研修専門委員・長田聡氏を講師に来年度より実施される「特別な教科 道徳」の指導と評価について、校内研修会を実施した。研修では学習活動を通して、道徳的諸価値（価値理解・人間理解・他者理解）、自己を見つめる（自己理解）、多面的・多角的に考える、自己の生き方についての考えを深めるということ、「教材で学ぶ」ということ、教材は心情読解レベルで終わらせず、道徳的価値レベルに迫る工夫（中心発問→補助発問・問い返しなど）が重要であること、評価については内容項目の評価ではなく、学習状況や道徳性に係る成長の様子を記述していくことを学んだ。

6) 第6回校内研修会(相互授業参観週間・2学期OJT週間)(10月1日～5日)

1学期同様に小グループ(グループを再編成し、若手研修プログラムグループを編成)をつくり、授業参観シートの「目指す授業の姿」の授業改善の視点を踏まえながら、互いの授業を参観し合い、教師の手立て、生徒の姿、タイムマネジメントについてチェックを行った。また、10月10日(水)にOJT週間を終えて、各グループにて振り返りを行った。「目指す授業の姿」の積み上げを目指し、互いの授業を見合うことにより、それぞれの授業での工夫や自身の授業の課題について積極的な協議を行った。

7) 第7回校内研修会(杉江先生をお招きして)(11月15日)

中京大学国際教養学部教授・杉江修治氏をお招きしての校内研修会を実施した。計画訪問Bや学校評価アンケートで見えてきた「深める」の場面における課題(自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している)の解決のために、「授業改善」の目標として、「深める」「振り返る」に焦点化した授業を目指した。具体的には中心発問・中心活動をメインに展開するために前時までの仕込み(家庭学習・個人思考の工夫)を、本時に生かす授業を意識した。深める時間や振り返る時間の捻出を工夫し、指導案・本時の展開の中には「深い学びへの仕掛け」につながる工夫を明記した。

8) 計画訪問A(第8回校内研修会)(12月13日)

授業整理会では、「授業全体を通して、ねらいに迫ることができていたか」「学びの価値に迫る工夫」の二点を中心に協議し、ねらいにそった生徒の学びがあったかを検証した。教科の授業づくり・授業改善では、以下の点について共通理解を図り、全教職員で授業づくりに取り組んだ。本時の授業に活かされる家庭学習や個人思考を行うこと、また、「目指す授業像」における6つの授業改善の視点のうち、視点⑤、学びの価値に迫る工夫を行い、「深め、振り返る」点に焦点化した授業づくりを目指すこと、指導案には「生徒の学び」を検証するために「深い学びへの仕掛け」を明記し、視点⑤の工夫に対する生徒の予想される考えを明記することである。

9) 第9回校内研修会(2月中旬)

能美市教育センター研修専門委員・長田聡氏を講師に1、2年生の道徳の公開授業を参観していただき、指導助言をいただいた。第5回校内研修会で学んだ道徳的諸価値(価値理解・人間理解・他者理解)、自己を見つめる(自己理解)、多面的・多角的に考える、自己の生き方についての考えを深めるということ、「教材で学ぶ」ということ、教材は心情読解レベルで終わらせず、道徳的価値レベルに迫る工夫(中心発問→補助発問・問い返しなど)を意識して取り組む。

(2) 各教科等の取り組み

1) 国語科

①教科における授業づくりの実践

・「つかむ」では、単元マップを活用し、単元全体の見通しと単元のゴールの姿をイメージさせることを行ってきた。また、一時間ごとに自己評価をさせ、コメントも書かせた。そして、授業に対する意欲の向上を図ってきた。

・「考える」では、自分の考えをまとめるときに、本文や、ワークなどの資料に記載された事実を根拠としてあげることを行わせた。また、「とても」と「とてもとても」の違いを考えるなど一つひとつの「言葉」を大切にしながら考える指導を行った。

・「深め、振り返る」では、ペアやグループなどを活用してそれぞれの考えを評価し、認め合うことや

それぞれの良さを取り入れることを行ってきた。グループで一つの意見をまとめることなどを行った。ペア学習やグループ学習を活用しながら、最終的に個に戻して自分の見直しを行った。

②「深める」：学びの価値に迫る工夫

- ・「説明文」（1年）では、筆者の主張を受けて自分の考えをまとめることを行った。この場合4人グループで話し合い、筆者の主張は入っているかや、根拠は明確かなどを確認することなどを行った。グループで評価されたことをふまえて、自分の考えを観点に従ってまとめることを行った。
- ・「話す聞く」（3年）では、「国府の発展」についてグループで話し合いをさせた。その上でグループの提案を一つに絞らせた。生徒は根拠を示しながら積極的に話し合いを行った。話し合いがスムーズに行えるように観点を設定して考えさせたことが効果的だった。

③成果と課題

◆成果

「ねらいに迫る」という点では、単元マップを活用し、最終的なゴールの姿や一時間ごとの授業のねらいが生徒に明確に意識されたと思われる。

「考える・深める」では、ペアやグループ学習の活用や「深める」ために観点を絞るなどの工夫を行った。この結果、4月当初に成果指標としてあげた「ペアやグループ学習などを通して自分の考えが深まった」80%の7月の生徒アンケート結果が、12月では88%になった。

また、「国語の授業は将来役に立つ」の成果指標85%は12月の生徒アンケートでは92%だった。これらは単元マップを活用しての見通しをもった授業作りや、生徒の考えを「深める」ためのペアやグループ学習などの工夫をしたこと、さらに、必ず個に戻り自分の考えをまとめる（書く・発表する）ことが効果的だったと考えられる。また、授業ごとの振り返りや単元を通しての振り返りを行った。このような取り組みを行うことで、生徒の「国語」に対する意識が高まったと考えられる。

◆課題

- ・考えを深める場合、ペアやグループ活動で話し合う時には、生徒が基本的な力をそろえておくことが大切である。しかし、その力が生徒によって大きく違う。今後は「言語」の力を中心に個々の生徒の力をそろえることが必要である。
- ・自分の考えを相手に伝える場合の、「言葉の力」「文の力」が不十分な生徒が多い。そのため、「根拠」をもって「自分の考え」を伝えることが不十分である。今後は「言葉の力」「文の力」をしっかりつけていけるような授業の組み方や家庭学習のあり方が必要になる。
- ・「根拠」のとらえ方と「理由」の捉え方を生徒に明確に伝えていなかったため、話し合いでも不明瞭な場合があった。今後は「根拠」「理由」の違いを教師側で共有して生徒に伝えていくことが必要であると思われる。

2) 社会科

①教科における授業づくりの実践

- ・「つかむ」では、単元マップを活用して、単元を通して解決してほしい課題を確認し、見通しをもたせることで単元のゴールの姿をイメージさせる工夫を行った。単元マップには、1時間ごとに身に付けてほしい力を記載し、単元を通しての本時の位置付けを確認できるようにした。とくに「考える」場面は単元のはじめに全体で共有した。また、授業の導入では、本時の流れをモニターに示し、課題

庭学習として、グループで4つの視点に分かれて既習事項を活用し、北海道地方の特色をレポートにまとめさせた。授業ではレポートの発表から始め、その中からそれぞれの大切な部分を選択し、周りが「なるほど」と思うキャッチフレーズとそれを設定した理由を発表することで、新しい見方や気付きが生まれるように工夫した。

・歴史「幕府政治の改革」の授業では、江戸幕府の政治が行き詰まった理由について、享保の改革や寛政の改革の資料をもとに自分の言葉でまとめさせた。享保の改革、寛政の改革と田沼の政治のそれぞれの内容や重視していたところ、その結果を比較することで、田沼の政治は他とは違う「商人の動き」に着目し、財政の回復につながる改革であったこと、幕府の政治が行き詰まった理由は財政難にあったことに気付かせる工夫を行った。寛政の改革のときに読まれた歌「白河の清きに魚の住みかねて元の濁りの田沼恋しき」を紹介し、田沼の政治の特色を他の改革と比較してグループで考えさせた。また、思考のポイントとして、考える際の視点を与えた。

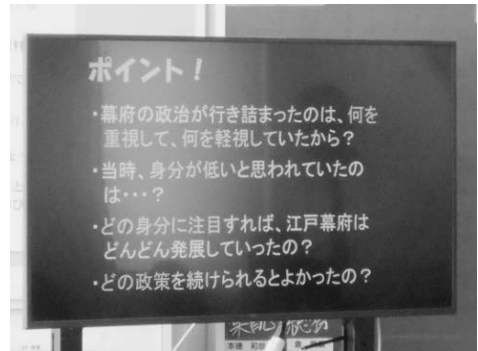
・歴史「明治・日本の国づくり」の授業では、日本が短期間で欧米に並ぶ国になった理由を説明することをねらいに、明治時代の6つの政策について重要だと思うものを選び、その理由を説明させた。説明の根拠として、廃藩置県、学制、徴兵令、地租改正、四民平等、殖産興業のそれぞれ資料を与え、そこからわかること読み取り、まとめる活動を前時に行うことで基礎・基本をおさえた。また、個人思考を家庭学習として、グループで深める活動に時間をとれるようにした。グループの中の2人が別のグループ移動し、他のグループの考えを聞くという活動を行い、他のグループの意見と比較することでより説得力のある理由を説明できるようにすることを意識させた。根拠となるのは政策の資料であることを強調することでより説得力ある理由を追究することができると感じた。全体発表の際は、それぞれの関連付けができるようにカードやミニホワイトボードを活用することで、キーワードを周りに書き込めるように工夫した。

③成果と課題

◆成果

・「ねらい」に迫るといふ点では、単元マップによって単元のゴールの姿を意識させることで、どのような視点で授業に臨めば良いのかが明確になり、生徒の学ぶ意欲の向上や価値付けにつながった。毎時間、ねらいを達成したか自己評価を行うことで、自己の成長を感じることができた。

・「学び方」では、ペアやグループ学習を通して、資料や既習事項を根拠に考えを深めることで、新しい気付きや自分の考えの深まりを感じることができた。家庭学習で取り組んできた個人の考えをもとにグループで意見を交流し、全体で発表する流れの中で、自分の考えとの相違点を見つけ、自分の



考えがより説得力のあるものとなる根拠を明確にすることができた。

・「良さ」では、単元マップの振り返りから以下のような内容がみられた。地理「中国・四国地方」では、「今回学習したことを3年生の修学旅行で活用したい」「観光客を呼び寄せる取組をみんなで考えると、たくさんの意見が出てなるほどと思った」「自分たちのグループと他のグループの意見を組み合わせるとおもしろそうだと思った」「もっと考えてみたい」「自分たちが考えた取組を実現させたい」「知らなかったことがたくさんあって、今度旅行に行ったときに家族に教えたい」、歴史「明治・日本の国づくり」では、「様々な政策を考えた日本はすごいと思った」「現在にもつながる政策がたくさんあると思う」「グループで話し合うと、自分の考えが深まった」「自分は最初の考えと変わらなかったけれど、それを選んだ理由がもっと深まった」「他のグループの意見に納得することができた」「どの政策も、日本という国をつくるためには大切だとわかった」など新しい気づきが生まれたことで良さを実感することができたことがわかる。

・12月実施の授業アンケートの結果からは、ねらい「(授業のねらい)ができた」、学び方「ペアやグループ活動を通して、新しいことに気づいたり、自分の考え方が深まった」の項目ではどちらも100%肯定的な回答を得た。良さ「社会科の授業は将来役に立つ」の項目では、94%の生徒が社会科の良さや楽しさ、大切さを感じることができた。成功体験「授業では、自分の考えを述べるなど活躍する場面があった」の項目では94%の生徒が授業の中での自分の活躍を実感することができた。根拠「授業では根拠をもとに理由をつけ、先生や友だちに説明することができた」の項目では94%の生徒が根拠をもって説明することができた。

◆課題

・全体で深める活動に時間をかけるために、家庭学習を生かした授業づくりをさらに進めていく必要性を感じた。個人思考を家庭学習にする際に、しっかりと個人の考えをもてるもの、全員が必要感をもって取り組める課題づくりとなるように工夫していきたい。

・考えを深める、根拠をもって説明するときには基礎・基本をおさえる段階が必要である。深める活動に入る際に、前時に考えの基盤となる資料や語句の整理をする場面の設定を行っていきたい。

3) 数学科

①教科における授業づくりの実践

・「つかむ」では、単元マップを活用し単元全体の見通しと単元のゴールの姿をイメージさせる工夫を行った。また、授業の始めに本時で利用する既習事項の復習をすることで授業内容をスムーズに理解できるようにした。

・「考える」では、あらかじめ宿題として問題を出しておき、考えを発表するための時間が多く確保できるように工夫した。発表者を指名するときには、多様な考え方が出てくるように意識して行ったり、発表前に隣同士でどのように考えたかを確認させたりした。また、自分だけで考えることができない生徒のためにヒントカードを準備したり、考えやすいように空欄補充のワークシートを準備したりもした。

・「深め、振り返る」では、深める場面として、多様な条件を見いださせる中で問題の考え方はいろいろあって違うことをしているようにも感じるが、最後に導き出される解答は同じものになることを確認させた。「三角形と四角形」の証明の単元では、その反対にいろいろな条件を考えることができるが、証明することが可能なものと不可能なものがあることに気づかせることもあった。振り返る場面では、まとめは生徒の言葉を用いて板書することでしっかりと確認させた。また、単元マップでゴールの姿を再度確認してから振り返らせた。

②「深める」：学びの価値に迫る工夫

・「連立方程式の解き方」(2年)では、加減法とは異なる代入法の解き方を確認するために、【基礎コース】では、文字に式を代入することで文字が消去され、1元1次方程式に直して解くことができることに気づかせた。【標準コース】では、代入法だと式を変形せずにそのままの形で解けることに気づかせることで、加減法と代入法の2つの方法の使い分けを意識させるようにした。

・「平行線と角」(2年)では、補助線の引き方をいくつも考えたり、点の位置の取り方をいくつも考えて図形の形を変えさせたりしたものをグループに割り振ることで、いろいろな方法で求めても同じ結果が得られることを確認し、公式や考え方を見出させた。

・「三角形と四角形」(2年)では、補助線のとらえ方により、多様な証明方法があることに気づかせたり、いろいろな条件を考えることができるが、証明することは可能なものと不可能なものがあることに気づかせたりした。

③成果と課題

◆成果

・「ねらい」に迫るという点では、単元マップによって単元のゴールの姿を意識させることで、授業への取り組み方が明確になり、生徒の学ぶ意欲の向上につながった。また、授業の最初に復習として、既習事項の確認をして本時のねらいを達成するために必要なものをあらかじめ示しておいたことも有効であったと考えられる。

・「学び方」では、友だちと相談したり、確認したりすることで、自分ではわからなかった問題の解き方がわかったり、自分の考えが深まったりした。自分の考えを伝えてみることで、自分の考え方の矛盾点や間違っている点について相手に指摘されたり、改めて気づくことができていた。

・「良さ」では、単元マップの振り返りに次のようなものが見られた。『式の計算』では、2年生の計算は1年生の計算の発展した感じだと思った』『平行と合同』では、1年生の時よりも図形について理解できるように一生懸命授業を聞くことができた。このように、学年が上がるときの積み上げを感じることができていた。

・2学期末の生徒アンケートで「将来役に立つ(良さ等を感じた)」の肯定的な回答が89%であった。数学の必要性や重要性については十分気づいているので、この生徒の意欲を「よくわかる」につなげていけると良い。

◆課題

・自分の考えをもつことができていなかったため、話し合いの活動や発表に進んで参加できなかった生徒もいた。自分なりの考えがもてるようになるためにも基礎基本の定着が必要である。そのためには、授業の最初に行っている既習事項の復習は続けていく必要があるし、ワークや自主勉ノートを使つての家庭学習が当たり前になるように取り組んでいかなければならない。また、発表するためには自分の考えに自信がもてることも必要である。そのためには、ペアやグループ内の少ない人数での確認や意見交換などの時間をもっと増やしていくことが必要である。

・2学期末の生徒アンケートで「根拠を明らかにして理由が説明できる」の肯定的な回答が67%であった。生徒たちは根拠を明らかにして説明することを苦手としている。そこで、生徒の疑問や考えを引き出せるような発問を考えたり、説明不十分な部分についての問い返しをしたりしていくことで、生徒の頭の中でまとまっていないものを整理する手助けをしていく必要がある。

4) 理科

①教科における授業づくりの実践

・単元や授業の導入において、単元マップを利用し、生徒とともにゴールイメージを共有した。そのことにより、教師も生徒も「この単元で何を学ぶのか」「本時は何を中心に勉強するのか」といったことが明確になった。また、単元ごとに学びを生かす活用の授業を設定し、単元マップに印をつけた。そして、活用の授業に向けて目的意識をもって普段の授業をすることができた。単元マップで見通しをもたせると同時に、どうなれば、もしくは、何ができるようになればいいのかという評価の視点を示した。

・導入時、単元マップで見通しをもたせるだけではなく、現象を見せたり、体験活動をしたりして、「なぜ？」という疑問が出るよう工夫した。例えば、2年生の「静電気と電流」では、ポリ塩化ビニルのパイプでポリエチレンのひもでつくったクラゲをふわふわ浮かせる活動を取り入れる中で疑問を出させ、課題につなげた。

・「考える」では、前時に課題を出し、家庭学習でその課題についての考えてくることで、個人思考の時間をとらずにペアやグループ活動に入れるようにした。

理科 単元マップ 単元名「第3章 大気の動きと日本の天気」

(1) 単元のゴール 2年()組()番 氏名()

- 日本の天気の特徴を、天気に影響を与える気団や偏西風と関連づけて説明できる。
- 天気図などの根拠から、天気の予測をすることができる。

(2) 学びの足跡 評価 A:よくできた B:まあまあできた C:あまりできなかった

時	小単元	ゴールの姿	視点・キーワード	学習日	評価	振り返り
1	1 日本の天気	春や秋や冬の天気の特徴をどらえ、説明することができる。(知・理)	移動性高気圧 シベリア高気圧、 シベリア気団、季節風	月 日		
2		梅雨や夏や台風の特徴をどらえ説明することができる。(知・理)	梅雨前線、秋雨前線 太平洋高気圧 小笠原気団	月 日		
3	2 大気の動き	季節風がなぜ起こるのかを考えることができる。(思・表)	海陸風 気圧配置と季節風	月 日		
4		地球規模での大気の動きを読みとることができる。(技)	大気を動かすエネルギーと大気の動きとの関係	月 日		
5	4 気象災害への備え	気象現象によって、どのような災害が起こるか考える。	災害と対策	月 日		
6	3 天気の変化を予想しよう ★	天気図から、自分たちの住んでいる地域の天気を読みとることができる。(思・表)	気圧配置 気象観測データ	月 日		

(3) 単元の振り返り

(1) 単元のゴールについて(何がわかったり、できるようになりましたか)

振り返り(授業に対する学び方はどうでしたか)

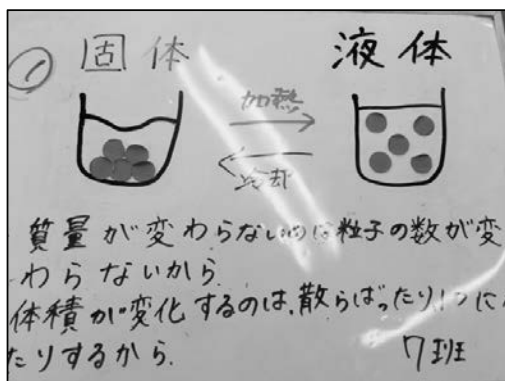
活用・良さ(何に生かすか?)

単元の評価

②「深める」：学びの価値に迫る工夫

・1年生「葉・茎・根のつくりとはたらき」では、単元の最後の時間に、これまで学んだことを基に、植物が成長するとき、葉・茎・根でどのようなことが起こっているかを一人ひとり考え、その後、グループでまとめた。最後にグループセッションの形式をとり、それぞれの部位のつくりとはたらきの関連性について学びを深めた。ただ、ここでは個人思考の時間を多くとってしまったため、振り返る時間を確保できなかった。

・上記の課題を受け、1年生「物質の姿と状態変化」では、「ロウが固体から液体に状態変化するときの体積や質量の変化」について粒子モデルを用いて家庭学習で考えさせた。家庭学習で個人思考することで、深める時間と振り返る時間を確保できた。学びを深める仕掛けとして、固体から液体だけでなく、液体から気体に状態変化させるときどうなるか、また、温度が上がるとどうして粒子間の距離が広がり、体積が大きくなるかといった粒子の熱運動まで考えさせることで、より深い学びにつなげられるよう工夫した。



・2年生「大気の動きと日本の天気」では、「気象予報士になったつもりで明日の天気を予想しよう」という課題のもと、多くの資料を基に、既習事項をもとに次の日の天気を予想した。班に一人説明役を配置し、他の人は自分の好きなところに行って意見交流を行った。活発な意見交流がなされ、最後の振り返りでは「天気図、気圧配置などの資料をもとに既習事項と照らし合わせ、総合的に判断することが大切だと思った」など学びの価値にせまる振り返りも見られた。次の日には、「やったー！当たった！」など、天気の動向に関心を寄せる生徒の姿があった。



③成果と課題

◆成果

・「ねらい」に迫る取り組みとして、単元マップを用いて、ゴールイメージを生徒と共有したり、単元の見通しをもたせたりすることで、まず教師がぶれずにねらいや評価を意識できるようになった。そのことで、生徒も「今日何をするのか」や「何ができるようになればいいのか」が明確になった。例えば、1年生「葉・茎・根のつくりとはたらき」では、単元のまとめとしてパネルセッションを行ったが、もう一度自分の学びを見直し、周りにアウトプットすることで、ねらいにより迫ることができた活動であった。これも、単元マップで見通しをもち、単元のゴールに向かって授業をしていくことの成果であった。

・「学び方」では、ペアやグループで対話するだけでなく、発表役を決めて、他のメンバーが他のグループに自由に聴きに行ったり、パネルセッションを行ったりすることで、積極的に発表したり、自分の考えや疑問を発表したりする姿があった。このことは学びを深めることにもつながったと考えられる。

・「良さ」では、日常生活で見られる身近な現象を見せ、疑問が生まれ、その疑問から課題ができ、その課題を解決していく中で、理科を学ぶことの意味を感じる生徒も多くなった。例えば、2年生で行った「明日の天気予報」では、授業後に前線のようなすをニュースで見ても、次の日の天気に関心をもったりする生徒が見られた。

・12月実施の授業アンケートの結果からは、ねらい「(授業のねらい)～がわかった」の項目で94%の生徒がわかったと答えた。学び方「ペアやグループ活動を通して、新しいことに気づいたり、自分

の考えが深まったりした」の項目では97%の生徒が肯定的な回答であった。良さ「今回の授業を通して理科を学ぶ良さや楽しさ、大切さを感じることができた」の項目では94%の生徒が学ぶ価値を感じることができた。成功体験「授業では、自分の考えを述べるなど活躍する場面があった」では、100%の生徒が活躍する場面を実感することができた。根拠「根拠を示し、先生や友だちに説明できた」の項目では、85%の生徒から肯定的な回答を得ることができた。

◆課題

・2学期末に行ったアンケートでは、「授業はよくわかる」と答えた生徒は76%であった。また、良さ「将来役に立つ」と答えた生徒は71%であった。いずれの数値も高いとは言えない。これは、生徒にとって課題が難しすぎたり、日常生活とはかけ離れていたりすることが考えられる。そこで、日常の中での理科を教師自身が探し、実験の現象に絡めて語ったり、課題が生徒自身から出るような仕掛けを工夫したりしていくことがこれからの課題である。

・学びを深める場面において、教師側の発問を受け生徒が答える構図が、多くあり、生徒同士の対話中で学びを深める活動が少ない。教師の発問をさらに工夫したり、対話の隊形を工夫したりすることで、生徒同士の会話が増え、深い学びにつながると考えられる。そして、そこまでの仕込みをいかに普段の授業で行っていくかが課題である。

5) 英語科

①教科における授業づくりの実践

・「つかむ」では、課題と本時の流れ、目指す姿(評価基準A～C)を提示し、どのように1時間の課題を達成すればよいかというイメージを生徒と共有することを心がけた。また、英語で話す雰囲気や生徒同士で協力できるあたたかい雰囲気を作るために、ペアでの短い対話活動(曜日・日付・前時の基本文の確認、1 minute speaking)や単語練習をウォームアップ活動として取り入れた。



・「考える」は「深め、振り返る」で英語を活用するための準備段階として、新出文法の使い方を理解したり、「深め、振り返る」での交流や対話活動のために個人やグループでアイデアを練ったり、情報を収集したりした。新出文法を導入する際は、生徒の興味関心をひきつつも、わかりやすい例を用いることを心がけ、生徒とのインタラクションやALTとのデモンストレーション、プレゼンテーションを用いた。

・「深め、振り返る」では、ペアを何度も替えながら、「考える」で学んだ文法を使って自分の意見を伝え合う対話活動を取り入れた。これは、繰り返し活用する中で定着させることや、正しい活用法に気付くことをねらいとした。また、対話活動で得た情報をもとに英作文し、書いた文を交換して読み合って評価し合ったり、気づきを指摘し合ったりもした。「振り返る」では、単元マップに「つかむ」で示した評価規準に基づいて判断した自分の達成度と、取り組みの様子を書き込んだ。

②「深める」：学びの価値に迫る工夫

・1年 Unit6 の Goal Activity では、三人称単数現在形を活用する場として、ALT や先生の家族について質問して得た情報をもとに、グループでまとまりを意識して作文する活動を設定した。グループで指摘し合いながら工夫して作文していた。1つのグループの作文を取り上げて共有し、「よいところ」を全体の場で挙げた。

・2年 Let's Read 1 では、グループで1つの場面を選び、自分たちで工夫してスキットを発表する活動を設定した。登場人物の気持ちや場面に合わせた話し方や適するジェスチャーなど、グループ内で協力しながらアイデアを出し合い、堂々と発表することができた。また、自分たちのグループと同じ場面を選んだグループの発表を見て、自分たちで思いつかなかったオリジナルの工夫に気づくこともできた。



③成果と課題

◆成果

・「ねらい」に関しては、単元マップを用いることで、単元全体の見通しと生徒自身のゴールの姿の意識づけにつながった。新たな内容を学ぶことや自己の表現の幅が広がることを楽しみにしている生徒もおり、振り返りの内容も具体的にできるようになったことや既習事項との関連性についても書いていた。さらに評価の基準を明確化することにより、見通しをもつことを苦手とする生徒にも1時間の授業のゴールがわかりやすくなった。例えば、疑問詞 **Whose** の授業では、「ヒントなしで誰のものかたずね、答えられたら A 評価」「ヒントを参考にしながら話すことができたなら B 評価」というように、生徒全員が評価の基準を理解しやすくなるよう具体性をもたせる工夫をした。

・「学び方」では、個人で考え、練習する時間の後にペア・グループ学習を行うことによって、キーセンテンスの使い方や、単語や文法項目といった既習事項の生かし方を再確認でき、仲間と対話する中で新たな発見に気づくことができた。グループで対話文を作成する授業では、よりスムーズで自然な対話になるように、あいづちやジェスチャーを入れることなど意見を出し合う姿が見られた。また、複数の仲間の意見を聞き、自分の考えを話すことによって、「深まった、活用できた」と生徒自身が実感できた旨の振り返りも見られた。

・「良さ」に関して、生徒の振り返りでは以下の内容が見られた。

- クラスのみんなとのコミュニケーションが楽しい。
- 実生活に活かせる実践的な授業である。
- 難しい英文を書いたり、読んだりできたときや自分の話す英語が相手に伝わると、自分が成長していると感じられる。
- 自分の言いたいことが英語で言えると楽しい。

・12月実施の授業アンケートでは、ねらい「(授業のねらい)～ができた」の項目で100%、学び方「ペアの活動を通して、新しく学んだ文法の意味や使い方がよく分かった」では96%、良さ「授業を通して、英語を学ぶ良さや楽しさ、大切さを感じる事ができた」に関しては89%と肯定的な回答が多かった。

◆課題

文法項目の授業だけでなく、本文読解の授業でも評価基準を明確にすることが必要であると感じた。英語を苦手とする生徒が B 評価をクリアするために何が必要なのか気づかせたい。また、ヒントカードや情報の視覚化でどんな生徒でも授業内容が理解しやすくなる手立てを工夫をしていきたい。



12月実施のアンケートで「英語の勉強が好きだ」と回答した生徒が全体の79%であるにも関わらず、「英語の勉強は大切だ」と答えている割合が95%もある。「使いたい、話したい」気持ちはあるが、学習内容の定着に不安があり、自信をもてない生徒がいる一面もある。今後の手立てとして、インタビューテストなど即興で英会話を行う場面を授業の中で増やしていく必要がある。

6) 音楽科

①教科における授業づくりの実践

・音楽科では、生徒一人ひとりが音楽に対する興味・関心を高め、いかに音楽に関心をもつか、また、生徒が主体的に授業に参加し、課題を見つけ、課題解決に向かうかを考えて取り組んできた。そのためにも、なぜ中学校で教科として音楽が存在するのかを、生徒一人ひとりが意識して取り組む



ことが大切であると考えた。音楽を鑑賞したり、音楽を奏でることや歌ったりすることで、心が落ち着いたり、心が和まされたり、頑張ろうとする意欲が湧いたりする。また、音楽を聴いて感動したり、涙が出たりする。音楽にはこのような不思議な力があり、そこから、感受性が育ち、共感する力が湧いてくると考えられる。

・「つかむ」では、単元マップを活用して、単元の見通しをもち本時の位置づけがはっきりすると同時に、単元の見通しをもつことができる。また、振り返りなどを行う事で、本時からの反省や次時の課題を個人やグループから見つけることができる。

また、合唱コンクールに向けての、グループ練習や放課後練習などにも、単元マップ同様のファイルをクラスごとに利用することで、練習の成果に役立つことができるように考え活用した。そのファイル

音楽科単元 Map
単元名 「 アルトリコーダーでアンサンブルをしよう。 」

(1) 単元のゴール

課題に対して、その演奏技術を身につけ、曲のイメージを感じ取り、表現の工夫をしながら、個人やグループで演奏することができる。

(2) 学びの足跡

	ゴールの姿	視点・キーワード	学習日	振り返り問題	評価	振り返り
1	「ふるさと」をアルトリコーダーで演奏しよう。	・楽譜を継続みして、リズム・運指に気をつけてアンサンブルにつなげよう。	月 日	・		
2		・曲にふさわしい音色や奏法をグループで考え、より良い演奏方法を考えよう。(アーティキュレーションなどの確認)	月 日			
3	「ふるさと」のグループアンサンブルを発表しよう。	・グループ発表で、他のグループの演奏から、良い表現を学び合おう。	月 日			
4		・「ふるさと」の仕上げをしよう。	月 日			

(3) 単元の振り返り

(1) について

振り返り

単元の評価

にも、教科担当が毎日コメントを書き、次日の練習に役立つようにアドバイスを書いてきた。いろいろな工夫から、生徒の音楽に対する意識を高めた。

- ・「考える」では、授業のグループ活動を通し、個人の技能に対する力をより向上させるための工夫を考えてきた。ホワイトボードを活用し、グループの意見を他グループに意見交流することで、音楽を深めることができるよう工夫してきた。

- ・「深め、振り返る」では、グループ活動の意見を、班員全員が、グループの意見としてみんなに発表できる機会をもたせる工夫をしてきた。また、合唱練習では、リーダー中心に自分たちの課題を見つけ、他のパートに発表するだけでなく、意見交流も行ってきた。また、練習後は振り返りも大切にしてきた。

②「深める」：学びの価値に迫る工夫

- ・「混声合唱」では、パートリーダーを中心に課題意識をもってパート練習に取り組んだ。楽曲の構成や表現方法などの視点から、ホワイトボードを利用し、情景を深めたり、グループの意見を出し合うことで、みんなが考えを深める場を設定することができた。また、そこから、グループの考えを互いに深め取り組むことで、合唱を作り上げることができた。

- ・「器楽練習・アルトリコーダーと三味線」では、グループ練習で、パートリーダーが中心にアーティキュレーションを意識し、中でもレガート奏法やノンレガート奏法などを取り入れ、中間発表を行う事で、グループの課題を見つけ、より良い演奏に仕上げ発表につながぐことを考えた。

③成果と課題

◆成果

- ・「ねらい」に迫るとい点では、単元マップを活用することで、単元の見通しをもって、授業に取り組むことができた。また、目標をもつこともできた。また、見通しだけでなく、ゴールの姿も確認することができ、単元の見通しは、授業に参加する生徒にとって、授業の成果にも繋がりやすいと考えられた。また、学ぶ生徒の意欲にも繋がっていく。アルトリコーダーのグループ練習でも、アーティキュレーションの奏法を意識し、模範演奏を聴かせることで、ゴールの姿の見通しをもつことができた。

- ・「学び方」では、合唱のパート練習では、授業の中で、生徒自身がパートリーダーとして、授業の主役として活動することは、教師の主導型とは違い、課題解決に意欲を注ぐ方法だと痛感することができ、成果も見られた。また、パートの中に音楽経験者や吹奏楽部などの生徒が存在することで、より良い成果が期待できた。また、合唱する時の生徒の表情も、良い表情に変化している。

- ・「良さ」とい点では、深め・振り返る場面でホワイトボードを活用し、グループの交流から、自分の考えを深めることができ、みんなで音楽を創り上げていく意識が高まったり、次時への学びに向かう意欲が高まったり、教科の良さを生徒一人ひとりが実感できる様子が見られた。

- ・12月の実施アンケート項目では、「授業はよく分かる」と答えた生徒は90%、「ペアやグループ活動が深まった」と答えた生徒は97%、「将来役に立つ」と答えた生徒は100%との回答を得ることができた。

◆課題

- ・音楽の授業では、情景を感じ取る学習においては、一枚の絵などの鑑賞から得る曲の情景よりも、やはり、曲の強弱や歌詞やメロディーなどから、感じ取る方法が具体化されると考えられる。

- ・音楽の授業の中でリーダーを育てる方向を、他教科や教室などでも継続できると、リーダーが育ち、生徒の成果にもつながっていくと考えられる。

・鑑賞教材の取り組みでは、個々によって生徒の音楽的能力が異なるために、吹奏楽の部員や音楽経験のある生徒の能力はあるが、音楽経験のない生徒の意見を待つだけでなく、教師側から視点を明確に指示することも大切である。本時のねらいの視点を大切にすることが必要である。例えば、ベートーヴェン「交響曲第五番」の第一主題・第二主題の確認を最初にする必要があった。

7) 保健体育科

①教科における授業づくりの実践

・「つかむ」では、単元マップを活用し、各運動領域における単元全体の見通しと単元のゴールの姿をイメージさせる工夫を行った。単元マップには1時間ごとのゴールの姿を記載し、各授業の位置付けを授業の導入で確認することによって学びに対する意欲の向上を図った。また、授業の導入では課題と授業の流れを示した。活動内容を段階的に示すことで一つひとつの活動の意味を意識させた。

・「考える」では、既習事項としての技能習得のポイントや資料（ビジュアル体育実技、教科書、保健学習ノート）を根拠として自分の考えを説明できるように授業の中で発問や問い返しを意識した。

・「深め、振り返る」では、グループ間での相互評価活動を取り入れ、互いのグループの良い点や課題を評価し、伝え合う活動等を取り入れた。また、タブレットを活用して互いの動きを確認し、技能習得のポイントに照らし合わせて意見を伝えたり、動きの修正を行ったりし、必要感のあるグループ学習・ペア学習を意識した。まとめ・振り返りでは、単元マップを活用した。本時の「ゴールの姿」に対して、「振り返りの視点」を示し、課題に対してわかったこと、できたことをまとめられるように工夫した。また、「仲間か

保健体育科 単元マップ 第1巻 1年生・必修 2学期・1 24 4 2018

(1) 単元マップ

単元全体の見通しと単元のゴールの姿をイメージさせる工夫を行った。単元マップには1時間ごとのゴールの姿を記載し、各授業の位置付けを授業の導入で確認することによって学びに対する意欲の向上を図った。また、授業の導入では課題と授業の流れを示した。活動内容を段階的に示すことで一つひとつの活動の意味を意識させた。

時	単元目標	授業内容	ゴールの姿	単元のゴールの姿	単元のゴールの姿	単元のゴールの姿
1	1	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
2	2	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
3	3	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
4	4	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
5	5	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
6	6	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
7	7	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
8	8	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
9	9	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
10	10	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
11	11	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		
12	12	フットボールの基礎動作	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。	フットボールの基礎動作を、ドリブル・パス・シュートの技術を身に付ける。		

(2) 単元マップ

(1) 単元マップ

(2) 単元マップ

単元マップの例



ら」のアドバイス、「学び方の自己評価」を設定し、学び方に対する振り返りができるように工夫した。単元全体の振り返りでは、「単元のゴールについて（ねらい）」「振り返り（学び方）」「活用・良さ（何に活かしていくか）」の欄を設定した。



②「深める」：学びの価値に迫る工夫

・「陸上競技・ハードル走」の授業では、インターバルを3 or 5歩のリズムで走り通すポイントを見つけるために「振り上げ足の振り上げ位置」「跨ぎ足の形」「歩幅」「リズム」「インターバルの距離」の視点を提示し、グループ内で互いの試走を観察し、気づいたことを話し合って次の試走に活かす工夫を行った。

・「ダンス・現代的なリズムのダンス」では、互いに見合うグループを作り、工夫した点を伝え、仕上がりを発表させた。どのような点が工夫されていたか、どこを修正するとさらに良くなるかをグループ間で伝え合う工夫を行った。

・「球技・バレーボール」では、オーバーハンドパスやアンダーハンドパスで学んだ既習事項を活かしながら、チームとしてボールをつなぐために必要なポイントを練習の中で意識できるようにグループ内での話し合いを行い、対人パスとの違いやパスの質について発問や問い返しを行った。体の向き的重要性やコミュニケーションの重要性、パスの高さや強さの加減といった新たな気づきを後半の練習に活かすようになった。



③成果と課題

◆成果

・「ねらい」に迫るといふ点では、単元マップを活用し、最終的なゴールの姿を生徒が意識することで、1時間の授業のねらいや課題が明確となり、生徒の学ぶ意欲の向上や学ぶことへの価値づけにつながった。例えば、バレーボールの授業ではオーバーハンドパスやアンダーハンドパスの個人技能の習得が三段攻撃等の集団技能の向上につながり、ボールがつながるバレーボールの試合からはバレーボールの特性に触れる楽しさに気づくことができた。この楽しさは生涯スポーツにつながるものであると考える。

・「学び方」ではグループ学習・ペア学習を通して、既習事項や資料を根拠に自分の考えを仲間に伝えたり、仲間の考えを聞いたりすることによって、既習事項の再確認や新たな気づきを共有する

ことができた。例えば、気剣体の一致を判定するために、剣道の授業では既習事項である声をしっかりと出すこと（気）、有効打突部位がしっかりと竹刀に打ちこまれていること（剣）、踏み込み足がしっかりと行われ、姿勢が安定していること（体）、打ち込んだ後に残心が行われていることを活かし、タイミングを一致させるための間の取り方や相手の目を見て互いの呼吸を合わせるなどの新しい視点に気づき、一連の動作がスムーズに行われていることなどについて話し合う姿が見られた。

・「良さ」という点では、単元マップの単元全体の振り返りを見ると以下のような内容が見られた。球技・サッカーでは、スペースを作るために「幅と厚み」というキーワードで授業を進めたが、この視点はバスケットボールに活かすことができる。ダンスでは仲間の前で楽しく踊ることで表現することの楽しさを学んだ。他の授業の中でも積極的に自分の意見を発表し、表現できるようになりたい。また、運動会で3年生のように自分たちで作って、そのダンスを後輩にしっかりと教えたいといったものが見られた。

・11月実施の授業アンケートの結果からは、ねらい「(授業のねらい) ～ができた」の項目で85%の生徒ができたと答えた。学び方「ペアやグループ活動を通して、新しいことに気づいたり、自分の考え方が深まった」、良さ「今回の授業を通して、〇〇(教科)を学ぶ良さや楽しさ、大切さを感じることができた」については100%肯定的な回答を得た。成功体験「授業では、自分の考えを述べるなど活躍する場面があった」では、92%の生徒が活躍する場面を実感することができた。

◆課題

・個々の見取りやグループの見取りをもっと丁寧に行う必要性を感じた。特に運動を苦手とする生徒がどこにつまずきを感じ、つまずきを解決するための方策や支援の仕方に課題を感じた。今後の手立てとしては運動のコツを教師が全体へつなげるために問い返しやゆさぶりを行ったり、技能レベルに応じた課題の提示や評価基準の提示を行ったり、グループ内で教え合う際に視聴覚教材の活用等を行ったりしていきたい。それによって、運動を苦手とする生徒にとっても意識すべきポイントが明確になり、できたという実感(成功体験)を感じさせたい。

・11月実施の授業アンケートの結果からは、根拠「授業では根拠をもとに理由をつけ、先生や友だちに説明することができた」において肯定的な回答が78%であった。根拠をもとに自分の考えを説明することが難しい生徒が見られる。既習事項や資料を活用し、自分の考えが述べられるようなワークシートの工夫や場面の設定を工夫していく必要がある。

8) 特別支援学級

①教科における授業づくりの実践

・教科学習への関心・意欲を高め、楽しさと充実感を得るために、視覚に訴える授業が中心となった。基礎・基本を身につけ、生活で生かす、学習事項を話題にする等ができるようになれば、「学んでよかった。」と言えると考え、生徒本人が楽しめる教材・内容を目指した。

・「つかむ」では、授業の最初の「本日の課題」を明示し、何を学習するかめあては何か、今日のゴールは何かを示した。そうすることで、学習の意義、目標を生徒が知り、意欲・関心を高めることを目指している。また、日常生活や将来の生活で、学んだことをどう生かせるかある程度イメージできたようであ



る。

・「考える」では、積極的に活動する、自分の意見を伝えることを目指した。資料や実物を活用し、具体的に示すことで活動の内容をつかみやすかったようである。また、ワークシートに具体的な図や写真を入れたり、選択肢を設けたりして自立的な活動を促すようにした。

・「深め、振り返る」では、授業で何ができるようになったか(身についたか、わかったか、得意になったか等)を振り返るようにした。思ったこと、感じたことを言葉で表すことで、はっきりとした形で学習内容を実感できるようにした。

②「深める」：学びの価値に迫る工夫

・「人間関係の形成」「コミュニケーション」「心理的な安定」の区分を主なめあてとした自立活動では、相手も自分も気持ちのいい言い方の練習(ロールプレイ)、友人の言動のとらえ方(なぜその言動があったかいろいろな可能性を考える)、環境の見方などの授業を行った。柔軟で多面的な見方・考え方があること、一人ひとり違いがあることを体感した。

・理科では、教科書や資料を用いての調べ活動を多くとり入れた。文章の読解力、ポイントをしばってキーワードをさがす力を高めることが目的であった。生徒自身は自分の力で課題を解決していく楽しさを感じることもあった。

③成果と課題

◆成果

・「ねらい」に迫るという点では、本時のゴールを示したことで生徒自身がねらいを意識し、活動の意義を理解して授業に取り組めた。たとえば、数学では、今学習することの意義を計算技能や思考力の向上にあると意識し、将来につながるものと考えて、活動の意義を見だしていたと考えられる。

・「学び方」では、調べ活動、まとめ活動で、自分たちで課題を完成できることで自身を高めることができた。また、振り返りで生徒は自分自身の内面と向き合っていた。

・「良さ」では、将来の生活でどう活かせるか生徒自身が考えられた。また、授業で学んだことを意識的に活用している場面も見られた。



◆課題

- ・自分の意見を自分のことばでまとめることに、まだまだ苦手意識がある。授業でのことばかけや発表活動、日頃のコミュニケーションなどで生徒の言語知識・表現を身につけるようにしたい。生徒が自信をもって発表できるよう、内面と外面からの働きかけ、人間関係づくりを心がける。
- ・生徒は初めての活動、新しい活動では不安があることもある。課題とめあて、ゴール、支援などを明らかにして不安を低くすることが必要である。また、教育活動全体で声かけ、励まし、人間関係づくりをきめ細かく実践し、生徒の自己有用感・自己肯定感を高めたい。
- ・11月・12月のアンケートで「授業のねらいがわかった」「学ぶ楽しさがわかった」という回答が多かった。授業内容・方法さらに工夫・改善して発展させていく。

9) 道徳教育～3年生の実践より～

①中心発問によってねらいにせまる考えが引き出されていたか

11月に「風に向いて立つライオン」を用いて研究授業を行った。本資料は、「風に向いて立つライオンでありたい」という歌詞の一節を用いたものである。それゆえ高い理想をもってさまざまな困難に立ち向かい、よりよく生きようとする姿に共感させ、自らの将来への希望や勇気をもたせるイメージを具体化させやすいという特徴がある。他方、生徒の実態としては、夢の実現に向かって日々の授業や係活動、生徒会活動、学校行事などに積極的に取り組んでいる生徒が多いものの、自分の将来に展望がもてず、目の前にある辛いことや苦手なことを避けようとするという傾向がうかがえることから、本資料のねらいを「主人公の生き方とおして、理想とする夢を実現するためには、失敗を恐れて躊躇する気持ちに屈せずに、自分が正しいと思うことを、あきらめずにやり遂げる積極的な気力や前向きな姿勢が必要であるのだということに気づき、今後の自分の生き方について考える」こととした。また以上のことから、ねらいに迫る中心発問を『「風に向いて立つライオンでありたい』とは、どのような生き方をしたいと言っているのだろうか』とした。

授業では、補助発問として『「辛くないと言えば嘘になるけどしあわせです』とはどういう気持ちだろう』について考える場面を設定した。その際に、本資料の背景（夢の実現のために恋人と別れてアフリカの地へ赴いたこと・結婚することを伝えるかつての恋人から届いた手紙の返信であること）について、導入部で生徒に十分に伝えられていなかったことが明らかとなるような発言があった。資料の状況設定が明確でないまま、生徒の思考が進んでいたものと考えられる。そのことが、以下に述べる②深める場面につなげる難しさにつながってしまった一つの理由でもあると考える。

②ねらいにせまるために、問い返し・ゆさぶりによって考えが深められていたか

ねらいにせまる・深めるための工夫として、『「風に向いて立つライオンでありたい』とは、どのような生き方をしたいと言っているのだろうか』という中心発問を、終末で再度問う場面を設定することを当初は考えていた。しかし実際の授業では、前半部分に多くの時間を割いてしまったため、後半の思考する時間を十分にとることができなかった。そのことが、ねらいにせまる・深まるというところまで至らなかった理由の一つであると考えられる。

また、研究授業後の講話「授業展開について一さらに深く考えるためのヒントー」の中では、講師の長田先生より「自分のこととして、もしくは多面的にとらえさせるためには、『風に向いて立つライオンでありたい』という主人公の生き方について、どのように思うか』『風に向いて立つライオン』の生き方をするためには何が必要なのか』という道徳的価値レベルの発問が必要であったとのご指摘をいただいた。

③成果と課題

◆成果

今年度の道徳は、昨年度に引き続き「考え、議論する道徳」をテーマとし、思考を深めるための発問について研修を深めてきた。また、その際には長田先生を講師として招聘し、適切な指導や助言（自己を見つめたり多面的多角的に考えさせたりするための授業展開の工夫や具体的な評価の仕方とそのために必要なことなど）をいただくことで、研修の充実をはかることができた。

◆課題

授業においては、いまだ道徳的価値レベルに迫る発問をうまくとらえることができているとは言えず、資料の読み取りの発問（心情読解レベル）で終始してしまうことが多い。2月にも長田先生をお招きして1・2年生での研究授業を予定しているが、それらの機会を授業づくりをレベルアップさせるための好機ととらえ、道徳の教科化に向けての授業づくりの力量を、さらにつけていきたい。

10) キャリア教育

①本年度の取組

◆『Compass of the Learning』の作成

生徒のための学びの指針として昨年度に引き続き、『Compass of the Learning』を作成した。特に、今年度は教科部会を開き、

ポイント1 その教科を学ぶ良さや楽しさ、大切さについて

ポイント2 その教科がどのように将来役立つのかについて

という視点に沿って、生徒自身が学ぶことの良さに気付けるような文章作成に努めた。

「知恵」という言葉の、知は「学び」に、知恵の「恵」は「幸せ」につながるとても美しい言葉です。

学ぶことは人を豊にし、幸せに導きます。世の中の進歩は、今以上により良くしたい、良くなりたいという願いと、学びの連鎖です。

学ぶことは、自分や人を幸せにするものです。授業で学んだ知識や技能、部活動で学んだ礼儀正しさや精神力、学級会、生徒会活動で学んだ協力する力は、きっとこれからの人生の支えとなります。

途中、難しいことに遭遇することもあります。中学校での「学び」を通して、粘り強く努力し自らを成長させて欲しいと願っています。

～ 校長 西田 誠一 『Compass of the Learning』巻頭 より ～

「伝わる」って嬉しい!

ポイント1

英語の勉強をして一番嬉しいことは、自分で話した英語が相手に伝わった瞬間ではないでしょうか？相手が自分の英語を理解して返事をくれたときに嬉しかった経験、みなさんもあると思います。外出先で海外の方と話すときや ALT の先生と話したときなどにそんな場面があるのではないのでしょうか？

英語は言葉です。言葉はコミュニケーションを取る上で必要な手段ですよね。

しかし英語は日本語と文法が違い、多くの単語を覚えないと話すことはできません。

自分が伝えたいことをどのように英語で言うかわからなかったときこそ、勉強のチャンスです！そうやって覚えた表現や単語はきっと自分自身の力になります。

世界の標準語は英語とされているように、全く違う文化の中で生活している世界中の人と話すときに英語はとても便利です。英語が話せると自分が知らなかったことや新しい発見があるかもしれませんし、海外の友だちを作ることができるかもしれません。ぜひ英語の力をつけて自分自身の可能性を広げていってくださいね。

自分の住む世界を広げよう！

日本語だけの世界で生きるのはもったいない！違いを楽しもう！英語をツールとして使い、自分の住む世界を広げよう！

ポイント2

英語科 『Compass of the Learning』 一部抜粋 ～

また、作成した『Compass of the Learning』は、配布前にその意義を伝えた後、生徒に読ませた。その後、週末課題として感想を記入させ、それを便りで全体に示した。

◆3年生対象「ライフプランニング授業」の実施

事前アンケートを行い、異業種の仮想のモデル家族を選択した。また、その家族の将来設計（教育・住宅・その他のプラン）をグループワークで検討し、ライフプランシミュレーションを行った。その結果に基づき、ゲストティーチャーとして招いたライフプランナーとともにライフプランニングの分析や改善を行うことで、自分の将来設計について、その描き方やポイントについて具体的に考えた。それと同時に、将来の指針を明確にもつことで、生徒自身が目的意識をもち、普通の学校生活や授業に前向きに取り組むことも期待した。

総勢 13 名のゲストティーチャーをお招きし



グラフの変化の様子を確認しながら、ライフプランニング



②成果と課題

生徒アンケートの「(教科)の学習が将来の役に立つ」の項目では、4月当初に比べて、2学期末では全教科において肯定的な回答の割合が上昇していた。この結果は、各教科で年間通して実施した単元マップとあわせて、生徒が学ぶことの意義を考え続けた成果だと考えられる。

ライフプランニング授業では、各グループに1名のゲストティーチャー、ICT機器を使うことで、生徒たちが大変主体的に課題に向かう姿勢が見られた。また、普段はあまり考えることのない家族の中の自分や将来、家族をもった自分についても思いを巡らせることができた非常に良い機会であった。

次年度以降も、教師も生徒とともになぜ、学ぶのかを考え続けていくとともに、各学年の発達段階に応じた取り組みを行うことで、生徒がそこで得た経験を普通の学校生活の中で具体化していく努力が必要であると感じた。

～ Compass of the Learning を読んでの生徒感想文より ～

Compass of the Learning を読んで、学ぶことは人に豊かにし、幸せに導き、世の中の進歩は今以上に良くしたい、良くなりたいという願いと学びの連鎖ということがわかった。

また、学ぶことは自分や人を幸せにするもので、授業で学んだ知識や技能、部活動で学んだ礼儀や精神力、協力する力は、この先生生きていく上で、人生の支えになっていくとわかった。

この Compass of the Learning を読んで、この先難しいことがあっても、あきらめずに粘り強く努力していくことが大切だということがわかった。また、僕の苦手な英語などで難しいことがあっても努力し、わかるようにがんばりたいと思った。(3年男子)

今回の Compass of the Learning を読んで、勉強したことが間接的に役に立つことがあるということを知りました。もちろん、勉強したことが直接役に立つ事はありませんが、大人になったとき、数学や理科が役に立つとは思いません。では、なぜ学ぶのか。学ぶことを通して「見方や考え方」、「物事の本質を解決していく力」、「発想の力」など、将来間接的にも役に立つことがあるのだと知りました。このことから、学ぶことによって力は、私が思っていたもの以外にもたくさんあって、その力を将来に活かすことによって、学ぶことに意味が出てくるのだと知りました。

私は学ぶことに意味をもたせられるような「学び」ができる人になりたいと思います。(3年女子)

2 集団づくりの取り組み

「気づき・考え・実行する生徒」の育成をめざす本校では、本年度は、「ともに高め合う」「成功体験」というキーワードを掲げ、集団づくりの取り組みを行ってきた。また、「自己決定の場を設定する」「自己存在感・自己有用感を味わわせる」「共感的人間関係を形成する」といった生徒指導の3機能を生かした授業や行事、係活動や部活動などのさまざまな活動を行うことによって、生徒一人一人にとって居心地がよく、生き生きと活動できる集団をつくることも、以前から引き続き行ってきた。以下は、その具体的な実践である。



(1) 学年力向上の取り組み

1) ねらい

- ・各学年で、学年目標達成に向けた「学年力向上の取り組み」を行うことで、学校の基盤となる学級力の向上を図る。
- ・学年や学校行事などへの生徒主体の取り組みを通して、学級役員や学年委員、実行委員などのリーダーの育成を図る。

2) 具体的な取り組み

◆合同学年委員会

年度当初に1・2・3年合同学年委員会を開き、以下のことを確認した。

- ・学年目標を達成するために「学年力向上の取り組み」を行う。

・その取り組みは、行事（合唱コンクール・文化祭・卒業式）、学習（授業・朝自習・家庭学習など）、生活（あいさつ・清掃・その他ルール・マナーなど）などの具体的な場面における課題に対する取り組みである。

・取り組みの内容や成果と課題については各学年委員会で確認し、学年ごとに「国府のつどい」や全校集会で発信し、全校で共有していく。

・年度末に再び合同学年委員会を開き、1年の振り返りを行い、次年度につなげる。

◆各学年委員会

各学級リーダー（会長1名・副会長1名・書記2名）の8名で構成される学年委員会は月1回程度開催される。そこではまず、「学年力向上の取り組み」のための目標を定め、その目標のもと取り組みを企画した。取り組みの実施は学級ごとに行うが、その成果と課題を確認し新たな取り組みを企画するのは学年委員会で行う、というPDCAサイクルを進めた。

①第1学年の取り組み

◆学年目標「思いやり・けじめ・向上」

◆学年委員会目標

前期「高め合い、気づき行動、思いやり」

後期「けじめつけ、礼儀正しい 国中生」

◆具体的な取り組み

・前期

A組「チャレンジ1年生 忘れ物・朝自習・身だしなみ・ベル学・係活動・思いやり」

B組「思いやり (1)困っている人を見つけたら助ける (2)言葉を丁寧にする (3)人の嫌がる行動は取らない」

・後期

A組「私語をなくそう」

B組「むだ話をなくそう」

*1月に一度見直しを行い、新たな目標か継続かを学年委員に考えさせ、反省と学級への呼びかけを行った。

②第2学年の取り組み

◆学年目標「中堅学年としての自覚を持ち、向上心を持って、何事にも挑戦しよう」

「けじめのある行動ができる学年」

「中堅として果たすべき役割を自覚し、何事にも真剣に向き合う学年」

「友だちを大切にし、思いやりのある学年」

◆学年委員会目標

・前期「2年の学級をまとめ軌道にのせる」

・後期「リーダーとしての自覚をもってみんなに呼びかける」

◆具体的な取り組み

さまざまな行事に向けてスローガンをつくり、それをもとにリーダー自身が積極的に活動しながら、周囲の生徒への呼びかけも積極的に行うようにした。合唱コンクールでは、学級役員がパートリーダーと協力しながら、日々の課題を見つけそれを解決しようと音楽の授業の練習や放課後練習に取り組んだ。学習面では、授業や朝自習での課題に対しさまざまな内容を企画し取り組んだ。例えば、定期テス

トに向けてリーダーたちで予想問題をつくり、朝自習で取り組むことによって学習に対する意識を高めようと考えた。



③第3学年の取り組み

◆学年目標「自立・高め合い・実現」

◆学年委員会目標

・前期「じりつ～自立 yourself・自律 be proud～」

・後期「実現～少しずつ着実に～」

◆具体的な取り組み

行事については、5月中旬の修学旅行に向けて、修学旅行を成功させるためのスローガン考案や学年集会、出発・解散式、平和集会などの企画を行った。その中で、普段の生活にも生かせる「時間を守る・あいさつをしっかりする」ための取り組みを「ベル学の呼びかけ・あいさつ運動」という形で行った。この取り組みは後期も引き続き行った。10月末の合唱コンクールに向けては、合唱委員やパートリーダー、指揮者や伴奏者なども含めたリーダーたちが、よりよい合唱をつくり上げていく話し合いを積極的に行った。

学習については、授業への集中と家庭学習の不十分さの課題に対し、提出物チェックや授業開始・終了時のあいさつ強化の取り組みを行った。家庭学習についての課題は後期にも引き継がれたがそれに加え、家庭学習時間のチェックを行い、たがいの頑張りを確認することで入試に向かう意識の向上を図った。入試だけでなく卒業への意識づくり・雰囲気づくりのために、自分が担当した日に仲間へのメッセージを書く卒業までのカレンダーづくりにも取り組んだ。

3) 成果と課題

◆成果

・どの学年も、設定された学年目標にもとづき、学級ごとに取り組みを考え実施することができ、その後、取り組みの見直しを行い出てきた課題にもとづき、新たな取り組みを設定し実施することもできた。

・リーダーによる呼びかけによって、一部の生徒以外は守ろうという意識が高まっていき、少しずつルール・マナーを守ることができる生徒が増えていった。

・学級の中で目標を意識した声掛けが見られるようになった。また、係活動にもしっかり取り組み、部活動などでも、自分たちの立場を自覚し一歩ずつ前進する姿が見られ、責任感が持てるようになってきた。

・運動会や文化祭などの行事の中では、生徒アンケートの結果からも分かるように自己肯定感や自己有用感が高まってきている。それは、生徒たちが自分たちで決めたことを、自分たちで工夫しながら最後まであきらめずに、みんなで取り組んだ成果を自分たちで評価できたからであると思われる。

◆課題

・年度当初予定していた、1学期末の中間発表をすることができなかった。

・学級活動が有効に活用されているとは言えない。学年委員会は1ヶ月に1度定期に開催されているが、それに向けて、またはそれを受けての学級会をもつことができない。

・取り組みが生徒一人一人の問題意識となっているかどうか疑問。学級や個人の問題意識を明確にし、集団決定や自己決定が行える場としての学級活動にすべきではないか。

・リーダーがもっとみんなの前に立ち、活動できる集団にしていく。その為に、リーダーが育つための

準備や、リーダーがみんなの前に立った時の教師側の声掛けが大切であると思える。

・行事では成果が表れているが、普段の授業や生活にはなかなか表れてきておらず、特に、小学校からの固定した人間関係からなかなか抜けられず、役割や責任が固定化しリーダーが育ちにくいのが現状である。また、そのような関係の中では人に働きかけたり、自分が変わろうとしたりすることも難しく、よりよい集団づくりに結び付きにくいところがある。今後も、生徒指導の3機能を、普段の授業や生活の中で生かした仕掛けや関わりを行なっていきたい。

(2) 生徒会の取り組み

1) ねらい

生徒が教師の適切な指導のもと、主体的に企画運営に取り組むことにより、自主自立の精神を学び、互いに親愛と教養を深め、よりよい集団としての質の向上を図る。そして、明るい学校生活を築き、よりよい社会人となる基盤を養う。



2) 具体的な取り組み

①国府のつどいについて

前年度定期的に開かれていた「国府のつどい」は、生徒会役員会と各学年委員会を中心に行事などの状況を鑑みて必要に応じて行った。4月の生徒会発足式で年間テーマが「実」（実りある充実した学校生活の実現）と発表されたことを受け、各学年委員会と生徒会では「授業」に焦点を当てた取り組みを行い、国府のつどいをそれぞれの活動の発表の場として利用した。今年度は12月までに以下の日程と内容で3回行われた。

- ・1回目（9月）…前期の活動の反省と後期に向けての課題を発表
- ・2回目（11月）…各学年で学年力を向上させるための授業態度についての課題と取り組みを発表、生徒会による始業時のあいさつ姿勢の徹底
- ・3回目（12月）…各学年から11月の取り組みについて成果と課題の発表、より良い授業づくりを学校全体で行うために、各学年の課題を受けて生徒会から「国府中における授業中の私語についての定義」を発表

②生徒議会や生徒総会における代議員の役割の明確化

クラスの意見を集約し生徒議会や生徒総会で伝達したり、生徒議会で話し合われたことをクラスに伝えたりといった代議員としての役割を明確にした。

3) 成果と課題

◆成果

①について、自分たちの課題を考え、その対策を話し合い実行することで、集団としての自治能力が向上した。また、生徒会役員や各学年のリーダーが中心となって自分たちの集団のことを考えたり、リーダーとしての意識を持たせたりする中で、自覚をもって学校生活を送ることができ、集団の中でリーダーが育った。

②について、代議員が生徒議会や生徒総会で発言権を持ったり、クラスに生徒会の活動を周知したりするパイプ役になることで、より組織的な生徒会活動が展開できるようになった。

◆課題

①について、生徒役員と各学年のリーダーが取り組みや課題と成果を必要に応じて話し合える場が少なく、生徒役員が学校の課題を把握するのに時間がかかった。また、全校生徒の意識としても自分たちの課題を見つけようとする意識が低かった。来年度に向けて、生徒役員と学年のリーダーがこまめに話し合う機会を設けられるようにするとともに、学活などを利用し、自分たちの姿を客観的に把握し、課題を見つけ、それについて生徒一人ひとりが考える機会を増やしていき、集団としての自治能力のさらなる向上に努めたい。

②について、代議員の役割は明確になったが、自分も集団を牽引するリーダーのひとりという意識が低かった。来年に向けて、リーダーとしての意識を持たせ、学級役員と意思疎通を図りながらクラスの意見を生徒会に反映できるような取り組みができるよう工夫していきたい。



※以下は、今年度2学期に行った生徒アンケートである。集団づくりに関わるとの項目においても、これまでを上回る結果が出ている。

「集団づくり」に関わる生徒アンケート【生活状況調査 全校結果 と これまでの結果の推移(%)】2018.12.

1:よくあてはまる 2:だいたいあてはまる 3:あまりあてはまらない 4:あてはまらない

※%の値は1または2と回答した生徒の割合で示したもの	2018.12				2018.7	2017.12	2017.7	2016.12
	1年	2年	3年	全校	全校	全校	全校	全校
ものごとを最後までやり遂げてうれしかったことがある。	96	93	97	95	94			
難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している。	80	81	81	81	76			
自分にはよいところがあると思う。	76	72	84	78	75	68	62	
友達は自分の良いところを認めてくれる。	94	81	92	89	82	80	76	
先生は良いところや努力を適切に評価してくれる。	78	83	92	84	81	76	75	68
学校生活は楽しいと思う。	84	83	92	86	83	81	81	78
学校に安心して来ることができる。	85	94	95	92	86	82	83	79
道徳の授業や行事などを通して、人間関係づくりや生き方などについて考えるようになった。	87	91	92	90	84	76	79	81
学級の話合い活動では、課題に対する解決策を自分なりに考え、意見を持たた。	84	81	97	87	84	75	75	70
学級目標を達成するため、意識して生活できた。	78	86	81	82	74	66	72	71
学級における決められた系の活動や委員会活動、生徒会活動にきちんと取り組んでいる。	93	94	90	93	88	86	90	89
生徒会活動や委員会活動に参加し、充実感を得ることができた。	85	82	92	87	79	77	78	79
国府中学校の目標である「気づき 考え 実行する」を大切に活動している。	78	71	76	75	73	70	71	72
各専門委員会の企画の取り組みを十分理解できた。	95	93	100	96	89			
「学年力向上の取り組み」には、前向きに取り組むことができた。	91	90	89	90	84	84	79	

3 学力向上パートナーシップ推進事業の取り組み

平成 30・31 年度小松市研究推進事業「学力向上パートナーシップ推進事業」として、本校学校研究ともリンクさせながら、小松市立安宅中学校と連携し、授業づくりを中心に共同研究を行った。特に今年度は授業改善・授業づくりに焦点化し、以下の取り組みを実施した。

(1) 校内研修会への参加

前述の本校校内研修のうち、第 4 回校内研修会および第 7 回校内研修会の公開授業・研究授業・全体会に参加していただき、授業づくり・授業改善について協議した。また、2 月に実施予定の安宅中学校校内研修会には本校教職員が参加する予定である。

(2) 英語科・社会科教科部会

8 月 28 日(火)、29 日(水)の 2 日間にわたり、「学力向上パートナーシップ推進」の一環として、2 学期に行われる研究授業を見据え、本校と安宅中学校の社会科、英語科の教職員が集まり、それぞれの指導案をもとに「深め、振り返る」を視点に教科別分科会を行った(英語科 8 月 28 日、社会科 8 月 29 日)。以下に協議された内容を紹介する(研究だより No.31 より)。

1) 英語科

【国府中 3 年】

- ◇「ペアを変えて何度も会話しながら、書こうとする内容を広げたり、書く際に使うことができる表現を増やしたりする」という活動は「深める」と言えるか?
 - ・生徒に気づきが生まれるだろうから、「深める」と言っているのでは。「表現を広げる」ためにこの活動をするということを生徒に伝えること。また、良いと思ったことをメモさせると良い。
- ◇生徒同士の対話で、即興的に疑問文を発問させられるようにするにはどのような準備が必要か?
 - ・疑問文のヒントカードを用意し、希望する生徒に与える。ヒントカードはレベルに分けて用意し、そのレベルを本時のルーブリック評価と連動させてはどうか(ヒントカード 1 は疑問文全文をのせておく、ヒントカード 2 は疑問詞のみをのせておく)。
 - ・ALT のインタビューテストを練習として行ってもよい。
- ◇マッピングについて
 - ・先輩の良い例(過去のもの)などを示してみれば。



【安宅中 2 年】

- ◇have to/ don't have to の導入の授業として、どのような活動がふさわしいか? 1 時間目でルールブックを仕上げるのは負荷が大きい?
 - ・単元末のゴールアクティビティーで仕上げることにして、本時ではその一部でいいのでは。
 - ・「理想の学校」のルール作りをさせていた例が面白かった。

【安宅中1年】

◇Does he/she ~?の導入の授業としてインタビュー活動を行う。深めるには？

- ・インタビューして分かったことをリテリングしてはどうか？
- ・安宅中の先生について、誰かをあてるために Does she/he~?を使って質問していくというクイズ活動をしてはどうか？

*その文法を利用する必然性をもたせた活動を設定することが大事。

2) 社会科

【国府中2年】

課題「江戸幕府の政治はなぜ行き詰ったのか、その根拠を考えよう」

◇田沼の政治が他の三大改革と異なっており、江戸幕府財政立て直しのターニングポイントであったことに気づかせるためにはどうすればよいか。

・適切な資料を集めることが大切。どれを選んでも判断の材料となるものがある資料で考える条件をそろえる。どの改革にも良い点と悪い点がある。そのどちらも提示できる資料を準備する。

◇単元マップの活用が時代の流れやでき事のまとまりに合わず使いにくいことが予想されるが、どうすればよいか。

- ・授業の進め方に合わせ、いくつかの小単元をまとめて評価してもよいのではないか。

【安宅中2年】

課題「人口を中心とした関東地方の特徴をふまえて、大人になった時に安宅に住みたいか関東地方に住みたいか、自分の意見を文章にする」

◇安宅という身近すぎる地域と関東地方というイメージが強く範囲も広い地域との比較を適切に行うことができるのか。

・単元の初めにどちらに住みたいのかをたずね、その根拠となることを、関東地方の学習を進める中で明らかにしていき、関東地方の学習を終えた後で改めて、どちらに住みたいかたずねる。

- ・その際、あくまでも関東地方の特徴をふまえて、どちらに住みたいか述べられるようにする。

関東地方は、～だから〇〇に住みたい。

関東地方は、～だから〇〇に住みたくない。

- ・その根拠を外に出せるものにしていく。

どちらの教科も協議の間では以下の3点について話題が広がり、話し合いが深まった。

◎必然性のある課題や活動をしなければいけない。

◎単元のゴールをイメージして1時間1時間の仕込みをしていくことがとても重要である。

◎資料や教材等の準備や工夫でねらいに迫ることができる。

Ⅲ 学校研究全体の成果と課題

学校研究の成果と課題については、各教科の実践の様子および杉江先生をお招きしての校内研修会後に行った生徒アンケート（11月15日実施）、計画訪問A後に行った生徒アンケート（12月13日実施）、学力向上プランAにおける成果指標と比較しての推移の結果をもとに述べる。

◆成果（※肯定的意見とは「当てはまる」・「どちらかと言えば当てはまる」の合計した値である。）

- ・教師は「目指す授業の姿」における授業づくり・授業改善の視点を明確にすることで、授業づくり・授業改善のイメージを共有することができた。特に「深め、振り返る」の視点を重点課題として取り組み、新学習指導要領実施に向けて「ねらい」、「学び方」、「教科の良さ」の資質・能力の向上を見据えた授業づくりの実践を積み上げることができた（各教科の実践参照）。
- ・単元マップを活用し、単元における1時間の位置づけや学習の見通しを提示することで、生徒の学習に対する意欲の向上が図られ、タイムマネジメントにも効果が見られた（各教科の実践参照）。
- ・新しい「学びの姿」を提示し、教師と生徒が目指すべき授業の姿を共有することで、「ねらい」、「学び方」、「教科の良さ」について生徒もイメージをしっかりと持ち、授業に取り組んだ。

《以下は2学期末実施の授業に関わる生徒アンケートの全教科の合計値より》

- ・ねらいについて、課題が吟味され、生徒主体の活動となるようにねらいに迫るための手立てが工夫されたため、「授業の内容がよくわかる」と思う生徒が肯定的意見で約80%であった。
- ・学び方について、指導案に深める場面での生徒の様子を明確にしたことで生徒の反応に教師が対応することができた。アンケート結果からは「ペアやグループ活動を通して新しいことに気づいたり、自分の考えが深まった」と思う生徒が肯定的意見で約72%であった。
- ・教科の良さについて、「授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つ」と思う生徒が肯定的意見で約80%であった。
- ・成功体験について「授業では、自分の考えを述べるなど活躍する場面があった」と思う生徒が肯定的意見で約66%であった。
- ・根拠について「授業では、根拠をもとに理由をつけて説明することができた」と思う生徒が肯定的意見で約60%であった。
- ・キャリア教育における取組（Compass of the Learning、ライフプランニング授業）を授業づくりにおける学力観と関連づけて取り組んだことは教科横断的な視点からも大きな成果があったと捉える。
- ・特別な教科道徳の完全実施に向けて、資料分析や中心発問による「考え、議論する道徳」の実践の積み上げ、評価に関わる研修を学力向上ロードマップに位置づけて実施することができた。
- ・運動会と文化祭の比較アンケート結果からは自己肯定感の向上が随所に見られた。

◆課題

- ・各種校内研修会で実施した各教科の授業内容に影響する点もあると思われるが、生徒アンケートの結果からは根拠について「授業では、根拠をもとに理由をつけて説明することができた」と思う生徒で肯定的意見が約60%だったことを考えると約40%の生徒に否定的意見が見られる。根拠となり得る資料や既習事項の定着に課題が見られた。また、対話的な学習を進める際に授業の中での話し方のルールが必要という意見が出た。

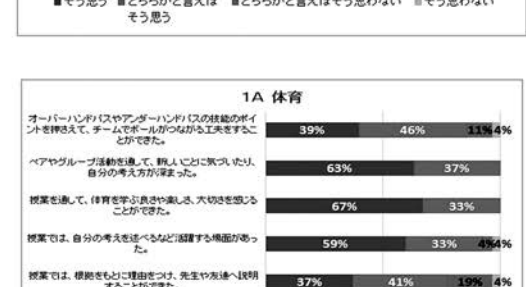
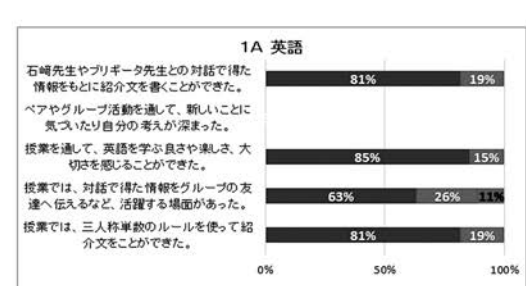
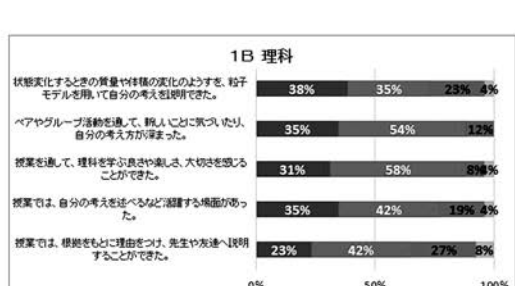
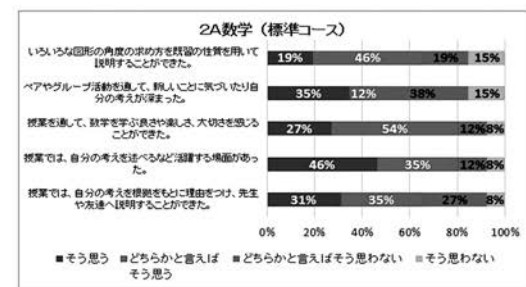
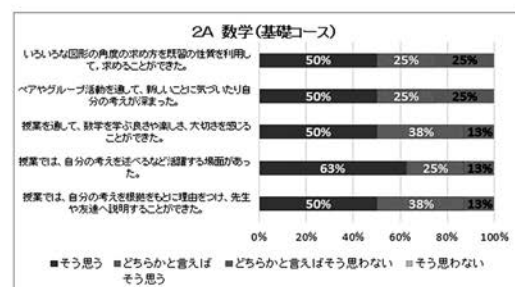
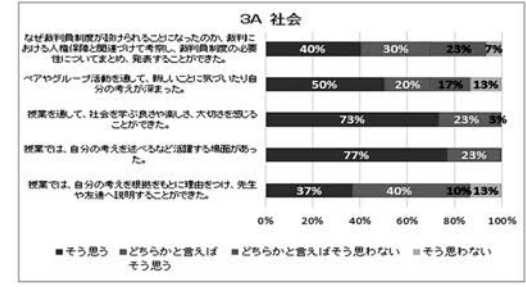
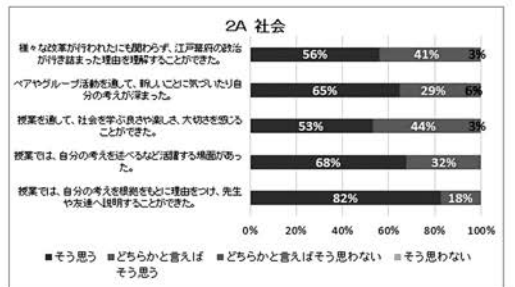
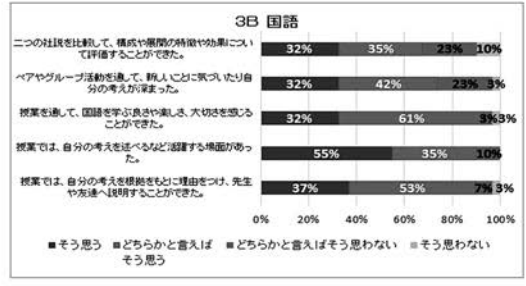
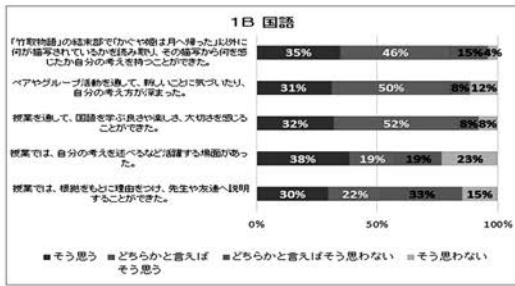
◆総括・次年度に向けて

今年度も学校研究は学力向上ロードマップに沿って計画的に短期・中期・長期P D C Aサイクルを回し、成果と課題を検証して進めてきた。研究主題「生徒が主体的・協同的に課題解決に取り組むための授業づくり、集団づくり」は「ともに高め合う姿」、「成功体験を積む姿」を念頭に生徒の確かな学力と自己肯定感の向上のための実践研究である。様々な成果と課題が浮き彫りとなったが、最終的に学力の向上に結びつくことが大切であるとする。また、杉江先生の講話にもあったように継続的にチャレンジすることが大切である。授業づくりは「教え」から「学び」への転換が大切であり、キャリア教育の視点からも各教科の先生方が「社会に向けて開かれた学力」を意識していく必要があると考えている。授業づくりでは「自律（自ら考え、判断し、決定し、行動する）」をキーワードに取り組んでいきたい。

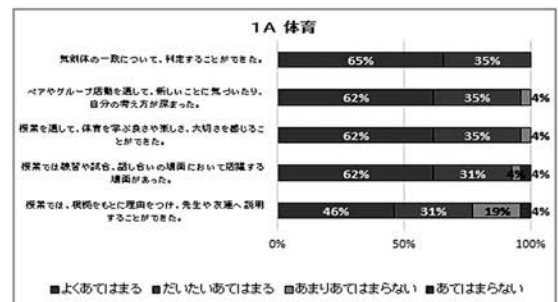
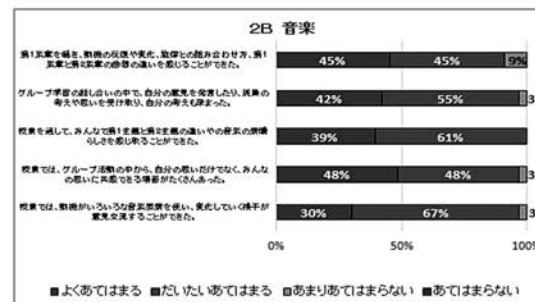
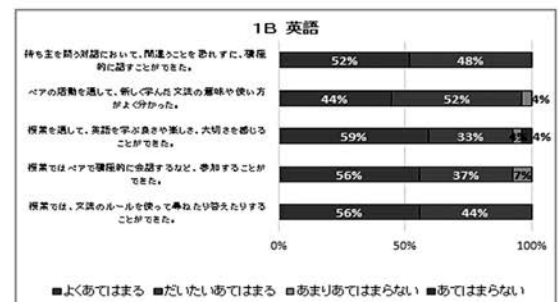
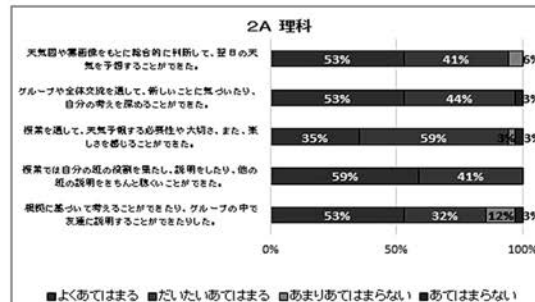
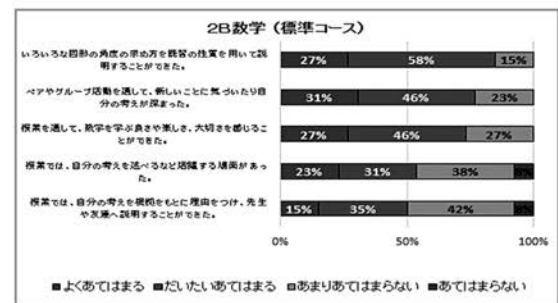
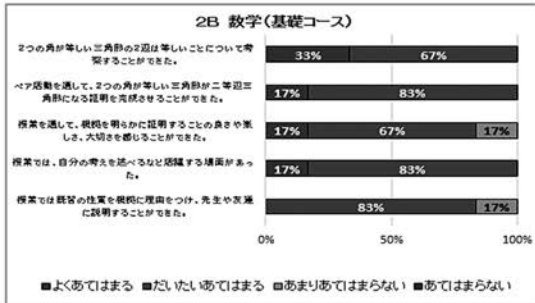
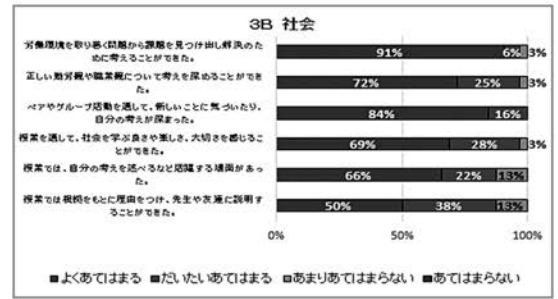
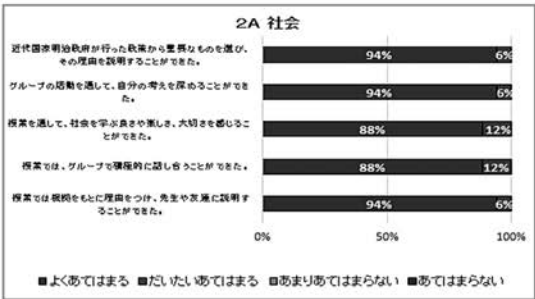
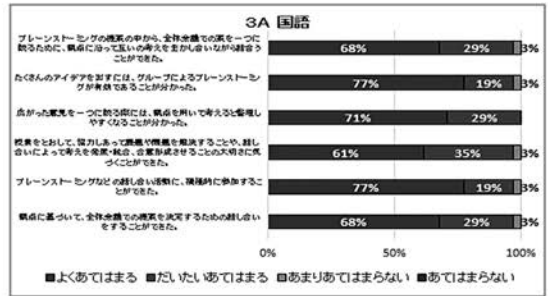
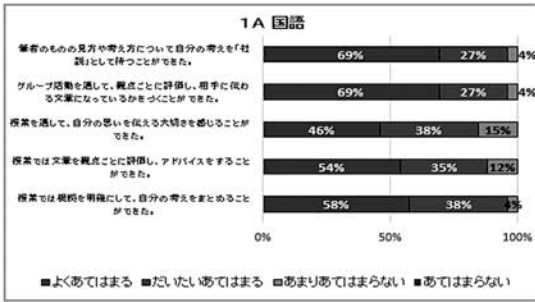
7月から12月へのアンケート結果の推移

	全校			
	%		平均	
	12月	7月	12月	7月
授業の内容はよく分かる。	80	77	3.1	3.1
授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つ。	82	80	3.2	3.2
授業ではペアやグループ活動を通して新しいことを見つけたり、自分の考えが深まった。	78	77	3.0	3.1
授業では、自分の考えを述べるなど活躍する場面があった。	73	74	3.0	3.0
授業では、根拠をもとに理由をつけて説明することができた。	65	68	2.8	2.9
勉強は好きだ。	68	67	2.9	2.9
勉強は大切だ。	86	82	3.3	3.2

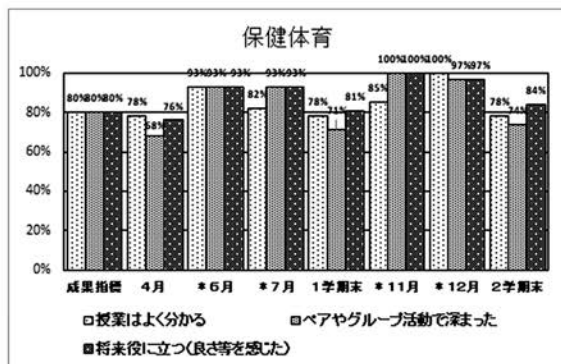
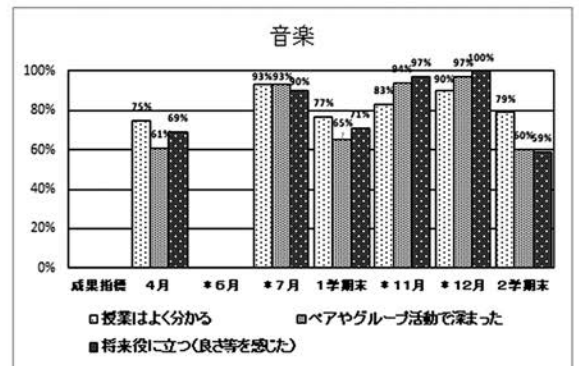
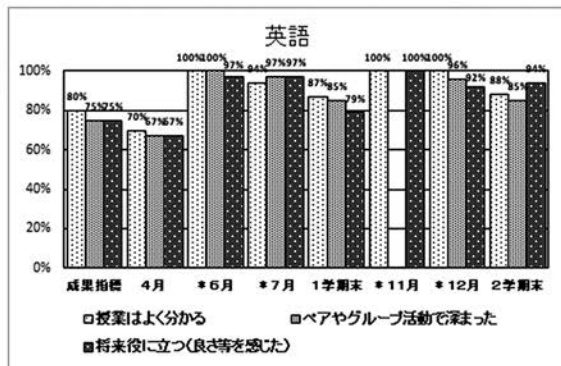
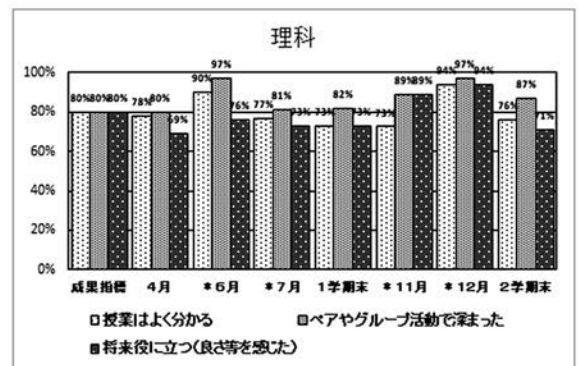
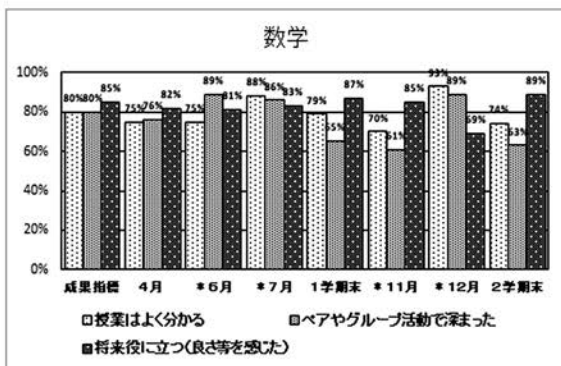
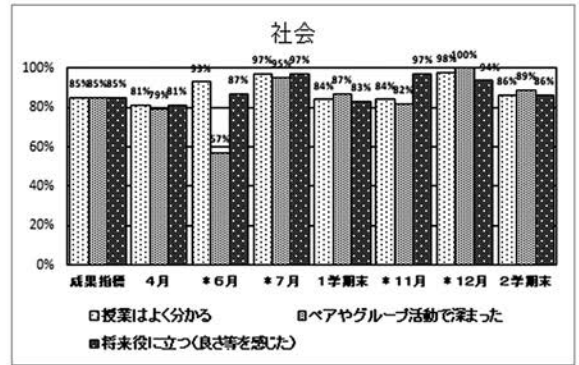
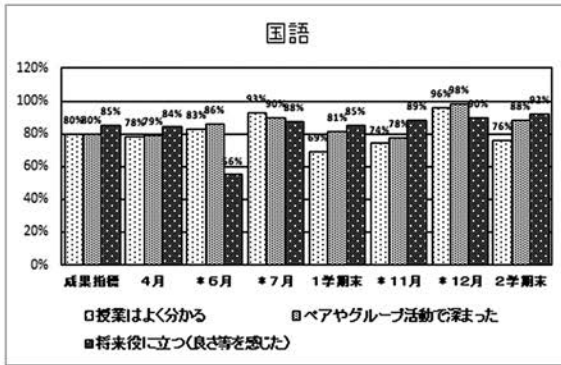
杉江先生をお招きしての校内研修会後授業アンケート結果 (11月15日実施)



計画訪問 A 後の授業アンケート結果 (12 月 13 日実施)

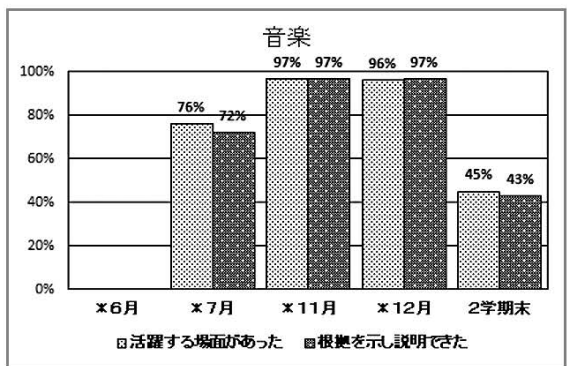
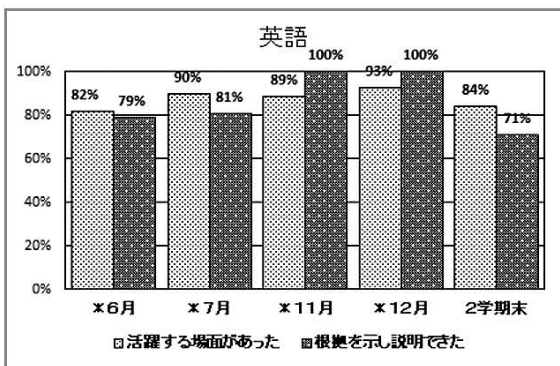
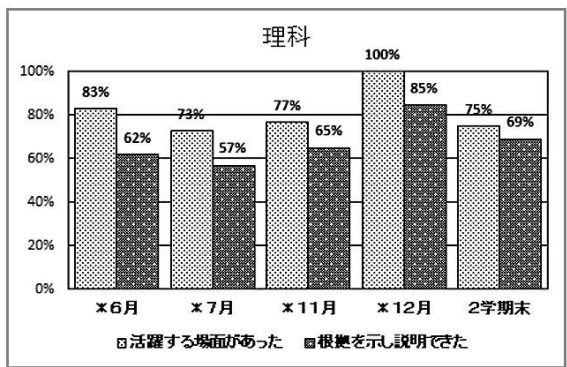
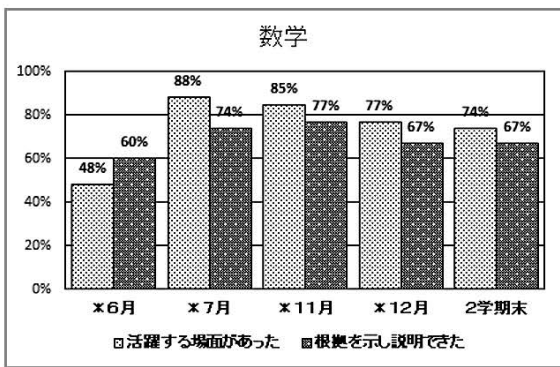
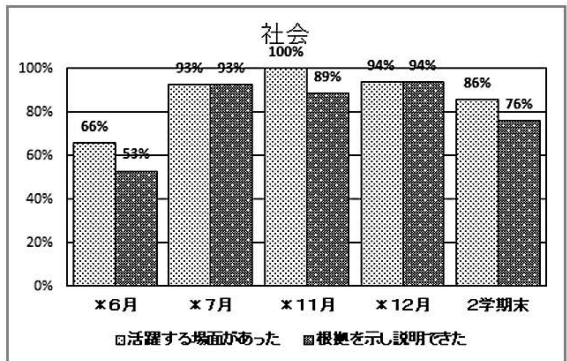
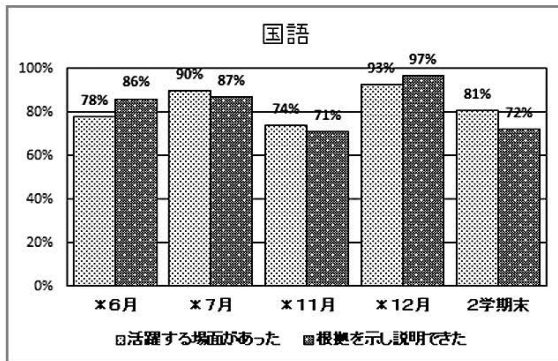


学力向上プラン A 成果指標と比較しての推移

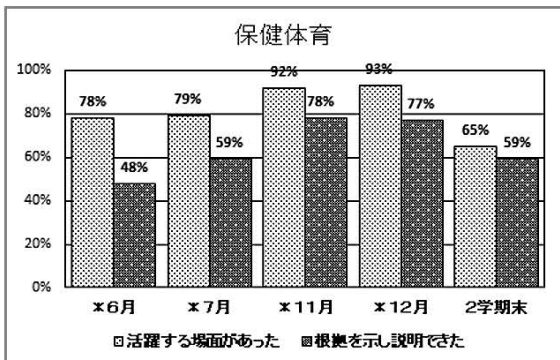


・「授業はよく分かる」…ねらい①に対する学習評価
 ・「ペアやグループ活動で深まった」…新し、気づきや自分の考えが深まった
 ・「将来役に立つ」…良さや楽しさ、大切さを感じられた
 ・「※」は校内研修会において、公開・研究授業を行ったクラスの結果。
 ・無印は全校アンケートの結果。

「授業の中で成功体験を積む」「根拠を明らかにして理由が説明できる」



※「根拠」を文法事項と捉える



・「×」は校内研修会において、公開・研究授業を行ったクラスの結果。

Compass of the Learning

~ Learning makes you happy! ~

()年()組()番 氏名()

「知恵」という言葉の、知は「学び」に、知恵の「恵」は「幸せ」につながるとても美しい言葉です。

学ぶことは人を豊にし、幸せに導きます。世の中の進歩は、今以上により良くしたい、良くなりたいという願いと、学びの連鎖です。

学ぶことは、自分や人を幸せにするものです。授業で学んだ知識や技能、部活動で学んだ礼儀正しさや精神力、学級会、生徒会活動で学んだ協力する力は、きつとこれからの人生の支えとなります。

途中、難しいことに遭遇することもあります。が、中学校での「学び」を通して、粘り強く努力し自らを成長させて欲しいと願っています。

その1

「0.9999…と続く数は1に等しい」と言う説明の方法を、中学生の頃先生から教えていただきました。1-0.9999…=0がどうしても理解できず、絶対に「0.9999=1」ではないと思いました。

先生は、次のように説明されました。

$x = 0.9999\dots$ という式を作ったとき、 x の中身が「1」であることを示せば良いね。この式を①式として、両辺を10倍してごらん。等式の性質が成り立つから、 $10x = 9.9999\dots$ の式は成り立つね。これを②式としよう。②式から①式を、次のように引いてみよう。

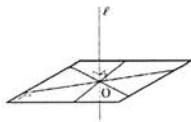
$$\begin{array}{r} \text{②} - \text{①} \quad 10x = 9.9999\dots \\ \quad \quad \quad -) \quad x = 0.9999\dots \\ \hline \quad \quad \quad 9x = 9 \end{array}$$

この場合も等式の性質が成り立つから、2つの式の差から $9x = 9$ という式ができるね。この等式を方程式として解くと $x = 1$ です。もとの式 $x = 0.9999\dots$ に $x = 1$ を代入すると、 $1 = 0.9999\dots$ です。

数学の世界で約束された「等式の性質」を使うと、感覚的に違うと思っていること（ $1 = 0.999\dots$ ）が論理的に説明されてしまいます。「等式の性質」という根拠を使つての説明には、説得力があります。それでも、「1」はどこに行ったのでしょうか？もしかして、「等式の性質」が間違いでは？などと考え方も広がります。自分の考え方に凝り固まらず疑問を持ち、様々な考え方と比較し、自分の考えを批判的に見る目も大切です。

その2

中学校1年生の数学で、平面と直線の垂直について学びます。これは、電柱の話で経験的に考えることができます。



直線 $l \perp$ 平面 P

地面に電柱が立っています。A君はこの電柱が地面にまっすぐ立っているといいます。別の地点にいるB君はこの電柱はまっすぐ立っていないといいます。A君も、B君も正しいことを言っています。あなたは、このことをどのように説明しますか。

もう分かったと思いますが、「電柱はA君のいる方向に倒れている」と考えることで説明ができます。矛盾する2つの出来事が、ともに正しい場合もあります。この場合、それぞれの立ち位置が違うことを理解することで、その理由が分かります。

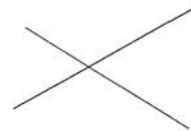
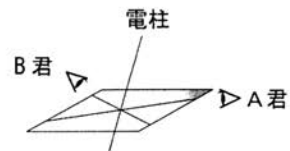
別の図形の問題を考えてみましょう。「2本の平行な直線は交わらない」、即ち「2本の平行でない直線は必ず交わる」

このことについて、C君は正しいと言ひ、D君は間違っていると言ひます。みなさんは、どう考えますか？

答えは、どちらも正解か、どちらも間違いか、2通りあります。

もの事を考える場合には、前提条件が何なのかを確認する必要があります。即ち、同じ条件で考えているかどうかです。平面上では、この場合2本の直線は交わります。一方、空間の中では、交わらない場合があります。それは、道路とその道路を高架橋で横切るような関係です。

相手に自分の考えを伝える時、また、相手の話を聞く時、同じ視点、条件であるかを意識する必要があります。



さて、ここでは数学の世界を考えながら、問題の解決について考えます。

「一点を通る直線は無数にあるが、二点を通る直線はただ一本に決まる」
 「三人寄れば文殊の知恵」とも言いますが、よく授業ではペアやグループ学習を行います。それは、自分の考えを深め、よりよい考えを導く方法です。答えには、その考え方（理由）が必要であり、その考え方には考えの基になる事実（根拠）が必要です。

答えへのアプローチ（考え方）は何通りもあります。まず、しっかりとした根拠をもって、自分の考えを一本の直線のように定めてください。

ペアやグループでの活動からは、互いの考え方の良さを感じて欲しいと思います。

その2で垂直の話をしました。大切なことは同じ条件で考えることでした。上の図は、平面上での話です。上から見ると、平面上ではそれぞれの考えが解の一点で交わっているように見えますが、もしかして横から見ると（空間であれば）、交わっていない直線があるかもしれません。

そのときは、互いに根拠の数を増やし、直線の位置を修正しながら、時には「折り合い」をつけられるよう話しあいをする必要があります。

さて、平面上のどんな直線も一次関数として式に表せます。私とAさんの考え方を簡潔に数式に表すことができれば、解は連立方程式を解き求められます。

数学には、事柄の特徴を簡潔に数式で表し、その共通した特徴（解）が説明できる（方程式を解く）良さ（見方や考え方）があります。

関数の考え方では、私とAさんの考え方の違いや特徴は、比例定数 a や定数 b が表していると言えます。私とAさんの式で、 $a=c$ 、 $b=d$ であれば全く同じ考え方と言うことです。また、 $a=c$ 、 $b \neq d$ であれば、考え方は似ているが一致する答えがないと言うことです。

その3

最後に「三角形の内角の和は 180° である」を考えてみましょう。

もしも、地球規模の大きな紙に三角形を書いたとき、三角形の内角の和は、やはり 180° でしょうか？

ここでも、同じ基準、同じ前提条件で考えているかどうかが肝心ですね。ノートという極小の平面と、地球という曲面との違いをです。（A4サイズのノートは約 63 平方 cm 、地球の表面積は約 5.1 億平方 km ）

科学の世界では、「特殊」と「一般」という言葉が対比し使われます。

「特殊」とはこの場合、前提がノートであることや、地球上であることです。「一般」とは、前提がどうであろうと、どのような条件においても成り立つものと考えれば良いでしょうか。

「一般」を説明するための方法が、数学では、証明です。例えば、偶数+偶数=偶数では、具体的に $2+4=6$ 、 $4+8=12$ 、等の説明は「特殊」です。それ以外の数の場合の結果が分からないからです。どのような整数であっても成り立つことを説明するためには、文字を利用し $2m+2n=2(m+n)$ 等と式で説明します。

この考え方の良さも、偶数は（整数） $\times 2$ と簡潔（一般的）に表せることにあります。

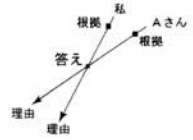
最後に

数学の学びは、何かしらの答えを求めるものだけではありません。数学の見方や考え方の良さに気づき教科の勉強以外にも生かせる力を身に付けることであるかもしれません。

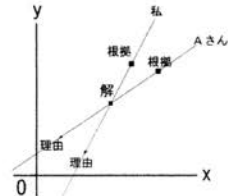
個人で



ペアで



グループで



〈私の考え方〉 $y=3x+b$

〈Aさんの考え方〉 $y=cx+d$

$$\begin{cases} y=3x+b \dots \text{私} \\ y=cx+d \dots \text{Aさん} \end{cases} \Rightarrow \text{解}$$



『学ぶことは変わることである』

新井 徹

「学ぶことは、変わることである」。この言葉は、ある高名な教育学者が言った言葉です。私は、この言葉を担任した生徒の姿から実感することができました。

私は、20年ほど前にある生徒を担当しました。名前をSといいます。私が出会った当時のSは、男女分け隔てなく接し、豪快に笑う明るい女子生徒でした。いつも体操着を着用し、なかなかスカートをはこうとしませんでした。当時の私のSへの認識は、スカートをはくのがめんどくさく、ジャージの方が楽なんだろうという程度のものでした。

卒業後も何かと理由をつけ私を訪ねてくれたり、就職先の宅配業者として私の勤務先を回ったりして、Sとのつきあいはそれからも続いていました。卒業して10年あまりが経ち、長距離運送の新しい仕事に就き順調にいていたと思われるある日、Sから電話がありました。「先生、実はオレには秘密があるんや。電話じゃあれやから今度会いにいくな」という内容のものでした。秘密という言葉に気がしながら、その時は電話を切りました。それからしばらくしてから、またSから電話がありました。「会いに行こうと思ったけど、行けんから今オレの話を聞いてほしい。オレは、実は性同一性障がいなんや」というものでした。「今まで自分で感じてきたことであったが、今日初めて性同一性障がいと診断された」と言いました。まだ、家族にも話せないでいるが、どうしても私に聞いてほしかったということでした。

性同一性障がいのことを私に打ち明けてくれた後、しばらく彼は私の所に通い今まで辛かった思いや経験を話してくれました。その時、彼は自分のことを話すために長い手記を用意してくれました。それは、わずかな期間で書き上げたものでした。

初めての自分に違和感を感じたのは、ものごころついた保育園の時。自分の女の子らしい名前がイヤだったし、長い髪もイヤだったし、ほしいおもちゃや着たい服も男の子のものが欲しかった。言葉遣いなんかも男の子なものだから、よく怒られた。女の子なんだからって。周りの友だちも変な目で見てくる。だから、自分は何かおかしいんだ、周りとは違うんだと思った。

小学校に入って、その違和感が少しずつ何なのかわかってきた。テレビやマンガで、オカマとかオナベとか言われている人たちと自分が似ていると思ったから。そして、その人たちの話題やテレビなんかで登場したりすると両親や友だちたちは、決まってイヤな顔をした。気持ち悪いつて。俺はこの違和感を絶対言うまいと心に決めた。そんな言葉を言われなくなかったし、嫌われなくなかったし、仲間はずれにされて独りぼっちになりたくなかったから。

それが問題になったのは、中学校に入ってからだ。初めて人を好きになって、やっぱり身体の性である女の子を好きになった。もちろん、誰に言えるわけでもない。その子に気持ちを伝えて、両親や同級生がしたイヤな顔や気持ち悪いと言われるのを想像しただけで、本当に胸がはり裂けそうになった。それだけじゃなく、自分の思いとは裏腹に、成長していく自分の身体に嫌気もさした。中学3年受験シーズンを迎え、みんな初めて将来を意識する。俺は、自分の将来何て考えられなかった。本当にやりたいこと、なりたいものなんてできるわけがないとあきらめていた。ただ、ただ、将来なんて真っ暗にしか見えなかった。どうすればいい、どうすればいいって、誰かにすがりたかった。誰かに助けてほしかった。独りぼっちになりたくないってずっと思っていたのに、俺は独りぼっちになっていたんだ。

私は、Sの手記の中で身体の成長とともに心を閉ざし、ますます自己否定していく過程に衝撃を覚えました。そして、私は改めて性同一性障がいの人たちが差別され、偏見の目で見られていることをSの生き方から教えられました。

その後、Sは仕事に没頭していきます。しかし、それは本当の自分を偽るために、仕事に没頭するしかなかったのです。20歳を過ぎたある時、Sは転職した際に、2、3ヶ月失業保険で暮らす日々がありました。そんな時間が、彼の心を自分の内側に向けることになりました。そして、Sは自分自身のことを生まれて初めて調べ始めることになるわけです。その学びの中で、彼は自分は世の中で嘲笑されるべき人間ではないことに気づきます。自分自身を取り戻していく過程をSは、次のように書いています。

誰かに笑われたって、バカにされたって、下手くそでも不器用でもなんでもいいから、明るく楽しくありのままの自分で堂々と生きればいいじゃないかってそう思ったんだ。

俺らしく生きる為にはまず俺の本当にしたい事。俺は自分自身のまま男として生きていきたい。そして、遠回りに遠回りにして25にして初めて自分自身の事を調べ始めたんだ。だから、実は性同一障がいって言葉も俺自身最近知ったんだ。調べていくうちに驚いたのは俺みたいな障がいをもった人っていうのはこの世に実にたくさんといるっていう事。みな俺と似たような悩みで四苦八苦していた。

俺は戸籍の性別変更や治療内容、それをどうすればできるのかを調べた。まず、変更手続きは精神科による診断、ホルモン治療、手術、一年以上身体の性と異なる性での生活が必須だった。治療に関しては、身体の男性化はしていくが、それ以上の副作用がある。普通に考えれば当たり前的事だ。元々健康な身体を無理矢理に変えてしまうのだから、副作用はあって当たり前、寿命まで縮まってしまう。それを知った時は正直愕然とした。悩んだし、考えた。でも、これは正しい考えではないかもしれないけど、やっぱりありのままの自分で生きたかった。

ありのまま、本当の自分で生活するのは楽しい。そして何より今の自分が好きなんだ。両親も友だちも心の底から好きって思える事が嬉しいんだ。何もやろうとしないで諦めて逃げて怖がっていた世界は実はすごく楽しかった。26年間悩んできた事は行動すればたった一瞬で解決した。こんな簡単な事ならもっと早くにやればよかった。そしたら、もっと両親や友だちを知れたし、好きになれたんじゃないかって。これからの俺はもう逃げないし、やりもしないで諦めようと思わない。ありのまま堂々と生きるのは楽しいってわかったから。これからも辛いと思う事、苦しいと思う事あるだろうけど、俺は自分のままで、本当の自分らしく立ち向かっていく。

小さい頃から、自分の心を苦しめてきた自分自身のことをSはどうやって克服できたのでしょうか。まずは、自分のことを自分自身が学んだということです。周りから「気持ち悪い」と思われると思い込んでいた彼は、自分自身のことを学ぶことで、これは生まれながらのものであることから、「気持ち悪い」ことではないと思うようになるのです。さらに、自分のことを隠すことなく、本当の自分自身をさらけ出すことで自分のことが好きになり、周りに打ち勝つことができる自分になれたのです。

世間には性的マイノリティに対してだけでなく、いろいろなことに対して根拠のない噂や偏見が満ちあふれています。それらの偏見や予断に打ち勝つためには、科学的な根拠に基づいた「学び」が必要です。その「学び」の中で、人は「変わる」ことができるのです。私は、「学び」の中で人が「変わる」ことをSの生き方から実感することができました。

『なぜ国語を学習するのか』

みなさんはヘレン・ケラーを知っていますか。彼女は、1歳半の時に病気がもとで、聴力・視力・言葉を失ってしまいました。話すことができず非常にわがままに育った彼女が、後世に教育家・社会福祉活動家として今日まで尊敬を得る人となったのは、自分の手にかかる冷たく流れる液体が「ウォーター」という「言葉」であると知ったことがきっかけです。このように「言葉」は「今まで知らなかった世界を広げてくれるもの」であり、自分の思いを表現することができる、相手の思いを知ることができるものです。

地球上の生物の中で唯一「人」だけが、「言葉」という絶対的な「コミュニケーションツール」を得ることができました。また、それらを駆使することによって、自分や相手の思いを、年月を隔て空間を超えて理解することができるわけです。

みなさんが中学生になり初めて手にした国語の教科書には、次の文言が掲載されています。

『教科書を開けば、
たくさんの言葉があなたを待っている。

新しい言葉に出会う喜びを知ろう。
気になる言葉に出会ったら、
立ち止まり、考えてみよう。

友だちを増やすように、
自分の言葉を増やしていこう。
言葉の数だけ、世界は豊かに見えてくる。
言葉の数だけ、未来は希望に満ちてくる。
言葉の数だけ、自分の可能性が開かれる。』

国語をなぜ、学ぶのか。それは、あなたの世界を作り出す、そんな言葉と出会うためであらうと考えます。

『たとえ与える影響は小さくても、 歴史をつくっているのは私たち一人ひとり…』

今年の8月は特に暑かった。そんな中、山口県で2歳の男の子が行方不明になった。祖父と海へ向かう途中に「家に帰る」と1人で引き返し、その後行方が分からなくなった。連日30度を超える暑さの中、失踪から68時間。見つかったのは、祖父が最後に姿を確認した場所からわずか500メートルの森の中だった。

発見したのは、大分県からやってきた搜索ボランティアの尾畠春夫さん（78）。尾畠さんが現地に到着し搜索し始めてからわずか20分ほどのことであった。実は、尾畠さんは以前にも行方不明になっていた子供を搜索した経験をもつベテランで、それ以外にも地震や土砂崩れなどの全国の被災地を駆け回るスーパーボランティアとよばれていた。

尾畠さんは、男の子の人生だけでなく、その家族の人生も救ったことになる。もし、その男の子が見つからなかったら、その後の家族の人生はどうなっていただろう。その後の人生で男の子が関わるはずであった人々の人生も変わったものになるのだろう。たった一人の小さな男の子の存在がその子を取りまく人々の人生を変えていくのである。

私たちは歴史上の人物やでき事と聞くと、つい自分とはかけ離れた遠い偉大な存在のように感じてしまうが、実は、歴史上の人物や彼らが引き起こすでき事も、私たちと同じように悩んだり考えたりしながら日常を過ごしていたのかもしれない。そう考えると、歴史上の人物やでき事は少し身近に感じられるし、私たちだって歴史をつくる一人であるということも感じるのではないだろうか。

『なぜ数学を学習するのか』

よく数学が苦手な人に『数学を将来使うの?』という質問を受けます。

職業としては、学校や塾の先生だけでなく、コンピュータ関連のプログラマーやシステムエンジニア（SE）、資金計画を立てる経理やファイナンシャルプランナー（FP）など世間には数学を使う職業が多いです。

また、数学と芸術の世界も縁が深く、対称性を用いた『タージマハル』、黄金比を用いた『ミロのヴィーナス』などに代表されるように図形の性質を用いたアート作品が数多く存在します。

タージマハル



ミロのヴィーナス



家紋



このように身の回りに多く存在する数学について、中学生の皆さんに学習を通して身につけて欲しいことは『物事の本質』を見抜く力です。

各章における数学の学習の流れは

①性質を理解する → ②計算の練習をする → ③応用問題を解く

という流れで行われます。

①②は部活動でいうところの筋力トレーニング。繰り返し練習して自分の力の下地をつける作業です。これは、大変地味で辛いですが数学を学習する上で大変重要なことです。

みんなの中には数学と言えば①や②と思っている人が多いですが、数学の本当の醍醐味は③にあります。③は①②の身に付けた知識を総動員して、問題解決に励む場面です。

しかも、解き方は無数にあることも多く、よりシンプルな解答へと練り上げることも楽しみの一つです。

数と式・関数・図形など様々な領域の知識を垣根無く、様々な分野に応用することもできます。

中でも、グラフの形状や特徴的な値から集団の傾向を読み取ることやすでに知っている知識をつなぎ合わせることでひとつの事柄が成り立つことを説明するなど将来、あらゆる場面で使うであろう考え方を学びます。

数学では大人になってから必要になってくるスキルを育むことができる大変崇高な学問です。先入観を抱くことなく何事にも関心をもって取り組むことができる学生時代に数学を大いに学んでください。そして、めまぐるしく変化する社会において想像力（imagination）を大切に『物事の本質』を様々な角度から解決していく力を身につけてくれることを期待しています！

『理科とは？そして、なぜ学ぶのか？』

今年の夏、金沢大学にて理科の授業を受けてきました。長い話の講義の後に、大学の先生がダイヤモンドダストを見せてくれました。マイナス20℃に冷えた冷凍庫の中に息を吹き込み水蒸気の量を増やし、LEDライトで照らされた空間に引っ越しで物を包む空気の入った小さい袋を「パチパチ」と鳴らし衝撃を与えると、付近の空間が波うち、ついにはキラキラと氷の結晶が輝き始めました。理科の教員でありながら「うわー、きれい！」と思わず声を上げてしまいました。そしてそのあと、自分の頭の中に「なんでこんなことが起こるのだろうか？」という素朴な疑問が生まれたのです。

「なぜこんなことが起こるのか。本当のことを知りたい」という欲求が脳裏に浮かびます。また、「うわー！すごい！」という感動の原因の本質を科学的に見極めたいとも思います。これこそが理科であると思います。物事の本質を知ること。本質を知るためには、①課題をもち、②自分なりに仮説を立てる。③実験、観察で証拠（データ）を集める。④考察して、まとめる。⑤そして新しい課題が見つかる。この①～⑤の繰り返しで、物事の本質（本当のこと）が見えてきます。まさに、この過程を学ぶことが理科を学ぶ意義であると思います。

本当のことを知りたいという欲求は、いろんなところに転がっているのではないのでしょうか。例えば、「宇宙に果てがあるのか。」「季節があるのはなぜ？」「チンパンジーが人間と99%同じとはどういうことか？」「人気ユーチューバーになるための秘訣は？」などです。ぜひ、皆さんも自分なりの「？」を科学的に解明してみたいと思います。

また、「なぜ学ぶのか？」という問いに対して、自分なりに必死に考えてみました。それは、自分にとっても深いテーマでした。「種の起源」で有名な生物学者チャールズ・ダーウィンの印象深い言葉があります。それは「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である」という言葉です。それは人間社会にも当てはまると私は考えます。急速な社会の変化に対応するためには、自らが変化（主体変容）していかなければなりません。変化することは、「これまでの自分を壊し、新しい自分をつくること」。新しい自分になるためには、「学び」が必要なのです。「柔軟に学び続ける」。これは以前、お世話になった方から頂いた言葉です。教える前に学びのプロでありたいと私は思っています。



『英語から広がる自分の世界』

「違う」って面白い！

Q：次の日本語を英語に直しなさい。

(1) いただきます。 (2) おつかれさまです。

(1) いただく=食べる="eat"、食べるのは自分なので"I will eat."でしょうか？もしくは、さあ食べようという意味で、"Let's eat."と言うかもしれませんね。

(2) 相手が疲れているだろうと想定した表現は、"You must be tired."ですが、ねぎらいの気持ちを表現するなら、"Thank you for your hard work."の方がニュアンスとして近いでしょう。しかし、英語ネイティブ同士の会話では仕事終わりには"See you tomorrow."と言うようです。

A：(1)、(2) の日本語の意味にピッタリと合う英語表現はありません。

「英語を話す地域」には、食事の前に作ってくれた人や食べ物への感謝の気持ちを言葉として表現する文化や、また仕事おわりに「おつかれさまです」と声をかけ合う文化が無いからです。

逆に、私たちにはくしゃみをした人に対して決まった言葉をかけるという文化はないので、"Bless you."という英語は日本語に置き換えにくく感じます。他にも日本語に置きかえにくい英語表現もたくさんあるはずです。

言葉の違いは文化の違いです。「英語」に触れることで、私たちは「日本語を話す地域」と「英語を話す地域」との文化の違いに触れることができます。

「伝わる」って嬉しい！

英語の勉強をして一番嬉しいことは、自分で話した英語が相手に伝わった瞬間ではないでしょうか？相手が自分の英語を理解して返事をくれたときに嬉しかった経験、みなさんもあると思います。外出先で海外の方と話すときや ALT の先生と話したときなどにそんな場面があるのではないのでしょうか？

英語は言葉です。言葉はコミュニケーションを取る上で必要な手段ですよ。しかし英語は日本語と文法が違い、多くの単語を覚えないと話すことはできません。自分が伝えたいことをどのように英語で言うかわからなかったときこそ、勉強のチャンスです！そうやって覚えた表現や単語はきっと自分自身の力になります。

世界の標準語は英語と言われているように、全く違う文化の中で生活している世界中の人と話すときに英語はとても便利です。英語が話せると自分が知らなかったことや新しい発見があるかもしれませんし、海外の友だちを作ることができるかもしれません。ぜひ英語の力をつけて自分自身の可能性を広げていってくださいね。

自分の住む世界を広げよう！

日本語だけの世界で生きるのはもったいない！違いを楽しもう！英語をツールとして使い、自分の住む世界を広げよう！

日本語母語人口：1億2500万人

英語母語人口：4億人

英語使用人口：5億1400万人

英語を公用語・準公用語にする国：54カ国

出典：Benesse 教育研究開発センターが選ぶ「調査データ クリップ！子どもと教育」

「する・みる・支える る・知る」スポーツ



保健体育科の大きな目標は、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することです。そのために学校の授業では小学校から高等学校にかけて様々な運動領域（競技種目）において「〇〇遊び」→「〇〇運動」→「各競技種目」と少しずつ競技の特性に触れながら段階的に発展させた運動を行っています。

最近では2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機としながら、各学校段階を通じて、運動やスポーツを楽しむとともに、その関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える、知る」等のスポーツとの多様な関わり方を育み、運動やスポーツがもつ価値を理解することが大切であるという「体育の見方・考え方」が唱えられています。

具体的に「する」は皆さんが授業や昼休みの運動遊び、運動部活動などがあります。「みる」はトップレベルの競技大会（オリンピックや国際・国内大会）やプロスポーツ（プロ野球やJリーグなど）のテレビ観戦、スタジアム観戦などがあります。「支える」は様々なスポーツイベントのお手伝いやボランティア、スポーツに親しむことができる環境の準備などがあります。「知る」は各スポーツの特性やルール、スポーツと自分自身の生活に関わる様々な知識を得るとのことです。

このようなスポーツとの関わりを豊かにしていくために、これからの中学校の授業では次のような能力を身につけられるように頑張ってもらいたいと思います。

- ① 各種の運動の特性や魅力に応じた運動についての理解と生活における健康についての理解を図るとともに、基本的な技能を身に付けるようにする。（知識や技能）
- ② 運動や健康についての自分や仲間の課題を発見し、効果的な解決に向けて考えたり、判断したりして、目的に応じて仲間に伝える力を養う。（思考・判断・表現力）
- ③ 生涯にわたって運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指して、明るく豊かな生活を営む態度を養う。（学びに向かう力・人間性）



『なぜ、美術を学ぶのか』

国府中学校美術科

気持ちよく晴れた日に学校の窓から見える白山を、「きれいだな」と感じたり、お店に並んでいる手作りの小物や雑貨を見て、「素敵だな」と感じたり、自分が「美しい」と思ったことに「心」を動かされる瞬間がきっとあると思います。



美術を学ぶということは、日常のそんな「感動」に気づく心を育て、伸ばしていくことです。

「感動」との出会いが増えていけば、きっと人生はもっと楽しくなり、もっと嬉しくなり、もっと豊かになると思います。

美術を学んで、いろんな発想や工夫にふれて、人生を彩り豊かなものにしていって下さい。

世界を変えていく美術の力

社会に求められている発想の力

今、私たちを取り巻く社会は、めまぐるしい変化の時代を迎えています。身近にある様々なものが、十数年前には全く違う形だったり、存在していなかったりしています。

重かった掃除機が、コードレスになり、今ではお掃除ロボットが勝手に掃除をしてくれます。当たり前のように使っているスマホも、ほんの少し前までは携帯電話が主流でした。携帯電話は現在、ガラケーなんて呼ばれていますが、そのガラケーが誕生したのは、今からたった30年ほど前なのです。

では、このような変化はどこから生まれたのか？



それは、どこかのだれかの「もっと、こうなったら使いやすいだろう」「こんなことができれば、面白いなあ」という、「発想」から生まれてきたのです。

より良いものを求めて考える力、より良くしていくために工夫する力、困難なことにぶつかっても、それを乗り越え立ち向かうための力。これが「発想力」です。

今から50年後には、今ある仕事の6割が機械にとって変わられるというふうに言われています。これから先の社会に必要なとされているのは、機械やロボットにはない「発想力」をもった人です。

美術の時間では、この「発想」をととても大事にしています。

自分で考え、工夫し、試行錯誤を重ねながら、作品をより良くしようと努力することを通して、自分のもつ「発想」の力をどんどん伸ばしていってほしいと思います。10年先、20年先、そして世界の未来をつくっていくのは、他でもない、みなさんなのですから。

『「人間形成」のために音楽を学ぶ』』



音楽は生活の中で欠かせないものと言われています。

人は、音楽を聴いたり、音楽を奏でることや歌ったりすることで、心が落ち着いたり、心が和まされたり、頑張ろうとするやる気が出ます。また、音楽を聴いて感動したり、涙が出たりします。

音楽を学ぶとこのような不思議な力が自然と湧いてきます。だから音楽には、感受性を育て、共感する力など様々な要素が含まれていると考えられます。そのため、音楽を学習することは、皆さんが大きく育つ要素があると言えます。さらに、合唱コンクールで多く人に自分たちの合唱を聴いてもらい、感動してもらい、音楽を愛する人を一人でも多く創り出すことも大切だと私は考えています。

音楽を学ぶことは、音楽面だけでなく、日々の生活習慣、豊かな人間形成のためにも大切な教科なのです。

『なぜ、技術・家庭を学ぶのだろう？』

答えは簡単。それは・・・生きるために必要だからです。

衣食住は一番の基本だね。

衣： 天気や季節によって種類を変えるよね、清潔を保つためにも着替えるよね。もちろん、自分に似合うのを選びたいよね。自分で作りたいときもある。そのための知識と技術を学ぶのが「衣生活」なんだ。

食： 生きるため、健康を保つために食べるよね。でも、好き嫌いをしていたり、保存や調理の仕方を知っていなければ、生活病になったり、おいしく食べられない。食べることは楽しみでもあるんだね。楽しく、そして健康になるための知識と技術を学ぶのが「食生活と自立」なんだ。

もちろん、生物育成技術も日々進歩しているから、いろんな食品を味わうことができるね。こちらの方は技術の「生物育成に関する技術」で学ぶよ。

住： 家に帰ってリラックスする。どんな家がいいんだろう？間取りは？災害時に強い、安全性が高まる工夫は？これは「住生活と自立」で学ぶんだ。

生活するには、商品の購入をするよね。今、いろんな商品がある。本物から偽物まである。トラブらない購入方法は？万が一トラブっても解決するためのよりよい方法は？

購入ばかりでは廃棄も多くなるし、環境にも悪影響が出るよね。どうしたらいい？そうならないために「身近な消費生活と環境」で学ぶんだ。

家族が生活する場が家庭。集団生活する場でもあるよね。ひとり一人の役割は？心地良い人とのつながりは？これを「家族・家庭と子どもの成長」で学ぶんだ。

もう一つ、電気もそうだね。これがなければ、もう生活が成り立たない。でも、電気は無限ではない。発電しているから限界がある。限界があるから有効利用しなければいけない。でなければ、江戸後期の超リサイクル社会に戻ってしまう。そうならないために、知識や技術を学ぶのが「エネルギー変換に関する技術」なんだ。

「情報社会」知っているね。パソコンやスマートフォンなどネットを通じて買い物をしたり、情報をやりとりしたり、処理したりしているね。この情報に関する技術を学ぶのが「情報に関する技術」なんだ。

生活するために必要な製品を購入するよね。たとえば冷蔵庫とエアコン。なければ生活が成り立たないよね。生活必需品だね。いろんなメーカーが製造しているけど、製品になるための過程や技術を知っている？その基本知識や技術を学ぶのが「材料と加工に関する技術」なんだ。

どうだった？全てが生活に密着しているんだ。私たちが生きる上で知っておかねばいけない知恵や技術を習得する、これが技術・家庭科を学ぶ理由なんだ。

『特別支援教育を学ぶ理由』

特別支援教育とは

人とは何かから始まり、目の前にいる生徒はどうであるかを考える。人間についての深い理解、1人1人への細かい理解が教育で必要とされる。

どこが苦手なのかという個人の理解、一般的にどうなのかという人間全般の理解、どのような気持ちをもつのか人間の精神の理解など、教育は人間を詳らかに知る分野である。特別支援教育とは、教育の中のこのような部分をさらに強調し、その原点ともいえる部分であると私は受けとめている。

特別支援教育で必要とされる要素

教育に限らず、あらゆる仕事で信頼関係が最重要である。信頼関係をつくるためには、相手と誠実に向き合う。言い換えると、うそはつかない、生徒を混乱させない、人間として疑問とすることはやらない、時に心を和ます等いろいろな工夫が考えられる。そして、その工夫は人それぞれであり、AさんとBさんとは全然やり方が違うかもしれない。信頼関係をつくったうえで教育のさまざまな以下の要素を有効に発揮でき、互いに高め合える。

(1) 道徳性

信頼関係を築くうえで、社会人としても必要不可欠な要素である。生徒を心豊かに育て、社会性を高めるためにも、道徳性を私は身につけたい。道徳性は奥が深い。道徳性と一口に言っても、社会通念上はどうか、人間として徳の高い生き方はどうか、人や社会にプラスになることはどういうことなのか、多くの考えるべきことがある、その答えも人により様々である。

道徳性を高めると言えば道徳教育が連想される。私は今でも道徳教育がよくわからない。どのような授業がよいのか、どのような題材がよいのか迷うことが多い。だから、自分自身の道徳性を高めるためにも、よい道徳授業をするためにももっともっと道徳教育を学びたい。道徳の授業だけでなく、教育活動全体を通して道徳教育の深い実践ができることを目指したい。

(2) 実行力

生徒にとってすぐに実践した方がよいことは積極的にとり入れることである。また、何がよいのか、改善・向上とはどのようなことか、その方策は何かを考え探すことでもある。最後までやりとげること、後始末もきちんとやることでもある。

具体的な実行力が現れた例は次のようなものと、私は考えている。一見難しそうなことでも進んで取り組める。必要な段取りを企画し、準備する。その活動がどのようなよい点があるかわかりやすく説明できる。

(3) 社会との関わり

教育は社会に出るために必要不可欠であり、その責任は重い。そして、教育と社会との関わりはますます強くなっている。目の前にいる生徒がどのような社会人になるか、どのような仕事に向いているかという視点を忘れてはいけない。そのために今はどのような活動をする時期なのか、資質を伸ばすにはどうするか長いスパンで見るとする。また、生徒が将来どのように社会に関わっていくか、今学校外でどう働きかけるべきかにも注意を払う。

社会の変化は速い。社会の変化にも敏感でありたい。例えば、教育の新しい視点からの方策、発想の転換などである。また、将来的にどう変化するか予測も立て、今の活動はそれにどう結びつくかという視点をもつ。

上記のような力をつけ、内面の力を引き出し、人生を切り開いていけるようお手伝いするために、私は特別支援教育を学んでいきたい。

『人はなぜ、学ぶのか？』

今年度3年生の総合的な学習の時間に『人はなぜ、学ぶのか』をテーマにグループ学習を行いました。このグループ学習では、昨年度のCompass of the learningをもとに、個人で学ぶ理由を考えてもらいました。また、事前にご家族からも学ぶことの価値観も伺い、グループでの意見交流を通して、人が学ぶ理由を改めて考えることもできました。以下の文章は、3年生の書いた『人はなぜ、学ぶのか』の振り返りの一部です。

私は今回の学習で今までは考えたことなかったことを考えることができました。例えば、具体的にコミュニケーションの取り方などを考えることができたし、グループ内での様々な意見交換でより深く学ぶことについて考えることができてよかったです。

『人はなぜ、学ぶのか』について考えてみて、自分が将来、人の役に立つために就職するためだと考えていたけど、他の人は自分とは違った意見で夢や目標を叶えるためや社会貢献し、自立するためなどの意見があり、その通りだなと思いました。これからは『人はなぜ学ぶのか』について、もっと考えていきたいと思いました。

人が学ぶ理由は努力するあきらめない強い心を育てるだけではなく、勉学を楽しむものでもあるということがわかりました。『学ぶこと』はなくてはならないものだということを改めて感じました。

学ぶ事は夢を叶えることだとわかりました。学ぶことで見える未来があると思うし、夢を叶えるためには学ぶことが必要だと改めて感じました。

『人はなぜ、学ぶのか』の学習を通して勉強は将来、社会に出て仕事をするとき、小・中・高で学んだことを生かせる場面が必ずあると思うので、これからは将来のために勉強を頑張りたいです。

今までは勉強なんてしなくてもいいと思っていましたが、この授業を通して社会人になるには勉強も大切ということを知ったのでこれからはもっと勉強を頑張りたいと思いました。

『人はなぜ、学ぶのか』と言う疑問から、みんなとの意見交流から、将来のためや自立するためなどたくさん意見が出ました。改めて学びには無限の可能性があるなと思いました。この交流を通して自分の意見をより深めることができたので今後の生活にも生かしていきたいなと思います。

僕は学ぶと言う事は自分自身の成長のためだけだと思っていたけれど、他のグループの意見で人の役に立つために学ぶと言う事を聞いて、「なるほど」と思った。だから、今日からは心を入れ替えて将来誰かに貢献できる人になれるように生きていきたいです。

『学ぶこと』は世の中に流されずに、しっかりと自分で考えて社会に貢献するために大切だと思いました。

人は生きていく上で大事な事は努力で、好きなことを努力して続けることが必要だと思いました。

いろいろな面で、学びは大切であることがわかりました。また、社会に出ると学んだことを直接使うのではなく、学んだことを活かして行動することが大事だということもわかりました。

学校を卒業しても、一生、人は学び続けることがわかりました。また学ぶことで社会に出たときに生かされることを知り、学ぶ意味を再確認することができました。

人は幸せに生きるために勉強するという意見にとても納得しました。私の人生を豊かにするためという意見とも少し似ていますが、幸せという言葉はととてもダイレクトに伝わってきて幸せになるためならもっといろいろ学んでみたいという気持ちになりました。また、友だちの家族の意見からは私が考えていた勉強観とは異なる経験やコミュニケーションなども勉強に含まれると知ることができました。

毎日生きていくこと自体が学習だとわかりました。日々、『なぜ？どうして？』と探究心を持ち、その『なぜ？どうして？』がわかったとき人は成長するとわかりました。僕はこれから『なぜ？どうして？』と疑問に思う事を一つ一つの『わかった！』に変えていき、成長し続けていきたいです。

学びがどう役立つかは人それぞれだけど、必ず何かの役に立っていることがわかりました。自分は今の学びが社会に出て役立つという実感はまだないが、学んだことだけではなくて、学ぶまでの過程も役立つと知ることができたので学ぶことを頑張っていきたいと感じました。また学校の勉強だけが学びではなく、人間関係やアルバイトなど、その他の様々なことまでもが学びになることも知りました。

『Compass of the Learning』を読んで、

A large rectangular box with a solid black border. Inside the box, there are 20 horizontal dashed lines, evenly spaced, providing a guide for writing. The box is empty, ready for text.

本書は、私が 2016 年から研修会の助言者として何度もお伺いしてきた小松市立国府中学校の 2017 年度～2018 年度にわたっての研究成果の報告書である。校長の西田誠一先生とは能美市立根上中学校の研究主任をしておられた時以来の古いお付き合いである。専門が数学ということもあろうか、緻密で論理的な研究の進め方は学校経営でも一貫している印象である。

学校の改革で重要なことは、スクールリーダーである校長の問題意識である。国府中学校は、授業は普通に進めることのできる学校であり、一般的には問題は非常に少ないという評価が妥当な学校である。このままでいいのではないかと思われがちな学校なのである。実はこういった教師の安心感こそ、今の日本の学校全般の課題であると思うのだが、西田校長は着任以来、さらに子どもを伸ばすという課題があることを心に留め、それを学校全体の課題として教師集団と共有化することに成功した。

行政からの研究指定があるから研究するという研究スタイルが一般的にはよくとられる。しかし、研究発表会を実施し、指定期間が終了すると同時に研究成果と研究的雰囲気は校内から霧散するという事例がほとんどではないだろうか。せつかくの行政の肩入れも、そこに学校としての内発的な動機付けがなされていないがためにセレモニー化してしまってきているのである。

新学習指導要領が示した学力観と、それを実現するための授業の在り方は、教育心理学的に見ても妥当性が高い。これまでの実践に疑問をもってきた教師にとって意味のある指針となっている。国府中学校の研究体制の背景に新学習指導要領があることを教師集団が共有することで、あるべき教育体制の方向付けがより力強くなされるようになった。国府中学校は内発的な問題意識のみから研究を出発させた。本来の学校改革の在り方の重要な事例である。

国府中学校では、改革のベースに主体的な学びと協同的な学びを置いた。新学習指導要領発表以来、ことばだけではどの学校も認識している。しかしどのように学校を変えていくのか、その方向性を従来の経験だけで摸索している実態があるように思えてならない。その結果、子どもたちが動けばアクティブ・ラーニングと勝手に解釈し、教師主導で子どもに発表させ、話し合いをさせ、ときには口々にギャを言わせ、その頻度が多ければいいと思っているのではないかというような実践が横溢している。新しい授業に関する研修会もその手の安易な内容が多いと聞く。

主体的な学びとは何か、対話のある学びとは何か、深い学びとは何か、形ではなくそれが学びをより効果的にする理由、そして背景にある原理を理解しないではそれらは実現できない。技法の集積では、結局教師が活躍する教師主導から逃れられないのである。

国府中学校では、主体的、協同的な学びを原理から学び、それを教師個人が受け止め、自分の指導理論の中に組み込んでいくという形をとった。教師の個性にしたがって試行錯誤を重ねながら、本物の学びを作っていくという図式である。校長をトップとした研究体制はそういった教師一人ひとりの学習指導論を支える仕掛けづくりを行ってきたという印象が強い。研究主任の岡崎剛平先生をはじめとした研究スタッフの研鑽と貢献は、見かけの飛躍ではなく、地道な発展を支える力となっていると感じる。

西田校長は、2019 年度は能見市立寺井中学校に異動となった。新しく赴任された坂口順一校長にのもて、国府中学校の実践研究は続いている。さらなる高まりが楽しみな学校である。このような学校の実践を紹介すべく監修者の一人となったが、監修は楽しい作業であった。

監修者

西田 誠一 能見市立寺井中学校校長（前小松市立国府中学校校長）
杉江 修治 中京大学名誉教授

研究同人

<2018年度>

西田 誠一	新井 徹	岡崎 剛平	辻 ひかる	上田麻里子
村中 生大	川端 曜	平木 絢子	村田 雅美	榎田 綾菜
宮越祐梨子	横川 浩将	山本勢津子	東野 和彦	吉田 信子
中村 光志	西辻 英恵	北田 彰	高橋 千秋	

<2019年度>

西田 誠一	新井 徹	岡崎 剛平	辻 ひかる	上田麻里子
村中 生大	川端 曜	平木 絢子	村田 雅美	和田 陽子
石崎稚奈美	横川 浩将	山本勢津子	村本 庸平	吉田 信子
田中 寛之	西辻 英恵	北田 彰	林 弘光	ブリギータ・マイヤー
高橋 千秋				

研究主任である岡崎教諭は、先々の段取りをする力に長け、堅実に研究を推進しました。研修会の目的や目標を職員にわかりやすく示すとともに、若手教諭（平木、辻教諭）と行った全教科の指導案検討を通し、研究の方針にそった授業づくりを提案、指導してきました。

授業を鍛える・授業で鍛える

一小松市立国府中学校2017～2018年の取り組み
(協同教育実践資料24)

2019年9月1日 第1刷発行

著者 小松市立国府中学校

監修者 西田誠一・杉江修治

発行 一粒書房

〒475-0837 愛知県半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

編集・印刷・製本（有）一粒社出版部(代表 都築延男)

〒475-0837 半田市有楽町 7-148-1

TEL. 0569-21-2130

ISBN978-4-86431-829-7 C1337

協同教育実践資料 24

授業を鍛える・授業で鍛える



ISBN978-4-86431-829-7

C1337 ¥1500E

定価 1,500円+税